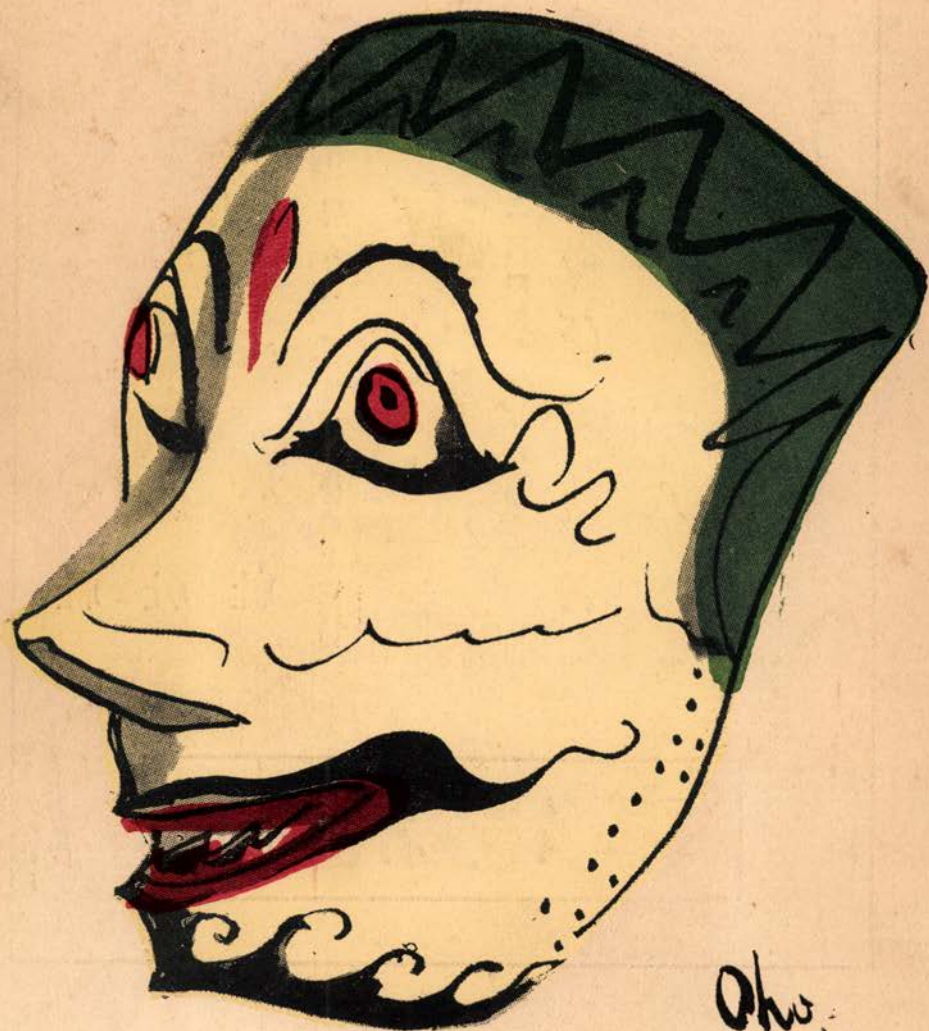


王 軒 · 麻 生 路 郎

川柳雜誌

新春特輯號



大正十三年三月三日第三號郵便物

昭和七年一月一日發行(每月一回一日發行)

第九卷 第一號

川柳雜誌發行

初詣で

官幣大社 大鳥神社

別格官幣社 阿部野神社

厄除 方違神社

四日福餅神事、七月初卯、八日初辰、開運御守、歳重祝、大豆授與

官幣大社

住吉神社

元旦より一週間開運厄除祈禱

厄除 あびこ観音

厄除 百舌鳥八幡

開運 住吉大黒福壽天

御問合—大阪難波案内所

案内書呈上

南海電車

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

ドーマポ椿豆伊

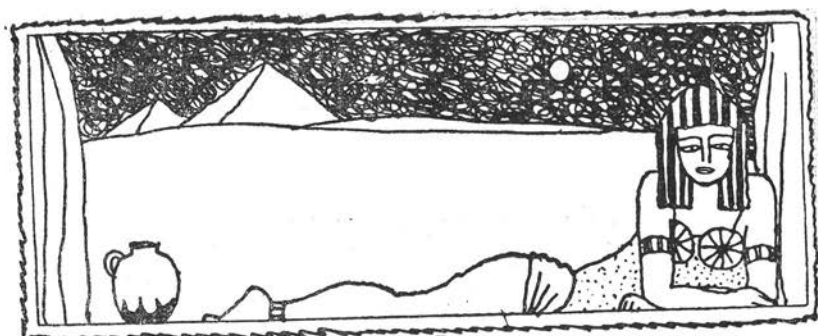
精の椿島大 一唯産國

輝
く
美
髪



伊豆椿香油本舗

いさ下用愛御に直今
りあに店薬品粧化名有國全



川柳雜誌 新年特輯號 第九卷 目次

不 朽 洞 夜 話
旗 洗 莊 雞 記
拳 闘 から 豆腐 へ
柳 の 翠 (九)
郷 土 作 家 か ぼ ろ

麻 生 路 郎 (四)
川 村 花 菱 (八)
川 上 三 太 (九)
長 野 吉 高 (七)
松 丘 町 二 (七)

日 本 柳 壇 (百 人 撰)

路 葭 五 閑 可 省 福 茶 山 蝶 溪 絲 塊
乃 葉 生 明 三 造 六 樓 郎 坊 雨 人

狂 華 劍 信 麟 素 柳 愚 綠 水 三 飴 南 花 半
花 之 太 ン 童 文
水 坊 子 二 人 路 陀 助 府 郎 坊 北 子 錢

不 京 寶 吞 三 雨 晃 白 春 雀 琴 周 柳
浪 年 眼 建
人 坊 醉 風 休 卓 于 秋 人 郎 健 寺

町 太 雞 叱 餘 汀 啞 柳 計 幸 山
郎 吃 牛 念

二 丸 郎 美 子 魚 坊 加 亭 秀 丸 男 門

濁 如 明 濤 文 映 夢 六 久 紋 萬 春 松
花 文 頁 下

水 空 珠 路 明 村 久 綠 錢 岐 太 雨 窓

亂 三 五 雅 東 吉 圓 角 迷 多 紅 玉 柳 夢
萬 洋 戀 太 兎 一
耽 福 幽 鬼 丁 角 坊 亭 聞 郎 朗 佛 兒

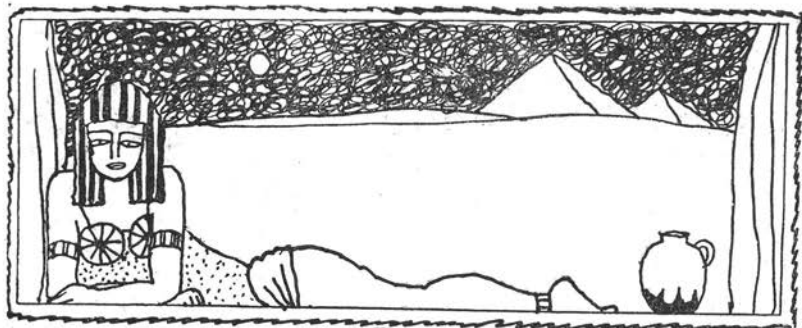
錦 默 久 杜 雨 巷 二 月
然 流 る 頭
水 人 美 若 迷 明 子 南 下

詠 古 史 狂 句 半 打
寶 の 帳 漫 興
川 柳 幽 明 無 線 電 話

岡 田 三 面 子 (四)
蛭 子 省 二 (四)
秋 農 屋 (六)

川 柳 書 架
續 川 柳 家 戶 籍 調
支 部 だ よ り
西 之 町 メ モ

係 福 田 山 雨 樓 (三)
松 江 支 部 (三)
松 江 支 部 (三)
橋 本 綠 兩 (三)

[illegible]

麻生路郎
大西長三郎
路郎生……(八)



不朽洞夜話

麻生路郎

數年前のこゝ、長崎博士に半折を頼まれた。

こんな句を書きませうと云つたら

金借りに行けば有馬の夏を聞く

こゝのを書いて欲しいとのこゝだつた。自分はその時酒を飲んでゐたので、そうですかと云はれるまゝに其の通りを書いたが、歸宅してから考へるに、原句は

借りる氣で行けば有馬の夏を聞く

であることを知つた。

その後、それが表装されたが博士も原句と違ふことに氣づかれ、矢張り原句の方がいいから書き直して欲しいとのこゝであつた。私も書き直すことを誓つたが未だに、その約束を果さずにゐる。いつか寸閑を得て是非共書き直して置きたいと思つてゐる。

萬よしで、ちよいと短冊を書かされたことがあるが、こんな句を書くのかと聞くに、萬よし君が立ちまゝに僕の句を云つて呉れるのはいゝが、原句と違つてゐるこゝがある。

それから新聞や雑誌を見てゐるに僕の句を引照してある場合に、矢張り少しづつ語調が變つて掲げられてゐるのを發見する。それが評論などに用ひられてゐる時には全然意味をなさないので興味を殺ぐこゝが少なくない。第一論旨が徹底しない惧れがある。「短歌月刊」こゝにふ雑誌に阿部靜枝氏が短歌に大衆といふ小見出しの下に、次のやうなことを書いてゐるがそれは短歌に限らず川柳でも云へるこゝである。その一部を抄録して見よう。

働け働けさなはわがくらし樂にならざり凝む手を見る

啄木

大抵のインテリの知つてゐるこの歌を尾崎孝子氏が演説會に用ひたのは成功であつた。忽ち受賣り辯士がふえた。一人の辯士が聴衆の前にそれを説明した。

——働いて働いてこんなにもまだけなけなしい大きな手凝り見凝める。猛然に資本家にさびかかたくなる手だ——といふのである。皆がうなづいた。末流の受賣りにゆく。

かせけごもかせけごもくらし樂にならず凝り手を見る。

さなつたが誰も笑はない。單純化の裏の深遠なものが解らないだけでなく、形式主義者の唯一の武器である定形の音律もピンと響いてゐないのである。短歌は大衆の生活は遠い遠いものである。云つてゐる。

阿部氏はアンチ形式主義者であり、定形の音律を不必要とするのかも知れないが、私は詩としての川柳に於て全然形式や定形音律を無視することを首肯し得ないのである。

それが證左にして、啄木の歌が、後者のかせけごもかせけごもくらし樂にならず凝り手を見るに變更された時の迫力の纖弱さに至つては全くお話にならないからである。

大衆の生活を深酷に描寫しつゝある川柳に迫真力のあるのは全く音律の強弱が大きな力を爲してゐる云つても敢へて過言ではないだらう。

私は極端な形式主義でもなければ定形音律を固持するものではないが、それ等の形式や定形音律を全く無視する時には散文の區別がつかなくなつてしまふだらう。

○

川柳の披露に就ては會て句會の席上で談じたこともあるが、披露技巧については、もつこく研究して欲しい。どんな句でも五七五調で披露されては全くやりきれない。句の持つ音律は作者の呼吸であるから、披露者はその句を披露するに當つてその作者の容が、作者の呼吸によつて呼吸し、聲調も亦内容にふさはしいものでなければならぬ。

披露者は又お國言葉や訛を避ければならぬし、尙又せき込まないだけの用意も必要である。

從來は選者が直ちに披露者である場合が多いので、披露上種々の缺點があつたが、將來は放送局のアナウンサーのやうに、専門の披露家が出てゐるような缺點を無くして欲しいものである。「思ひあがつた女よ、戀を棄て給へ」を「思ひあがつた、女よ戀を、棄て給へ」に披露されることは作者として忍び得ない苦痛であるから、現在披露に携つてゐる人々の研究はこゝより今後披露に携はらねばならない立場にある人々は是非共に述べた諸點について留意して欲しい。

披露は大阪よりも東京の方がうまい。井上花坊氏などはうまい方であるが短歌式朗詠で少しく大袈裟過ぎる。もう少し自然であつて欲しい。大阪では故人になつた小島六厘坊が上手だつた。小島君が披露する句がよく聞えたものだ。披露が拙い句が振舞ひ悪い。頭にスーッと這入りがねるからである。句會に於ける披露係はこの意味に於て重大な責任がある。



近作

麻生路郎

初日の出彼ミ彼の女が歩を運び
松の内を働く氣かミ誘はれる
玉撞いて出るミ夜霧の街ミなり

新町與太呂にて

河豚だ酒だ男ざかりのうれしけれ
ロボットか代書またたき一つせず



郷土作家かほる

松丘町 二

「嫁ヶ島流れてくるのかと思ひ」ミ緑雨が歌つた嫁ヶ島の近く、湖へ乗り出して架けられた料亭の座敷に、路郎先生の兼題「花」の披露は、三才に入りました。地の句

花道は相合傘の幅に出来

ご讀み上げられた利那、私はおや？と思つたのです。當時の松江柳壇にこんな色合の句をものする者はゐない筈だ、この疑念を驚きさが、瞬間の私の心を占めたからです。果して句主は遠來の珍客かほるさんでした。

かほるさんは理屈を抜きにして芝居が好きです。観るだけでは承知せず、眉を引き鬘をかぶつて自ら舞臺に立たねば氣が済まぬ程です。だから

八千代座へ十月に来て蚊に喰はれ

ミいふ句を初め、芝居に關する佳句は澤山ありますが、何ミいつても松江で得た「相合傘の幅」はその代表的のものでせう。かほるさんは生え抜きの大阪ツ兒です。申すまでもなく船場ミ並び稱される大阪の眞ん中

、ないだの禮を云ひ合ふ島の内

その島の内のはんちです。だがこのほんちは詩人に生れました。恐しくいゝ眼を持つた川柳詩人に生れました。かほるさんの物を觀る眼と表現の技ミに、云はゞ作家かほるの心境に、かほるさんの周囲や境遇が、大きな力で影響してきてゐることは否めません。たゞ我々は、かほるさんが、おつこりこした古典的な味ミと澁い色氣に、洗練された都會的色彩調の佳き調和をたゝへた周圍ミ、生活に後顧の憂のない境遇ミが、かほるさんの詩魂に影響するがまゝに影響させて、作家かほるの完成に不當な結論を導き出す危険もなく、生れた土地の良い點ばかりを心得して、詩の芽を養ひ生長さしてきたいふ、云ひ換えますミ郷土詩人ミし、郷土の性格をそのまゝ作家的性格ミして歌ひ出たミいふ、恐しく素直で潔癖な、それでゐるて抜き差しならぬ深さを藏した一資質を了解すればよいのです。

大阪は轢かれかけてもよい所
藏の戸を開けて母親せきをする

掛茶屋の猫今月はみもちなり
眼本を口に蛇の目はひろげられ

今日の都會は既に性格を持つてゐない。此批評家は申します
成程道頓堀にしても、千日前にしても、昔の面影は次第に薄れ
て、混血兒的殷盛を呈してゐるに相違ありません。併し少くも
も船場島の内は、まだくそのかみの残り香を色濃く吐いてゐ
るのです。北船場の一角は、高層建築が稀比して、漸く近代的都
市の面目をミのへるに共に、塗りごめ造りの老舗の風手は次
第に失はれてゆきつゝあるは云へ、そして又、松竹座のボツ
クスに、グリー・クーパーの魅力を語り、酒場の椅子にミス・
プランセかなんかの細巻を吹かしながら、小脇には「ソヴイエ
ト同盟の五ヶ年計畫」こいつの本をかゝえてるやうこいふ、モ
ダンいさんの數が次第に増えてゆきつゝあるとはいへ、船場
島の内はまだく傳統の美しさを捨てはいたしません。

さて、かほるさんです。かうした環境の中に、都會の持つあ
らゆる陰鬱な燥音を爆笑にいさゝかのわづらひも受けること
なく、色とりどりの都會風景を、雑多な人間の姿を、超然とし
て眺めつゝ、作句の筆を管めてゐて、そこにいさゝかの矛盾も
残さないかほるさんのやうな眼を、私は慘酷な眼だと思ひます。

櫻の宮うるしに負けた人に會ふ
菊の露口三味線にとけてゆく
おちよやんはあつちを向いて錢を出し
身二つになつておならをよく落し
キニービーの頭と枇杷とまちははれ

こゝにいふ慘酷な眼とは、素より作家的冷眼を意味してゐま
す。生活的情熱が、いつでも我々の川柳創作の直接の原因では

ありますが、出来上つた句がすぐれてゐるからないかは、一つ
に作家の眼の如何によるのです。我々はいつでも秀れた句に接
するときは、その作品の背後に光る作者の鋭い眼を感じるのです
かほるさんの世間を眺める眼、それはそのまゝ自分自身を守り
ぬく眼になつて表れます。こんな眼を私は、美しい慘酷な眼だ
と云ふのです。かういふ眼を現代に守りぬくことは、決して生
やさしいことではありません。

五葉氏の作品は、その一種獨特の臭さが、完成された持味に
なつて、妙な言葉ですが「洗練された灰汁」こいつた句ひが我々
をひきつけますが、かほるさんは最初から臭さを持ちません。
個性なきといふ四角な言葉は凡そ不似合な、それでゐる。にも
真似ることの出来ない獨特の持味です。不思議といふの外はあ
りません。

上敷の紙を押してゐる病み上り
貪乏の姿子供に子をははせ
子の寝顔酒の肴になつてくれ
春の海マツチをすれば消ゆるなり
新聞は今日の日づけの酒の粕

ですが、かほるさんを書く以上、只不思議だけでは、意味
をなさないならば、たゞへば、かほるさんは決して理屈を句の
上で云ひませんし（實生活でもさうですが）主觀を生のみで露
しませんが、渾然として在るかまゝに在ります。それはみごみな
技巧、鮮やかな表現です。

一體川柳は俳句が季感を尊び、季題を設けて、自然に對する
客觀的描寫を第一義とする叙景詩であるに反し、川柳は直接人

間生活の核心に觸れし、叙事詩であると共に、屢々抒情詩であるため、やゝもすれば下手な理屈が顔を出し、小さな主觀がのさばらうとします。そして、理屈は理屈なりに、主觀は主觀なりに、いづれ自分の個性を強調したつもりでゐて、多くは肝心のコンマを落してゐます。ピリオドを忘れてゐます。かほろさんは普通の顔で普通に歌つてゐる、ちゃんと自分の鼻の形は描いておきます。

利口さうに歌ふのも、馬鹿みたいに歌ふのも同じやうにやさしいが、普通に歌ふことは容易ではありません。普通云へば大抵の川柳家は普通に歌つてゐる筈ですが、その普通さは公には通じない。川柳家同志の一つのグループでは兎に角、詩壇へ持つて行つて獨り歩きが出来ない。そんな普通さを八度にすれば、かほろさんは恐ろしく異常です。特異です。つまりかほろさんのやうに、主觀的に表現して客觀性を失はないことは、餘程大したことだといふのです。これが私のいふ「普通さ」だといふのです。

(以下十句大正年代の句)

水からくりキッスされたり振られたり
ボアラの樹わさびに見えて冬になり
何んと無くコーヒ茶碗の處女に似る
うごん屋で子持は遂に坐らされ
失戀の影がピアノにまざくと
圍はれて本家のおかす聞いて立ち
蓬辰りをこぜの骨がのどに見る
辻うらが出さうに思ふもなかなり
踊から出て自動車黒い色
セルのはれもみく春の風をうけ
かほろさんの句の一つ一つについての説明は、たゞさへばヴァ

イオリンにしつくり合せてヴァイオリンの箱を造るやうなものですから、こゝには述べませぬ。私は前に船場のいこはんのある一部のモダン振りを述べましたが、たゞへて申せば、一人稱に傳來の「わて」を用ゐず「をれ」を稱して、流暢な大阪辯に石を投ずる彼女達の趣味も、決して斷髪はしないのです。これは母親の前に膝をまげ、來るべき島田髻を準備するためではなく、一にかゝつて阪神間に氾濫するダンサー群を、全大阪に跋扈する女給群に對する階級的防衛にあるとある人は申します。さればわがかほろさんも、時に

毒の赤き眼鏡が曇る

失敗へ石鹼入が錆びて來る

こいつた「をれ」に相當する句をものしますのも、別に不思議はありませんが、依然としてかほろさんの本質は

くどかれたのは南海のれきの宿

であり

目を覺ませば妻のいびきと子のいびき

であり

花電車牛が引いたら動きさう

であつて決して斷髪はしないのです。さて最後に二句

三味線の皮の白きも春らしく

靜物の鰭に淋しい秋となる

三味線の皮に春を感じ、靜物の鰭に秋の淋しさを思ふ、いかにも都會人らしい季節の觸感ではありませんか。

以上かほろさんを語るべく、大變粗末で元氣のない筆を耻ぢますが、若し人々が「變幻極りなき現在の熱烈な新への動向を考へる時、これらの作品は餘り長閑すぎる」こでも云ひますならば、かほろさんは答へて「川柳は私の顔です」を申しませう。「顔の造作は神様でも變へ得ない」云々。



第一線

路郎選

十二月不易糊にも用があり
突然に兄のたばこの火が觸り
雞音の中で斗六豆を賣り
蠅船の仲居おかるの様に居る
うめ過ぎた風呂へ春雨きこえて來
お寺はんごうしの話も又おかし
一も通り酌して尼は席につき
正直者にむごたらしき冬ぞ
いこも淋しく冬の木尖り
夢さ慾おゝ人生は四捨五入
枕許そろばんおいてささるなり
算盤が教へてくれる道をさけ

かほる
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
山雨樓
同
同
同
同

續川柳家の戸籍調

▽ 係 山 雨 樓

(一)姓名(二)雅號及別號(三)出生地(四)現住所(五)生年月日(六)職業又は勤務先(七)好きな句(八)自信の句(九)川柳以外の趣味(一〇)配偶者及子供の有無(一一)きらひなもの(一二)川柳に手を染めた年月

(1923) 矢野 錦浪

(一)矢野正世(二)錦浪(三)茨城縣(四)東京市芝區車町八(五)明治廿二年一月十二日(六)會社員、長瀬商會(七)貯める金貯つた金へ貯める金(八)成功の自分の噂聞きたがり(九)仕事(一〇)妻子あり(一一)怠け者(一二)明治四十一年。

(1923) 田沼瀧の人

(一)田沼升(二)瀧の人(三)神奈川縣(四)横濱市神奈川區青木町五三(五)明治三十九年十二月九日(六)横濱生命保險會社(七)天皇旗七千萬のほんのくぼ、三太郎(八)落着かぬ師匠を立たす踊りの手、机殻の明るさ暗さ朝の霧(九)旅行、旅に干するもの及蒐印一切、麻雀(一〇)妻あり子供なし(一一)大掃除、酒、これは生來飲めないものであります(一二)大正五年春頃十五歳頃雞俳より。

水呑みに出て星にうなづく
冬の抒情詩のボブラやボブラ
さむざむさ畫の雲の娼婦たち
冬の火事へ並んで立ちし妻匂ふ
乳呑兒とその母 二句
乳呑ます母親稻ががさり鳴る
赤ん坊をぶらさけて母野を歸り
ヴァイオリン夜の出番の室で鳴る
マスク掛けて御出かけになる社の整理
美妓はべらして罐詰さなる
友が手を貸してゐる鋸きれす
手内職陽は物干の端しにあり
五十三言ひ勝つ事の無駄を知り
天主閣けなしておいて見に出かけ
抗夫達事務所の硝子窓が癩
萬よし氏新聞を創刊す
無産者へ筆の刀も貸そさ立ち
ごの汽車も胃袋を運んで来たよ
ガラスの如くNOの答へ立ち盡くす

同 愚 同 同 琴 同 同 同 雅 同 同 同 町 同
陀 人 幽 二

(1914)

中井兎杵郎

(一)中井彦次(二)耳目洞、兎杵郎(三)大
阪市(四)兵庫縣武庫郡耳木村高木五一
六(五)明治三二年九月二〇日(六)米國貿
易株式會社(七)澤山あり、ベン(八)の走るま
ゝに(九)金借りに行つて將棋に勝つてくる、
七輪の煙に息子出たつきり、染達へ極月
二十八日(八)手探りの調子がついた段
梯子(舊)錢湯へうつかり俺は男なり(近)
宿命のたるみに生きて松の内(近)(九)山
旅、スキー、歌舞伎、落語、音樂、スポ
ーツ何でも來い。(一〇)妻、健。來春第
二世さび出す形勢。(一一)猫、商人の表
情、饅頭(一二)大正九年夏。

(1915)

綿谷摩耶火

(一)綿谷雪、キヨシ訓む(二)摩火耶、
別號惡美亭(三)神戸市か淡路洲本町(四)
東京牛込區藥王寺町十(五)明治三十六年
一月十七日(六)著述業(七)(八)書切れず
(九)雜學探偵趣味(十)妻あり子なし
(十一)思ひつかず(十二)大正何年か米國
排日法案通過の時に一句よみしが初めさ
思ふ。

(1916)

谷内靖弘

(一)谷内友市(二)靖弘、兎月(三)德島縣
(四)大阪市東成區片江町二〇一(五)明治
卅六年三月十六日(六)神戸市平野、餅菓
子商(七)ごの子もごの子も健かでお元日

名譽慾彼を乞食にして、了ひ
新古今簾のなかの戀に倦み
わが妻を人もこゝへなご歌ひ
焼け穴の疊の向きを變へて春
福引を子供に引かし慾があり
噓の話も返事して置く許嫁
戰爭の好きな養父さうまが合ひ
獨身の歩く姿もこしらへて
鼻筋が彌陀も通つてましなぬ
冬枯れた空に何をか言はんかな
面白や女房四十に追はれかけ
摔られた雪の金ミ子は知らず
氣の弱い事略血へさりみだし
あきらめて世を明月に見たりけり
猿の眼の窪みと俺の眼のくほみ
村落にかゝれば芋をむすにほひ
風呂敷の包み何んだい玉葱か
橋ミ自分の形が川面にうつる秋

閑 同 同 同 二 同 同 同 同 光 同 同 同 晃 同 同 同 計 同 同 同

生 南 路 卓 加

人東京碩榮高女ミ昭和藥學專門學校に在學して居ります、お互に淨い交際ですためベビーはありません(一)慶應ボーイぎのう太郎、古代盲想狂、戀敵、神樂坂(東京)に横行する不良女學生、足の太い女、鼻の低い女(二)大正拾參年防長新聞川柳欄に投句したものを最初として、積極的に作り出したのは大正拾四年拾貳月でした。

(296) 西田 艸 樂

(一)西田竹治(二)艸樂、玉岡庵(三)兵庫縣水上郡小川村(四)大阪市東區岡山町三七四(五)明治廿七年六月十八日(六)藥劑師、藥局經營(七)征服をしたる勇士の肩の中(句會で感心しました)機見女、溜息で見る香具山は疊つたり(路郎)(八)未だ會心の作なし「南丁」を持つた手へ「雞商はれ」天聲人語子が見つけて呉れました(九)旅行文學書を読む事、謠曲、觀能、歌舞伎(一〇)妻あり二女一男を持つ(一一)オールバック、お世辭(一二)趣味を持つたのは大正七年頃、作りかけたのは昭和五年夏。

(298) 清水 白 柳 子

(一)清水清(二)白柳子(三)石川縣小松町字西町九〇ノ一(四)大阪市東區空堀通一

正直のゆく道家が建ち並び
サービスのロボットじみたお正月
苦境から抜け出た様に炭をつぎ

亡き母へ

好きも嫌ひもない僕になりました
日當りに生きて居るのを忘れて居
全快の日まで國へは知らすまじ
馴れくしう扱はいくらか貰つたナ
處女らしう誰に見せうこ乳バンド
ぬかるみを歩いて藝者親の家
催促に来て子供等に賃をやり
おばさんが寄つてお芋の話なり
耳かせば米磨ぐ音の聞ゆのみ
起きたての眼に大根の白さかな
四五日見ねば濕布してくる
驛を出て香具師さくらは道を替へ
物干しへ髻も應接する時雨
カンテラの風呂にほんやり風を聞く
釜風呂へやつミ片足入れて見る

鮎美 同 華水 同 變人 同 奇可愛 同 春秋 同 夕鐘 同 奈緒美 同 桂枝 同 蒼太 同

丁目七六(五)明治三十八年三月二十一日
(六)土木建築請負業東尾組(七)徒然の社
長に妻や子を聞かれ(東生)(八)一句を殘
したいと努力して居ます(九)義太夫、讀
書(一〇)妻と女の子一人(一一)取立て申
す程のものはありません(一二)大正十二
年春頃から翌年秋まで中絶、昭和五年五
月から再び勉強してゐます。

(三〇) 山本丹路

(一)山本良藏(二)丹路(三)大阪(四)大阪
市住吉區住吉町九五二ノ一(五)明治四十
三年三月二十八日生(六)失業中(七)人妻
のあまりに長き袂なる、名をすてて十七
八の戀もせむ(八)石蹴れば秋の音してこ
ろびゆく(九)文藝、運動(一〇)なし(一
一)新らしがる人(一二)昭和四年八月。

(三一) 石曾根民郎

(一)石曾根民郎(二)民郎(三)松本市大名
町(四)松本市大名町(五)明治四十四年八
月十六日(六)父の印刷業を補助す(七)枕
する外に淨土の見あたらず(京郎)(八)う
ぬほれるには未だ幼稚です(九)江戸時代
の獵奇、落語(一〇)御座いません(一一)
手紙の返事を呉れぬ男、古川柳に云ふ油
虫、固まつた男(一二)昭和五年正月號の
「川柳雜誌」に舊號らつばで投句して以來

三味線のあるのを子供見てもごり
 ハンドバックを持たされてゐるW・C
 笑ろてくれな回数券が買へるかい
 酔ひしれて年増は笑ふ事も出来
 笑つてばかりゐる男を撲りたき
 雪降る——出雲製織株式會社
 あてられずフット淋しい隠れん坊

林園長を見舞ふ

かなしさは野生のさがを間違へず
 月給の手前割當いなまれず
 酒のみに酒を強ひるも遊山なる
 當然の様に社長は晝寝をし
 子のない男猫にかゝれたさいふ
 十二月金より誇り氣にしてゐる
 ビストルの冷たさ思ふ十二月
 結束を反對側は可笑しがり
 ふさ見付けたり娘の深呼吸
 生活線のたるみへ溺れはじめたぞ
 見下ろせば強く生きよミ山の呼吸

裸人 同 艸 同 緑之助 同 水車 同 夢裡 同 明珠 同 翠夢 同 濁水 同 圓角 同 觀月

川柳書架 (四六)

川柳年中行事

西原柳雨編

▼例により本書の自序及凡例の二三項目を掲ぐ。

一、本書は目下編纂しつつある「川柳風俗志」中の一章として起稿したものであるが思の外句數も多く紙員方に六百八十頁の餘になつたので、寧ろ別冊として上梓した方が讀者に取つても便利であらうこの版行書肆の意見もあり、かた／＼急に變更して別々に發行することにしたのである。

一、本書の目的は、川柳の方面より寶曆代前後より天保代前後に至る約百餘年間に亘る戸に於ける年中の行事を窺はんとするにある、但し左の三項は例外として御断りして置く。

一、苟も此の目的に適するものは狂句も駄句も除外せぬ。

夜學生靴を磨いて何にする
蛸配にあせる會社の屋根の色
深閑にして一人の世になりかける
釜の蓋まだかゝる妻の留守
サボテンの野心ごこまで伸びる氣か
エブロンのお様市場まだ知らず
凡情の吞めば寂しき酒にして
うつぶんを晴し淋みしき床につき

◇

梨のしん鶏に手のないのが淋し
叫び聲顔ばつかりに女見え
不良少女のあゝ五六歩を意識する
幾度か踏まれ蹴られていても錢
滿壘の惜しいところで株になり
素振りにもせよ嬉しさを犬は見せ
人間が嫌になつたさ借りに来る

母の死二可

ゆく秋を淋しうたざる正信偈
お天氣をほめて悔みの足しにされ

同	同	不	同	同	卯	同	同	勝	二	雪	丹	紅	慕	秋	錦	同	民
		然			三					峰	路		秋	月	水		郎

2、江戸以外のものでも特に著名なる各地の祭禮神事等に關する句は蒐録する。

3、江戸時代以前でも特に著名なる舊例古式に關して推咏せられたる句は遡つて蒐録する。

一、行事中特に花柳界に屬するものは「川柳吉原志」に、芝居道に關するものは「川柳江戸歌舞伎」に蒐録し置きたれば、本編には殆んど其の全部を省除したことを申添へておく。

▼本書は行事に關する説明を主材として各部に屬せる句の下へは年號の略符を附記し、句の上へは簡單なる註釋が加へられてある。著者はかゝる道の研究者として既に定評がある。本書の如きも時代の風俗世相を知るの好著である然し現代作家の創作上の血となり、肉となるには縁の遠いものである。

▼昭和三年八月五日發年定價參圓八拾錢
四六版六九六頁東京市京橋區南傳町
二ノ六春陽堂發行。

曉の雞聲

ステツキをついた姿にまたあきれ
鶏の聲に 田家の 起き揃ひ
病人の 眼へ 干物の 白すぎ
秋の夜を ひきりうつて 圍碁の本
貧しさへ せめて 家柄言ひきかせ
金額の方から メニユー 眼を配り
ゆるく させめる 如くに 金を借り
一握の 砂から 離れ 冷へし 手の
足ミシン 秋深まるを 裾に 知る
よう 食へて ゆくに 勿體ない 不平
集印帖で んで 本堂へは 寄らず
悲しさに 呼ばん ますれ 天高し
神も 否定しない 葬列 暮れ かり
柿盗りに いた 草の 實がついて みる
割前を さられる 顔の 面白し
親方は 江戸つ子 小僧 京育ち
湯葉 高野れんこん 佛の日を まつり
感情を 殺しきれない 障子にし

没食子

同

佐保蘭

同

柳兒

同

如空

同

志郎

同

盧白

耕民

湖山

素萌

丁路

翠峯

方眠

木偶人

第一卷 川柳大學

大島 藩 明 編

▼本書の巻頭の御挨拶に一項をぬく。

一、現代の川柳を見るに所謂傳統、革新の二派に分れる様ですが、兩派とも川柳園内にある以上は我等は一の藝術として飽迄尊重し同時に大いに學ばんとするものであります。

▼本書は諸氏の一家吟を集めたるもの。

大正十五年八月五日發行定價壹圓五拾錢四六版二三〇頁。

大連市西公園一四五番地大連川柳會發行。

ちかごろ

山 雨 樓

妻「あなたキンカイキンてなあに？」

夫「そんなにお美味かないよ」

ミ云ふ小話を見た。堅い記事の合間にこんなユーモアが挿まれてゐる。引立つものだなあと思つた。川柳であつたらぎんなものかしら。俳句は季を入れる、川柳は時代を吸ふ。そんなことも思ひめぐらせて見た。

○ 朝子供を痛く叱つて感服せしめたその日の晩、心から子供を可愛く思つた。しかし僕ミ云ふ父は輕卒な臍を靜かに嚙んでゐた。



旗洗莊雜記

川 村 花 菱

○
全く川柳から遠ざかつて居るにかゝはらず、毎日いろいろの川柳の雑誌をいたゞいて居る。小さいうすい雑誌が配達されて来るミ、私はそれをすぐふところに入れて、そのまゝ家人に遠ざかつてすぐに讀む。それが私の毎日のたのしみの一つだ。

川柳の雑誌のそれ／＼には、必らず、それ／＼の型がある。にはひがある。いたゞきながら批評するのは失禮なやうではあるが、いつも只毎月の雑誌を出して居るミ云ふ丈の、何等生氣もなければ迫力も持たないものもある。いやに氣取つた、納まり返つたものもある。ある人の創り出した様式を、そのまゝ取り入れて居るものもある。それが一つの時流に投するやり方で、さうした傾向が時代を表現したものであるミ云へばそれまでゝあるが、私としては、あくまでも個性を中心に物を考へたいと思つて居る。徒らに元氣ばかりで叫ぶミ云ふ事も片腹いたいものではあるが讀むものに何がグワンミこたへるミところのあるものがほしい。雑誌の様式内容に於てばかりでなく、作句そのもの

のにも、未知の柳友がしたはしくなるやうな作品に接し度いミ希つて居る。

いたゞく雑誌の中では、「國民川柳」ミ「川柳雑誌」が二つとも氣持がいい。「國民川柳」は何ミなくおかしい一種の愛嬌を持つて居る。比べては失敬かも知れないが、柳家金語樓の野球のなしを聞いているやうな感じがある。三太郎君が、會員を統一して、丁度それが野球の名監督のやうに、指一本で自由にし、耳をほくろをつまむ事によつて、いろいろのサインが出るミところに、一種の妙を思ふ。はじめの中、「句屑」がたのしみであつたが、段々つまらなく平凡になつて、さう／＼止めになつた。やつぱり作家は雑誌なんかやつてはいけないのだ、黙つて作句すべきだミ私は思つた事がある。經營ミ作品ミはどんな事をしても兩立しないものだと思ふ。會員は作家ミ云ふよりも選手ミ云ふ言葉で云ひ表はしたいやうな方々で、三太郎氏はそれに一生懸命練習をしやうミして居る。よくチームワークはミのつて居るが、惜しいかな一人の名投手も、ホームランも居ない。

新人に對しては、先づ選手としての基礎を教へて居る事は、いゝが、一ぱしの人に對しては、そろ／＼カーブを教へて見たら、怎かと思つて居る。柳樽が直球なら、武玉川はカーブなりスローボールなりだと思ふ。

○

「川柳雜誌」は、長年やつて居るが、マネーシアの考へがまだ一定しないやうだ、試合の都度策戦が變つて来る。そこに將來がいろ／＼に期待されながらも、本當に強いのか弱いのかよく分らない事がある。時々「慙ふ云ふ風に投げるのだ」ミ路郎主幹が巻頭で五六球をなぎるが、やつぱりすばらしいなあと思ふ事があるかと思ふ、こんでもないワイルドボールをなけて面くらはせる所もある。それで居て、別に「失敬々々」これも云はずに居るところが鳥渡ふざけたやうな恐ろしいやうな感じがする。ユニホームを半年に一ぺん位取りかへるが、その色の系統はやつぱり青だ。そこに若々しさがある。

とにかく、命がけで投げる死ぬ氣で打てを教へて居るが、チーム全体がその意氣で居るか怎か、いさ／＼かビツクアツプチームの感があつて、サイン通りに行かないうらみが無いでもない別動隊に女軍がある。これは決して女給チームでない。球さばきもよし、氣も利いて居て、まことに品よくまごまつて居る私は此の一軍をいつものたのしみにしてながめて居る。

「國民川柳」がせまいグラウンドにいつも多くの觀衆（ミ云つては失禮かも知れないが）を集めるのは、三太郎君に曲藝があるからだ。「川柳雜誌」が方々に廣大なグラウンドを持ち、多くのリーグを押へては居るが、あまりに廣すぎて、觀衆は何處に中心があるのか分らずに、さうも集りがわるいミ云ふ感じがある。路郎君に曲がないからだ。ノックばかりして見せたりして少しもヘラ／＼させないからだと思つて居る。

けれど、何ミ云つても、東西の一番いゝものだ。兩方とも、グン／＼延びてもらひ度い。（續く）



拳闘から豆腐へ

——これは葎乃夫人がおやつの時
讀んで下さればそれでよろしい——

川 上 三 太 郎

葎乃夫人から手紙が來た。餘り見馴れない黄色い日本紙へプ

リユーのインクで書いてある。一センチ半位の字だが流石に脱

字のないのに感心した。その文面に依るに、麻生君は此の頃朝の八時半から夜の十一時すぎまで働いて居るさうだ。もつこも雑誌で麻生君が何處かに勤めて居る事は知つて居たが、そんなに動いて居ることは少しも知らなかつた。朝の八時半から夜の十一時半なんて僕は柱時計を見上げながら、計算して見やうとしたが、連も出来なかつたのでギョツミしながら慌てゝ計算を止めてしまつた。兎に角人間が餘り働きすぎる事に就いては僕も共鳴して居る麻生君だ——一寸困つた事だに當惑した。その内寒い夕方になつてフト日比谷に拳闘があるのを思ひ出して出掛けた。拳闘は僕のやうな鈍感な人間にも一脈相通する躍動がある。十時頃銀座へ廻つてピカデリーへ寄つた。ウ井スキーを五六杯も飲んだかな。自動車へ乗つて時計を見たら十一時半だつた。僕は卒然として麻生君に呼びかけた。

「君。今夜は少し僕もお手傳ひしたつもりだが……………」

蝸牛二匹ごつちも勇ましや

○

それから一寢入して午前四時、僕は机へ向つて居た。火種が辛うして鐵瓶の中を湯にして居る程、寒氣は骨々身に迫る。僕は時々その鐵瓶の中へ萬年筆を持つ方の手を突込んで手をかじかせないやうにして字を書いた。今頃は麻生君も寢て居るだらう。他の友だちも大概は眠つて居るに違ひない。さう思ふに何だか安心なやうな、それから又悲壯なやうな氣がした。

「渡るに易き安城の、名は徒らのものなるか——」

これは日清戦争の時、白神源次郎といふ喇叭卒が、一番最初

に彈丸に當つて引繰り返つた時の歌だ。——僕は此の軍歌を思ひ出した。さうしてうろ覚えながら唄ひ續けた。

「敵の打ち出す彈丸に——」

但し僕の書いて居るのは滑稽小説だ、——「僕は啞である」。

我が肩をいたはつて居る 醉拂ひ

○

その中しろく一夜が明けて來た。冬の夜明けるのは何だか、かたくりを溶いて居るやうな氣がする。僕の周圍には書き損ひの原稿用紙が三十枚散亂して居た。たつた四枚しか出來て居ないのだ。階下も家人が起きたらしい。二階の僕に氣兼ねながら朝の支度をして居るやうだ。僕は僕のやつて居る仕事は實に下らないものだと思つた。有害無益なものだと思つた。僕は立ち上つてトン／＼階下へ下りて行つた。家人は僕の顔を成飛車の前に居る歩みたい顔をして窺がつた。

僕は慙々大きな聲で言つた。

「書けた／＼。腹がペコ／＼だ。飯にして呉れ——」

臺所は俄かに陽氣になつた。さう／＼、それでなければ不可ないのだ。さうさせる事が僕の仕事なのだ。僕は黙つて子供を抱いて庭へ下りた。

嬉しやな子供を抱いて 陽を探し

○

結婚後十四年にして僕は初めて人の子の親になつた。さうして亦初めてそこには親の世界といふ妙な世界のある事を知つた。先づ赤ん坊が生れた時、第一に痛感した事は、實に僕の近所に

は、品川には、東京には赤ン坊が澤山居る事か——さういふ事だつた今までは少しも氣がつかかなかつたが、物干さういふ物干、そこには晴れて居れば晴れて居る程子供のもで充滿なのだ。第二に感じた事は僕は今迄赤ン坊さういふものは、只一列一體にオギヤア——さういふ喋いて居るものだと思つて居た。ところがそれがさうでなく、その一啼き一啼きはみんな言葉になつて居るのだつた。

「僕は眠いんだア——」

「僕はお腹が空いて居るウ——」

「僕は退屈だよウ——」

その他病児はそれ／＼病氣を訴へる事だらう。だからそれは世界の赤ン坊はみんな喋べつて居るのだつた。さうしてその言葉の二つ三つが僕にも解るのであつた。あゝ何と懐かしい事ではないか。

赤ン坊の口よ尖ンがれ好奇心

○

雅鼓——マサコ、これは僕の赤ン坊の名だが、その雅鼓は母乳が不足なのでドライミルクを飲む。川村花菱氏からクリームさういふのがいい言はれたので、爾來それを用ひて居る。一罐七圓で一箇月に三罐位飲むのだから、へたな書生ツポの下宿代なんか、法律なんてエものは勉強して居ないで、故郷へ歸た方がいゝだらうと思はれる位だ。そのクリームを買ひに時々僕が使する。夜の灯の裏を踏んで、大きな罐を、脇に抱へて、／＼

歩いて居る僕を想像して見たまへ。僕は家へ歸つてその罐を膝の前へトンと置いた時、フト松王の首實儼の洒落が何と此處で出なくつてならない處だと思つた。さうして口を開いた。だが僕の喋べつた事は違つて居た。

「始終ウンチは氣をつけろ——」

何時もよく寝る子守唄それで寝る

○

冬の日には實にすが詰つて居る。四時ださういふにもうベンのが心許ない。彼方此方で豆腐屋の聲がする。僕は實に豆腐が好きだ。ところで晩には一杯やるかな。鯛ちりもいゝな。斯う寒い牛肉も悪かあないぜ。鰯の子を金網の上で焼いて、ブツブツいふ音を聞きながら飲むのも冬らしいではないか。それさういつそ日比谷の山水樓へ支那料理でも食ひに行くか。然し外套へくるまつて銀座のカフェーでチビ／＼尻を落ちつけて居るのもオツだらう。ボンチ軒のカツ、小川亭のシチウ、有樂軒のテキ、それよりもつゞいてゐた日本料理の方が、今日のやうな天氣にはふさはしからう。さて——さう勇氣凜然突つ立つた僕の眼に、火鉢の上から／＼さう立ちのぼるのは粥のはかない湯氣だつた。あ、さうだ、僕は胃が悪かつたのだつたつて——豆腐にしやう。

佗びしに胃を叩いて食ふ豆腐

鳴子繩ミリタリズムの音にかはり
片岡鐵兵入刑
終の散るを見つめて腹の立つ
米の値に父の思想も變つて來
霞、霞、蝗は動けなくなつてゐる
戀しなよ、案山子にはにらんでる
熟柿に夕陽がたゞれてる
奥上州温泉にて
紅葉の奥もこれまで瀧の音
捨石の如くチップをはづんだり

同 東 松 天
京 江 痴
同 根 人
同 羅 門
同 蒼梧樓

さぐる腫に合ふをおそれぬ
施療院にて
生きながら葬られてる氣安さ
愛用のスキーよ
又冬が來るがお前に用はなし
正信謁何時か眞面目に讀んでた
捨てられた密柑の皮のものおもひ
生活の明日をおびえた鼻の汗
氣を暗く座れば柿の實が落ちる
蘭の葉の先が落ちつく秋日和
決心をにぶらすお前の片ゑくほ

同 養ヶ池 同 青 鬼
同 同 同 同 同
同 大 阪 同 同 同
同 神 戸 同 秋 彦
同 御 影 斗 光

山作柳村

ひ ろ し

選

念佛の咳も母には有り難し
從兄妹だこ云ふのに君はなぜ笑ふ
マドンナを掛けてゐる氣が知れぬ兄
學問をさせて不孝の子に育て
スケッチへ風をはらんでゐるヨット
アスハルトカラくくミ寒い也
社則には家族的に書きてあり
ひがな一日回轉椅子にM.C.C
蘇鐵叩いて底値だこ買はされる
平凡なる結婚
次に來るその運命も知れたこ

大 柳 次
阪 雨 來
大 蘭 山
阪 菊 路
同 おさむ
同 小柳子
名古屋 きよし
神 戸 天 來
大 阪 南 面 子
大 連 三 碧

戀のない退屈ラヂオ聴いてゐる
カモを見付けて女給は酔はぬ
始業ベル喧嘩分れこなつたまゝ
傷ついた人生のリレー選手です
隣人へ送る微笑をこがめむや
蹴飛ばされたで生きた栗の實
カムフラージュ五十が近いこはみえず
つんほ栗朝の散歩の手に溢れ
借りに行くみちで胡蝶を一つ買ひ
軍人の妻に滿蒙地圖の色
この子が女ならこ賣るつもり

大 宏 明
同 同 同
同 同 同
同 御 影
大 阪 同
同 石 川
同 深 日 村
奈 其
名 古屋
大 聖 寺
白 花 子
七 笑
皓 平
酸 羊
夜 王
湧 三
斗 光
吐 句 坊
み っ る
宏 明

希みを捨てた日だ空は晴れてゐる
 薄化粧ほんのり香ふ 体重日
 切られても切られても死なない夢でした
 薬屋根の下に掙たゞ従順しい
 鎌を磨けば 闘心が湧く
 夫婦愛多忙の中にさへ匂ひ
 薄情の長い背中があるばかり
 紙魚の銀たゞければ秋の陽へ光り
 そつこしておきたい疑問妻へもち
 肝油を飲んで級長ひよる長く
 笛を吹く此の青春のたいくつさ
 抱かれる三父ちゃんの子母ちゃんの子
 バスガールやはり娘の顔であり

施療院にて

行樂の秋だ空から眺めてよう
母が字である松茸の包み解く
ポマードの艶で並んだ出納課
口笛の丁稚へ空は晴れ 渡り
湯たんぽの冬が父やら母に來る
振り向いた氣配晴着の脊な知る
金の要るこさばかりに今日も暮れ
振りきつて出たがお金は欲しかった
青びょうたん云はれしが衰へ少年の頃

Tプロフェサーへ

神様お許し下さい生徒は寝てゐます
妻だけが俺の心を知つてくれ

大彦	大東	名古屋	同撫	同大	同餐	同大	同松	同大	同松	同長	同餐	同
阪根	阪京	古屋	順	阪	ケ池	阪	松	阪	江	野	ケ池	
憲	川	鳳	同深	同八	同松	同	同陽	同常	同繼	同有	同靜	同
坊	規	石	太	步	雨	一	女	盤	二	爲	太	
清樓	九	同	棟			笑				郎		

べつこりこ櫛に雨夜のささぎころ
アトリエにて

天鵝絨に吸はれてゐる眼よ肌の艶
いつはらずぐろ眞赤な口をあけ
ラヂオ聞えて下宿の灯の冷し
あゝ冬が來た櫨の木の色葉よ
すき腹に女募集がうらめしく
發表まで生ける氣懸賞出して見る
靴直しの欠伸へベルが揺れてゐる
結立の髪へ電燈の明々
わなあれぎ掛けてはならぬ人となり
その次は家主獺の皮で来る
故郷の舌觸りかな吊し柿
瘦せても枯れはせぬ也百性
圓滿な男戀には恵まれず
話したい事とはつまり金の事
順序ミは思へぎ悲し巻線香
一等が笑顔で父兄席へ来る
成行にまかせ麻雀打つて居る
すいがらの様に浮世へ捨てられて
日曜日少さい足で蹴起こされ
憂鬱をあざけつて電燈バツミつき
國難へ風愈々に吹き募り
十字街巡查明るい方へ向き
踏切番無事に勤めた夜を呑み
見送りへ舟は一回廻つて出

松本	大羽衣	大阪池	荻ヶ池	大荻ヶ池	島根	金澤	大島根	愛媛	熊本	高知	大島根	松江	大坂	愛媛										
正司	愛緒	錦石	古不二	舟路	岩石	兎美	素月	柳光子	晴山	今雨	宵吉	傳重	青兒	英賀夫	一久	水人	鐘生	比呂詩	仙掌	鴉天	里美	巷二	千春	十九坊

大愛大郡大神大滋大高	大島大大大	滋大伊大大豐島大
阪媛阪山阪戸阪賀阪岡	阪根阪分阪	賀阪豫阪連中根阪
かすま 白柳子	路左 白映	幽西沐薰有草葉 光も英天三里光 坊英子
静 香	與詩夫 白峯	
坊茄子 幸材		
詩郎		
右月		
青米		
世都象		
鯉友		

頸髀をぬけば秋空晴れて居り
 寝るだけを目的に生き
 食ふだけは儲けて居ます露次に住み
 キツスする様に火鉢へ顔をよせ
 小松 青嵐
 金澤 花曙
 神戸 繁堂
 京都 軒兒

選後感想

僕の選は少し嚴選に過ぎるようである。それに過去一ヶ年間に僅か一句しか、自句を示してならぬ僕には或は選者としての資格がないのかも知れぬ。だが僕は自分を川柳詩人でないと考へた事はないもつともよき選者だとは思はない。だからお前に選者の資格がないといふ事なら、いつでもやめてもいいと考へて居る。然しよき選者でない僕を承知の上で（もつとも雑誌の上で決めてゐるのでやむななくかもしらぬが）句を托されてみると、僕の選句態度に幾分の承認を與へて頂いて居ると思ひ、本年も妄選を續け諸君を失望に終らせられるかもしれない。どうか意に滿たない選句、或は自信句の没に對しては、お互によく研究をしてみたいと思ふ。

今年は僕も新しい境地に生きた川柳が生れそうだ。それはすばらしい事が起きそうな気がするからだ。それがどんな事に判然とせぬ話だが、なんだかそんな気がするのである。こうした夢をみうるといふ事は最近の僕には、珍らしい現象なのである。

ひろし生

私 と ○

るゐてつ上來出で「○と私」は界世
あて疑問がかるあて何わ「○」のそ
の「○」のそに友社人同でこそ。る

(局輯編)。ため求な放解

私ミ 本

麻生路郎

私が本に二千圓の保険をつけてから、もう十幾年になる。焼けたら二千圓は愚か一萬圓でも買へない本もあるのに、一體これはどうしたことかと考へるとおかしくなる。命にさへ保険をつけてゐないくせに。

私ミあるせごろ

伊藤愚院

これは明暗の間に不變の變化なつていじき色彩を求めんとする不幸なる男の夢かもしれない。

全ゆる苦惱を経て産み出された一句とは痛ましいその苦悶すら止めぬいともハンブルな脱殻でもあり得る。

意識された技巧こそ眞に恐るべきものだ偶然と僥倖を待つ者は最初から次の言葉をモットーとする。曰く「無技巧の技巧」と。

形式と内容は漠然と對立したまふ。と云ふよりも形式と内容が渾然と一致してゐるそしてこの言葉には幾度が喜びと失望を感じたことであらうか。

私ミ 劇

高橋かほる

川柳より好きな芝居……「役者になりなはつたらあきまへんで」と役者に云はれて役者をあきらめてから尙芝居好きになつて、十八の年に父にあまへて二疊程の廻り舞臺をこしらへて貰ひそれで二人の子の父に成つた今日でも、嬉しがつてますねん。去年の春、二南氏や華水氏と芝居を演りましてから

は、芝居の見方も變へてゐます……何んや知らん……一度芝居が演れる様思へてなりません……今年は二南氏や華水氏は申すに及ばず私より劇通の梅田支部の方々、それに頼もしい親分(里十九氏)の特別出演があつてほんまに演る様に楽しんでゐます。

私ミ ?

喜多春秋

母も女、妻も女、藝者も女、ウエトレスも女、彼女も女、さうして本年八十五歳の祖母も、來年四歳になる長女も女……。若き男ごゝるは若き女に、女として、接し、語り、和し、人として、接し、語り、和さす？

人々は明日あるを信じて寝に就く。さうして大丈夫明日がある？。毒でない信じて食つて大丈夫毒でなし？

生れて育つて娶つて生んで死ぬ？。金を貯めてとか、名を残して、とかほんの五十年か百年の間？。淋しき満足、悲しき慾望？。

宏大無邊なものに、ほゝえまれてゐる様な人間の努力？。

私ミある幻覺

水谷 鮎

洋酒と五分間玉子のまるテーブルで、東郷青兒畫くに踊る人物をおもひながらそこを出る。霧かゝる街を銀バスにゆられてゐるとうつとうしくなつてきた。ばいと降りた街の灯はぬらりくりと逃げて、ゆこうとする足

がふらついて泳ぐような格好をして倒れると、セーラーズボンのモリス・シユヴァリエ型が嗤つて立つてゐる。洋酒をのんでへられけだと言つてやると、葉巻を一本くれる。ふんと鼻をかすめた匂がなんだかいやにおしろい臭いぜ。このごぶ鼠野郎がダンスーと歩調をあはせていやあがるのだな、パリの屋根の下野郎、パンクロフトと聞へよ、ソブラノの鈴がなる。日支交戦の號外が散らばつて落ちてゐる。洋酒の渦がのどをとつてゐる。のら犬に顔をなめられるちぶんには、アルコール中毒かも知れない。こゝなつては猿飛佐助や鼻の詩人シラノ・ド・ベルジュラツグ、レビエールの踊子ら、クレオパトラの鼻のカンパレードだ。

幽魂のまゝ、幻覺の線のはびしてゆくことが出来る。だんにんげんのいのちがつらないかも知れない。金子洋文作戯曲「飛ぶ唄」の浪人遠山は死んでしまつても、創つた詩は滅びない。あらむかきりのこゝろをゆだねらるゝ詩は、永遠に貴いオペラバックから、カンガールの靴がいくつも／＼出てくる。登山靴が出てくる。靴音が高くなつてくるとパンクロフト型が立つてゐる。君こゝは何處だれ地獄の一丁目さ。

街の灯が淡くひかるのがわかつてきた。

一九三二、二、一〇朝

私　　私

吉　田　水　車

燈臺下暗しと言ひますが、私はこれと反對

に、自分の足下だけはどうかやうに判りそうに思ひます。さて、何かうまいものを探し出そうと、懸命になつて見ましたが、なる程、足下は見へても、前方の半徑だけで、ごうにも仕様がありません。後を見やうと思へば、そのまゝではいけないので、位置を變へてみましたが、妙なことはないはやはり先に見た所と同じです。考へてみると、位置を變へるために動いたのは、前の半徑内であつたことがわかりました。これでは何度やつても同じです。つまりは、私は私より一步も出ることが出来ないのです。燈臺のやうに少々足下が見へなくともよいから、うんと視野を遠方へ展して、出来ることなら、一つ所からぐるぐると、全周を見てやり度いと希つて居りますが、先づ幸ひ足下に見へる今の内に、その全徑を鮮明に見へるやうにしやうと決心しましたが、今の今、間に合はぬのを残念に思ひ、結局つまらないことの御報告になつたことを、深く御詫言ひいたす次第です。

私　　根

西　村　明　珠

私は根のない男であつた。

今迄に何を始めても、長續きをした験がなかつた。それに近頃はよくまあそんなに續くなあと云はれる程になつた。

それは川柳を作つてゐる事を云はれたのである。川柳といふものによつて養はれたる忍耐力であると思つてゐる。

これならこれから先きいつまでも續く

だらうと思ふ。

私　　人

阿　部　閑　生

ある時は

私は他人になりたい
自分には飽きが來た

自分が嫌ひになつた

うつし世の、塵一つ

隙間洩る光に、うかみ
耀いて、消ゆるごとく

今日とも知らず、明日
とも知らず

老、若い

見さかひもつかぬ顔の
その中へ、紛れこみたい

他人の方がよい。

私　　夢

平　井　蒼　太

夢は果しらぬパラダイスを思ふがままに

馳けるといふ。遙るか一千年のそのかみにまで、あるは又遙るか一千年の未來にまで、夢の翼は私を載せて、馳けり馳けりて其休まる

ときを知らぬ。といった譯で、夢に酔ふとき私は心から生甲斐を感じる。といった處で

私の夢は、神性を帯びたそれではなくて、賦

性を帯びたそれである。何うせベッドの中で安煙草のニコチンが描く夢だから、其内容は知れたものだ。其不健全性を曝露するならば例へば私が三千の美女を擁するハレムの王様であつたり、世界の全カールスの戀人であつたり、十億弗のミリオネアであつたり、戯作者の筆のさきに踊る豆男と化して、全人類の翠帳紅間の秘を探つたり、なごなど。百年後に残す傑作川柳の一句を唄つた夢を見ないのは、少し苦笑ものであるが、とにかく夢は嬉しいものである。

「太陽の色にも似たる夢よ夢
からだをやいて燃えさかれかし」

私　　酒

増　位　汀　柳

今でこそ酒屋を廢めて、スポーツの雜誌とか、やれ川柳の雜誌とかを出して儲からぬ仕事に懸命になつてゐるが、先祖代々の酒問屋であり、その酒問屋である私の家で生まれて來た私であるから、何よりも酒につながるものがあるのは致方ない事である。一と頃は酒の新聞も出して先輩柳人を煩した事もある。路郎師などは特に、この企てに力を下さつたものであつた。一昨年酒を過ごし胃を痛めてより、節酒をしてゐるが、盃丈けは捨てられない深い未練がある。友と酌む酒には親しい友情がかたく結ばれ、師と酌む酒には敬慕が更ににじみ出る。母と酌む酒には殊に温かい愛に包まれ、戀人と酌む酒には嬉しい泪が溢れ出る。また獨り酌む酒には、孤に堪ゆる勇氣

を抱かせて呉れるものである。酒はともかく大勢で呑むより一人で少ない程よい。この頃よき呑對手を求めることに腐心してゐる。

私　　夢

岩　垣　奇　可　愛

世の中に、金持も貧乏人も若い者も老人も共通で、眠りさへすれば、絹夜具の中で、も淋しい野原で、とも見る事が出来るのが夢であるといふれば、決して夢は捨てたものぢやない。私は未だ構造さへ知らぬ飛行機に、夢では何回も乗つて居るし、單身空中を泳いだ事さへ有る。或る時の如きは何千萬の長者になつた事や、甚だしい時は摩いお方の傍近く待つた事さへ有る。こんな事は夢で無くて、此凡夫の私にどうして出来る事であらう。支那の莊氏の如きは、夢に身を胡蝶に變じて、花園に遊んだ話さへ有る。夢は五臓の疲れたとか、夢助など云つて片附けて居る人達は、夢の妙諦を知らないんだ。一度其真隨に觸れたら、夢が如何に自己慰安、自己反省、注意心の誘發等、數々の味が有るかを自覺するであらう。私は夢に對しては必らず善意に解釋する。「夢は夢合せの辭の如何によりて吉凶の差を生ず」など云ふ言葉が有るけれど、判斷の自由は自分に有るのであつて、何も他人の決めた規則に依る必要はちつとも無い。私は悪い夢だつたら逆夢にするし、良い夢だつたら正夢にする。金が無くても夢では旅行へ出來るし、衣食住に事を缺かない。そう考へた時私と夢とは離れられない。離しても無い。

私　　私の庭

熊　谷　紅

私の庭、それは長さが二間幅二尺、露路の奥の一帯奥の東は住居、南と西が隣家の土蔵じめくゝとそれは、狭い小さい日常りの悪い庭、それでも杉の木があり、桐の木もあり、椿の木もあり、其の他に、つばき、葛、椿、南天、等々。下草に岩菖蒲、雪の下苔も三年前よりついて來ました。春は葛が赤い芽を出す、桐が茶色の芽を出す、葛の芽は延びて一昨年頃から土蔵の焼板へすびつてのびてゐます。徑一寸位の幹から延びて、一分位のつるから葉が出、延びる。十本廿本卅本も延びて、焼板へ、青い葉をつけて。

桐も延びる。毎年一尺位づつ大きな葉をつけて。初夏には朝顔もまた延びる。毎日延びるのが目立つ程のびる。大きな青い葉をつけて。

雪の下もものびる。鼯の先に兒をつけて。椿も延びる。目立たない程度に一分か二分づ、ぶちの葉をつけて。

秋になれば、桐の葉が散る。葛の葉も散る。朝顔もぬかれる。雪の下も小さくなる。淋しい庭に成つて來る。

残つて居るのは、椿の葉だ。青い白いぶちの葉だ。見付けた苔が二ツ一ツは今咲いて居る。落葉の中に咲いて居る。モロ一ツは來月咲くだらう。冬の木立のまん中で。物干竿の最下で。

落葉の木々は眠りつゝけて春を待ちつゝ

半坪の庭とも知らず咲く椿

私ミ 落葉

茨木 奈緒美

私は一人で落葉の道を歩いてゐた。
冬の風はおしげもなく木の葉をちらしてゆく。

あの春の若々しさはあとかたもなく
たゞ一人路傍にくちてゆく
落葉がいとしくなつてきた。

私はしづかに落葉を拾ひあげると
お前も私とおなじだれと云ひたくなる。

淋しさに落葉つかんでゐたりけり

私ミ 夢

麻生 霞乃

夢は魂の安住所、肉體を慰はせる樂園である。
甘い乳の流、百舌のささやき、アネモンの赤い唇と、芝生のしとねは、ソロモンの榮華もこれに及ばないと思ふ人もあらう。けれども私の夢はそんなごやかなものではない。

私の夢の王國は山もある。海もある。崖もある。そして空はいつも灰色に、低くたれさがつてゐる。海は鉛を溶かした増埒、山は暗い蔭影を投げて、身の毛もよだつ程寒い。時々、大きな白鳥が来て、緑青色の淵へ身を洗めたかと思ふと、再び、もとの静寂にかへつて終ふ。この仙境へ、この神祕の夢の國へ、

青い鳥の翼は私の魂を運んで呉れる。

私ミ バス

住田 亂耽

バスは近代小市民の脚だ。戀愛に商用にそして E.T.C. E.T.C. 彼等はあらゆる方面にこの街の小兎を利用する。

かの花菱アチャコの辯の如く、乗降に危ない時は柔かい手で体を抱いて呉れる美しきバスガールが居て、一區五錢とは實に安いと私も思ふのである。青春を川柳と麻雀に消費してしまつた私は、渺からずバスの恩恵にも浴してゐるのである。

銀色の市バスが初めて走り出した時、一寸意氣な色彩を街に放散してゐた。丁度その頃である。京町堀ビルの地下室にあつた麻雀俱樂部へ行くのに私は梅田から屢々否殆んど毎日バスに脚を借つたものである。

その俱樂部はヒスなマダムの爲に、一年半程でたゞと客足が絶えてしまつてその後東京へ引揚げたが、しばらくしてそのヒス夫人は死んだと言ふ事を耳にした。私はこゝで徹夜なんかにしてよく面倒をかけたものである。可愛らしい尋常一年位の男の子がゐたが、今頃どうしてゐるだらう。又ロイド眼鏡をかけたふくるふのやうな貌をした極く善人だつた主人は、どうして暮してゐるだらう。と思ふと陳い文句だがそゝろに懷舊の情に堪えない。

ガタツ！バスのパウンドだ。とバスガールの聲で「キヨウ・マサ・ホリ」。私はこの聲を

聞く度に何か故郷へ歸つたやうなつかしさを感ずるのである。

バスは走る、そして、「うしろガライ」といふ聲が私の耳を柔かくくすぐる。

私ミ 酒

松盛 琴人

私と酒の關係は、私と妻との關係に近い。時々飽きる事があつても、影が見へぬと淋しくなる。と言つて片時も離れてゐられぬといふ程でもないが、膳に徳利が並んでないと、どうももの足りない。すると家内は菊正で、酒は私の女房だ。處が妻は酒が辛いと云ふ。酒は又妻にアノ芳醇な モーシヨンを與へぬらしい。だから時折妻といふものに困らせられる事の有る様に、酒にも二日酔をさせられる。困らせられる事は女房に困らせられるのと同じ譯だから、大に憎む事は出来ない。斯んな時はいつも辛抱する。妻は親切に介抱して呉れるが、同時に酒は善くないといふ。最も言葉だが間接射撃でもある。私は苦しみながら其言葉に恐縮するが、酔が醒めると直ぐ酒が可愛くなる。そこで私の妻が酒が好きになればさうした事は、兩方共無くなるだらふと心算かに「妻よ酒が好きになれ」。

なめるほど妻晩酌へおつき合ひ

私ミ 冬

村松 夢裡

空ろな心を抱き締めながら、又時には何か感激の炎を燃しながら、一日の務を終えて歸

る車中、考へる事は何時も暗い静かなといふより、寧ろ淋しい誰も居ない部屋のことだつた。若い美しい彼女の愛を、どんなに夢見てゐた事か！ライフの待つホームに、どんなに楽しい憧れを持つて居た事か！そして冬が近づき冬になつて終ふと、この憧れがテンポに増進して行くのがはつきり解つた。考へたつて仕様の無い事だつたが、考へざるを得なかつた部屋に歸ると洋服を脱ぎ棄て、湯に入つてズボンと蒲團の下に敷いてすぐ寝てしまつた。それでも一日の中で、一度は本を見ないと寝れない性だつたので、何かしら枕元に本が置いてあつた。これは十六年ばかり前、會社に移め初めの下宿住ひ時分の事だつた。子の半打も出来た今、其當時子供の五月蠅きなんぞ少しも考慮に入れなかつた事實を思ふと、可笑しくもあるが、冬の來る度、若い昔を思ひ出す。

私ミデ・パート

朝田新水

大阪はデパートメントストアの多いこととは甚だ便利で、世間の人はどういふ様にデパートを利用してゐるか、又私はそれを如何に利用してゐるかふと心をかしく考へて來た。中食にW.C.展覧會催物は勿論のこと、休憩室での作句が何よりだ。アルの顔したプロの多いことに氣付く。無論私も顧客としてその一人たることを疑はない。様々な女の世相等に依り私をして、アルの氣にもならしめる時、女やアルの匂が生れるのも稀でない。

時としては目新しいことになつて、かり、見合等のある時、この縁談のまゝとあるや否やの想像位はつく。今や小賣商人の非難の聲のやがましい時、デパートのあらゆる戦術を以て設備とサービスを計るなら、地下室に浴場でも設け、夏はプールに、ダンス法度の大阪に解禁の頃は、ダンスホールでもこしらへたらダンサーの好きなものでも澤山買つてやるにネエ！

私ミ父

永川秋月

私には父がない。死んだのか、いんや初めからないのだ。父がなくて君が出来るかとの質問に答へませう。私には父は無いが、母が私を産んだ。何故母が私を産んだか、私も子供の時は能く母に質問したものでした。其時母の答へは只涙だけでした。子供心にも私は母の苦痛を知つて、其の後一度も右の質問をした事が無かつた。其の内私が十六歳の時母は急死した。

だから私には初めから父が無いのです。永久に――父も知らずに私も死ぬのでせう。處が満天下の諸君。私が川柳を初めてから突然父を發見した。此處に川柳の有難味があるではないか。

其の父たるやです。やさしい父、厳格な父、無理解な父、無責任な父、澤山の父、父の行列だ。

私がオギャアと生れて、今日迄、血の出るような苦しみ、母の不幸な一生を、川柳

の父へ投げ付けて見たい。大聲で涙の池の乾く迄、川柳の父と泣いても見たい、腹の皮がよれるように、川柳の父と笑つても見たい。嗚呼恨み多き父よ。戀しの父よ。今夜も泣いて秋の月。

私ミ煙

池田雪峰

私は煙を愛してゐる。一方又大變に憎むことがあります。

私は煙の都大阪を愛してゐるのに、私の體質は大變きらひますので、仕方なく田舎へ引つ込んで仕舞ひました。

頭がくしゃくしゃする時など、何よりもパツトの煙を大變に愛しますと、私の胃は大變、それをきらひます。

太い煙笑からぼー／＼黒煙を吐く雄大な景は、私の精神を喜ばしますが、其の下に有る資本家××を思ひ浮べると、暗い感じがします。

右の如くで私を喜ばすものは、煙であつて又私が憎むものは煙です。

現世に煙の如き人間の多きことを、心から憂ふると共に、煙の中から卒然と現生するデザイナーの多いことを心から喜んでゐます。

そして私は思ふ現はれたデザイナーは、皆な青年で有る事は近代の英雄兒、而して時代を支配する事とは、偉大なるデザイナーだけに有る事を、私は煙によつてデザインを建て、煙に打ち消さるゝ事が多い。エネルギーの消耗をおしむからでもありません。

私はあの二三ヶ月顔を出して、煙の如く消へゆく柳誌には、心から同情をしてなりました。彼氏も煙によつて得たデザインを、煙に打ち消されたので有らうと。

デザインナーよ。煙の如きデザインを建てず煙によつて得たデザインチャンスへ、エネルギ―を集中し、成功されん事を祈る。

私三川柳 第五卷十二月號

三好計加

私は時々川柳雑誌の古いものを出してみるが、第五卷十二月號を手にする度に、いつも色々な想出が湧いて懐かしく思ふ。

松山に川柳雑誌の支部が置かれたのは、未だこないだのやうな氣がするが、もう少しで滿三年にならうとしてゐる。其の創立記念句會に頂いたのが、第五卷十二月號だ。何んといつても、私は川柳といふものを知り出してから、僅かに半年許りした頃であつたから、句會といふものはどんなことをするのか、松山にどんな柳人が居るのか、さつぱり分らないときだ。そんな時だから、その創立記念句會は私には何んでも、新しい事件として皆印象深いものであつた。その上大阪からは路郎、素人、線雨といふ三人の大家が出席せられたりして非常に熱と、新しい力を興へてくれた。だから支部記念句會は、私の生活から忘れられないものとなつてゐる。私はこの雑誌を見る度に、當時の赫かしい光景が浮んで來て、非常に懐かし味を覺える。

私三川柳

木村晃卓

近來晃卓の句は、貧乏と病弱の報告に過ぎぬと云ふ先輩があります。この先輩の言葉に私は感謝して居ます。全く今日の私の私を、私が見つけた處では、病弱と貧乏以外の何物も見當りませんからです。嘘の云へない私に、嘘の句の出来ないのは當然です。それが報告に過ぎないまでも、だが思ひ切つて嘘を言ふとしたら、大向をあつと言はせんまでもの一句や二句は、出来る自信はありますが、そんなのは私の川柳だとは思ひません。私と川柳とは一体です。一句たり共私の辭世でない句は作りたくありません。一句ないだき締めて師恩にしたり居る「再び路郎先生へ感謝してほんとうの句作に精進し様と思つて居ます。

私三親爺

妹尾變人

上阪以來三年目の正月、二度目の歸國、嬉しがるべき久しぶりの歸國が、親爺の重病の爲に無茶苦茶だつた。背中へとても大きな腫物が出來て、助かる見込みさへないのである。近親や近所の人々も押しかけては居るが、親爺の苦痛と衰弱に目をそむけるばかりで、運を天に委すより仕方はなかつたらしい。併し私は泣いても居られなかつた。諦めては居るが、じつとしては居られなかつた。みんなの反對をもきかず、三里半もある病院へかつぐ事にした。そして覺悟の上とは言ひながら、

不安の大手術に身も心も世にはなかつたのである……それから病院での五十日、みんなの努力は報ひられて全快した。それ丈である。でも私はそこになにか奇蹟的に、否神秘的に親子の愛情を結んで居る小さな糸を持つて、親爺を救ひ得た事を感謝せずには居られない。

それからの私と親爺！そは萬人にも誇りたい程の親子の間柄ではある。私は正月が来る度に過ぎた昔をそいふしので居るのである。

私三句

中澤濁水

熱感と冷感、一時の感情に支配せられた言行は、多くの場合理性を亡くしての發動であるから、やがて熱の醒むるにつれて悔いを残すと同じく、句作に於ても熱狂的に「これは好い」「これは申分無い」と自惚れた句は一時の間も経たぬうちに、魂の脱けたものに成しまふ。私は句作に於て殆んどこんなことを繰り返して居るのである。

句會では時間が迫り、其他は締切りに追ひ廻されるので敢し方がありません。併しながら時間を得て充分に、前後左右、縦横表裏から、反覆點檢を施した句は、何れの雑誌へも吃度抜けてゐることを自ら愉快に思つてゐます。

要するに、百鍊の磨きかけた名刀は、見るからに心膽を寒からしむる如く、句は先づ句想の主觀的地位に成り切つた理性と、その

眞境に順應した冷感との 結晶でなくては成らぬと確信して居ます。

私　　香

生　田　翠　夢

世の中に香りといふものが存在しなかつたならば、恐らく人生の價値を半減せしめるものに相違ない。

香——それは、私の全生涯を通じて最もなつかしいものゝ一つである。

幼ない時床屋でつて貰つた木犀の香に似た甘い香料の懐かしい思ひ出、時々香料屋や婦人の衣服からその香を嗅ぐ事があると、たまらなく幼ない幸福であつた時代を追憶して止まない。本當に夢みるとはこの事であらう。すべての現實はあとかたもなく消滅して仕舞ふのである。

亦無形の否無臭の香りを私は感じる。電車やその他の場所であつたと隣り合した十七八の健康な處女に、處女の香りを感ずる事がある。朗らかな聖なる香を、汚れなき清淨な感銘をうける。これもなつかしいものゝ一つだ。もう紙数が切れそうだから舊作を一つ

その頃の明るさ處女の香も高し

私　　母

安　井　ひろし

私は母が四十三歳のときの子である。もう生れなくてもいいのにと、言はれながら出来た八人兄妹の末ツ子である。だから「あまえ

た」で七八つ迄は乳房をくはえて居て、十一二の年まで母親と添寝して居た。母はその頃胃が悪かつたとみえて、朝寝坊で毎朝苦るし。そうして私に「みつなち」を押へさせた。私はお腹のころ／＼したかたまりを力いっぱい押さへつけるのが習慣だつた。それから表戸を明けるように云はれて、私はいや／＼寝巻のまゝとび出すのであつた。だから私の朝寝癖は母親譲りである。

母にとつて私は可愛い、自慢兒で、(最近はずとも不肖な子だが)親類中で「橋屋の自慢息子」と云はれて居た。私も學校から歸つて母の姿が見えないと、すぐ泣き聲でさがし廻つたものである。十歳のときに母が一人で大阪に来て、私が留守をしたといふので兄姉に賞められ、天王寺の大釣鐘の形をした玩具を土産にもつて歸つてくれて嬉しかつた事を覚えて居る。

母は法の華凝りて、能勢の妙見さんへはよく詣つた。私が大阪に来て間のない頃(十九歳頃か)いつしよにお参りした事がある。

まだケイアルのない時分、母はお題目を唱へながら健者に歩いて登つた。そのとき山上で精進料理を喰べながら、ようこの子を生んでない事だつたと喜んでくれた。

その母が去つた十一月廿九日に七十八歳で死去した。死ぬるときまで大事にもつて居たのだが何がはいつて居るのだらうと、古ぼけた袋を姉があけてみると、中から私の手紙が十數通出て來た。それは私が東京時代に、各地を旅行して珍らしいものを送つたり、お饗儀

にと小遣ひを送つた手紙ばかりだつた。いまの私自身忘れて思ひ出せない程、所謂孝心深い若き頃の私の姿を思ひ浮べて、苦笑しただつた。(六、一二、一〇)

私　　詩　　才

山　本　丹　路

作句にあたつて、切に自分の詩才を疑ふところではある。

もちろん私は、詩の方の才人では、斷じてない。

けれど詩と名のつく程のものを、創る素質すら持ち合はさぬ私でないかと老へる。

素質を否定する以上、詩人であることをやめなければならぬのは必然だ。

川柳詩を愛する私にとつて、それは淋しい自殺である。

幸ひにして、川柳界に、詩才なきものゝ、句作を停止する法律はない。

その寛容に甘へて、私の川柳愛は、作句に精進する。

私も亦あはれな、ペン持たぬ川柳マニアで終るかも知れない。

それでもまた結構だと、考へるこのころではある。

私　　髪

福　田　鶴　峰

元來私は丸刈がすきだ、心の變るときに、よく髪の毛を髪へることがあるが、別にそ

ういふ意味でもなく、只なんとなく毛を伸ばして見ようと思つて、近頃少し伸ばしかけた今日でそれから二度目の散髪だが、まだほんの僅かにしか伸びないイカグリ頭だ。このイカグリ頭こそ、いまの私の姿なのだ。つまり私の人格が未だ完成してゐない、髪が伸び揃はず刈りかたが完成しない、改心して心が確定してゐない様なものに思はれてならない。これと同じく、私の川柳がまだ完成しない。今日ではいつ完成するとも思へない、やがて此の頭髮が充分に伸び揃ふときが来ても、私の川柳は遅れるだらう。否遅れるどころか、とても其の完成は遠達の事に違ひない。しかし句がたとへ完成せぬとも、私の氣持ちは必ず完成したい考である。時恰も新春を迎へて。

私と女

中川めかく子

私と女、一寸シヨゲル。が私と金でもない私と妻、鼻もちららぬ。久流美、銀波樓、兩老に苦笑されようがやつぱり、私と女。獨輯長御寛容な。僕が十六歳の時、A、B、の彼女ら二人も十六才。早熟の僕すつかり、Aに蕎麥屋徳利になつたが、上僚際で見事スツテンコロリ。Bに色々慰問の言葉で撫でられても薄命ならざる彼女に愛を覺へず、其のまゝ今日となつた。A女某紳商に嫁して、二人の母B女某廓の笛の名手。僕は安い電車にも嫌はれて、テクツテある。

僕の閉口するのは、あれ以来、A女に路傍で逢うと、土俵際で塵投げを喰はせた、プライドをもつて、いふ／＼追ふことだ。彼女の眼界から轉るやうに逃しても、三ヶ月のやうに振り返へつてゐることがある。今年の夏、鼻べちやの妻を引具して、海水浴に出かけると此所でもA女のブライドに出會して、二三回廻り右をやつて、歸りの電車で冷や汗を拭いてゐるとしとやかなB女にしゃなりとし、お辭儀をされて、今更B女の愛情が懐しいと同時にA女に一生、頭が上がらない事を感じた。

私と句

(十二月九日記)

中島鐵洲

京都の柳宗悦氏等に依つて民藝と稱する工藝が盛に唱導されて居る。民藝とは、一言すれば機械工藝を主とせず、手工藝で傳統を厚び、作意を嫌ひ、無技巧の技が生んだ滋味惡く言へば稚拙美を喜ぶ古き工藝である。是れに反して新しき工藝とは、現代の生活様式に適した創作的工藝で、勿論美藝である。而し何れが美か、美の認識は觀賞者の趣味の自由であるが、工人としては此の二つの流れに對して、相當の疑が生ずる。是れとほとんど同じ疑が川柳にもある様だ。川柳の新舊が、認識も自己修養の程度に依るが、あまりに度を超すと、川柳の味以外の味になりはしないか。若し川柳の持味以外の味を求めて居るならば、何百年來の看板で足れりとするが、そ

れはあまりに卑怯ではあるまいか。

新ふした迷と云ふか疑が、私が新らしき工藝の道を歩むに連れて一層深くなり、私の句は行き詰つた。路郎師から句を求められて自信の句なきを遺憾とする。(六年十二月九日)

私と制服

福田山雨樓

乃木將軍は軍服で通された。それは軍人精神の權化であり武士の典型であつた。將軍の忠節奉公の赤誠が軍服を離さなかつたのである。軍服が將軍の忠誠を象徵する。

僕が鐵道職員制服を常に着てゐるのは堅實を旨とする鐵道氣質に副はんことを期する心懸けも幾パーセントかはあるが、主として便宜主義によるものである。しかし今年でもう十六年になる。陸軍でこれだけ軍服を續けてゐたら先づ大尉殿と云ふところだらう。

僕はネクタイを結ぶことが大嫌ひだ。時間がかかるし鏡を見ればならぬ。其の段は制服だと至極無造作で時間經濟此上なしだ。

僕は着物も餘り好かない。木綿だとそうでもないがどうも着物はべそを食べていかぬ。制服であるが往々乗物がロホでゆける。これがえてして僕は圖々しくさせる。折角切符を買つたのに降りしなにそつと白銅を握らせてくれた女車掌もあつた。

私と豆腐屋

關本雅幽

甲斐／＼しく働いてゐる豆腐屋夫婦の影が、店の灯から寫つて、白い湯気が街路へ溢れ出てゆく。美人と言ふ程度では無いが、赤い手柄のおかみさんの輕快な働き振りを眺めては、私は毎朝生活戦線へと勵まされて行くのである。殊に四季の衣更えのおかみさんの姿は、心身を鼓舞する刷新劑であつた。いつの間にか此の夫婦も、私の靴音を聞きつけて時計とを見立てるやうになり、風の朝も雨の朝も、無音のまゝに生活戦線握手が出来てしまつたのである。時にはおかみさんの姿が見えぬ朝が續いて、私を憂鬱性にして予事もあつたが、暫くすると赤ん坊を背負つて少しの寒れも見せず、良いお母さん振りを朝々喜ばしてくれるのである。其の後も亦おかみさんが度々見えなくなる。すると必ず次の赤ん坊を背負つて居る。そしておかみさんの丸髷は、正月の他見られなくなり、束髪の崩れかゝつた日が多くなつたけれ共、働く動作の快感には少しも變りがなかつた。斯して私はお蔭で會社から勤続表彰される事も出来たのである。

或る朝の事、この豆腐屋の夫が「一郎(長男)の奴雁次郎なんて親も知らなくせに」おかみさん「お隣のぼん／＼に聞いて来たんやがな天隣はよく出かけるんだなあ」おかみさん「わてらお金は兎も角暇がなあ! おま

けに五人も連れな出られんさかいなあ」こんな會話を聞いてから、私は急に心淋しくなつて来た。一人の子供もまだ持たない私は、此の豆腐屋の湯氣に勵まされていつまで働いて行かねばならぬのであらうか。其れから私は横道をして、自分の靴音を聞きながら、出勤する日もできてきた。

私と新聞ゴロ

石會根民郎

昨夜は失禮、校正出来た? ありがたう。夕方までには全部刷り上がるだらうね。あと残金はいくらだつた。三圓五十錢? こんな不景氣じゃあ全く三圓五十錢集金策も骨一杯よ。名刺を出して誌代を戴きに参りましたといやに頭を低くすりや、辻散臭い顔をしてさ。今主人は留守だから後に來れと仕らあ。馬鹿にしてゐるよ。タツタ二十錢を出し遣るなんて、死にざまの悪い奴にきまつてさ。時に、此頃はたかゞ廣告でも記事になつてゐるのがある。見出しが一寸だからつられて讀むと、案の狀キンガの廣告であつたりして、スマイルの宣傳よ。そして同じ記事もエロに限る。「エロ圖會」と初號二段めきの見出しで〇を賣る大根役者なんぞ來ると、其の月の誌代集金率が上つてさ。ひさしぶりでお女郎としつぱりエヘヘ。かうなるとエロ川柳で情欲をぐつと上げたれ。記事を頼むよ。未摘花? 未摘花とは何だい。エロ古川柳集粹? 拜みたいれ。うつかりした。時は金だ。集金だ。

又夕方來よう。あばよ。

私と母

阿形一杉

寒雀に小米を撒く母です。この間、誰やら空氣銃を提げて、家のまはりへ來たとき、うちの家根で撃つてくれるなと、頼みました。眞綿を貢ふて、ツホン下のお古で作つた脚件をはいて、毎日、かまごの前でくすぶつてゐます。

年をとると、何よりも、子が力だと口癖のやうに申します。後にも、前にも、一人きりしか生まなかつた私を、それだけ頼りにしてゐるのです。骨肉の、あたゝかさといふものは、有難いものだと思ひます。

夜間だけの、ラザオが、出嫌ひの母を、なぐさめてくれます。

よそのおばさん達が、孫を抱いてゐるとき流石淋しそうです。今年あたり、私も、決心せなければなりません。

明けて還暦、忘れた紙入を追つかけて、持つて來てくれた、替ての元氣は、もう見られません。心ばかりの、お祝ひをしたいと思つてゐます。

なぐさめの言葉に人の口を藉りあかざれなつくらふ手筈しまひ風呂

私と川柳

上野錦水

靜かなる安住の生活に憧憬する私とはな

つた。つまりぬ自我を張つたところで、それが何になるのだらう。その時の見たところ男らしい我は通つても、あとの空虚なまじしさには堪へられない。

自己といふものゝ存在を強調することゝても、生きる者としては一つの目的ではあるかも知れないが、それを強調して、自己が周囲の生活の頂點に立つてからの、それから生活は、何をけじめに楽しんで行くつもりか所詮は、解かなる變ることなき安住の世界にのみ自己をいつくしんで行くことが、逃避といはれやうと、因循といはれやうと、私にはなつかしい生活であると思はれるのである。私にとつて安住の世界とは即ち川柳の世界の謂である。

私　　姓

楊　井　二　南

實に困つたことには私の姓は「やぎぬ」と讀まなければならぬのであります。

▲「モシ／＼こちらは〇〇産科院ですが只今奥さんが御分娩になりました」「へえ」「女の御子さんですが御二人とも御健全です」「へえ」「モシ／＼銀行は何時に御退けになりますか」「へえ五時頃ですが」「そうですかでは御待ちしてゐます」「チョッ一寸待つて下さい一体何の話ですかそれは」「あら貴方はやないさんちや御座いませんの」かくて私は肝心の柳井君よりも先にそのお目出たな聞かされたわけである。

▲簡短點呼の司令官、今日の成績は大体に

於て良好である。特に優秀なる者を只今から讀み上げる。〇〇●●××あげぬ！直立不動の私、あげるではありません、やぎぬであります」「司令官の目がギョロリと光る」ふむなか／＼態度明白ぢや、あげぬ！もとひーやぎぬ！」

▲何度言つても卒業するまで私の姓を満足に呼び得なかつた教師何時も出席簿を讀む時に私の番が廻つて来ると一寸考へた末結局「やうぬ」と云ふに決つてゐるのである。クラスの茶目か或時「ごん！」と代返して叱られたことがあつた。

▲「あの人は日本人をつくりやな、言葉もすつかり日本語になつてゐるし一寸見てもわからへん」「無茶言ふない似てゐる筈だよ、正真正銘の日本人やがな」「畜生！併し無理もない私の銀行には楊（ヤシ）と云ふ支那人がゐたつて。

▲「君一寸御尋ねしますが、その刀はどうするのですか」「やこれですか。實は記念祭の餘興に使ひますので」「そうですか。併し一應責任上取締の爲に御名前だけ聞いて置きたいのですが」「併し之は竹篋ですよ」「竹篋でも結構です。お名前をそのノートに書きつけたものであります。いとも逢筆に「八木」とれ。

私　　餅

櫻　井　圓　角

餅は随分好きであつた。酒も好きだが、餅

の方が更に更に因縁深いものがあつて懐かしい。

二歳位から食べさせられたものであらぶが、其時分のこととはよく分らないが、兎に角お正月の三日間のお雑煮餅、それも田舎の事です。それから、お椀に一寸入れたら一べいになるといふ代物を、毎朝年の數だけ平けたものである。三ツのお正月には三ツ、四歳の時には四ツ、八歳の時は八ツ、といふ順序である。十四歳まで續けた。就中兄や姉等は齡が上であるから、年齢の數に及ばず、齡だけ平け得る者は、家内中我輩一人といふ黄金時代には大きな餅腹を突出して、大に意張つたものである。そして餅に對する自信を強めた。所が國を出てからは、如何にお正月でも、十五も十六も平けては、人に笑はれる憂があるもので、控目にする。酒の味は知る。遂に餅は昔の夢となり果て、お附會に一寸か二ツ頂くだけになつた。其反比例に、酒の方はお察し下さい。元來が胃の膽の大きい方なんですから。

私　　雨

西　田　舂　樂

雨降に外出する事は、私にとつて一つの大きな楽しみである。同業仲間でも、かなり有名になつて了つた。先日二人の友人が「惠那峽に遊んで雨に逢つた。併し君やつたら喜んでやら」と話した。何に其同じ日、私は一人で日本ラインの雨景を下航して悦に入つてゐた。

兎も角雨の讚美は、下手な文章で僅かな紙面であらぬ。他日機会を得れば心ゆくばかり雨の趣味を語りたいと思つて居る。

こんな雨に家の中に居るなんて、勿体ないと云つて出て行く私である。それが冬だらうが夏だらうが、である。春雨、秋雨は言はずもがな。ほんとうの雨の感じは、窓越しや炬燵の中では十分でない。蛇の目傘に高下駄、街の中でも、郊外でも、田舎でも、ジトと降る中を歩かなくちや嘘だ。拙い句だが、濡れて行く女へ傘の言ひ遣り、がある。

私と彼女

三輪 夏 曉

彼女つて言つたつて、何も完全に私の彼女に成つて居る譯ぢやあないんですが、他に今私の對象的目標として、感興を呼び起す物が有りませんので、彼女を題材に選んで見ました。

彼女との交際は、陽春三月の半を過ぎた頃で、私の方から意を示したのは勿論ですが、慎重な彼女は、中々その意を諒として呉れなかつたんです。けれど、認識不足だなんて恨んだりした事は一度だつて有りません。

そう言つた具合で、半歳は夢の様に過ぎましたが、依然私の彼女と成し得ないのみか、寧ろ氣持は遠ざかつたまゝで、彼女は東京へ去つて行きました。

あきらめた物が、それとも。否私の心は進みこそすれ、決して衰へはしませんでした。

突如彼女から受取つた手紙。しかも私を感激にもえさせる手紙。果して彼女の招きに應じて上京する私が無謀でせうか。時は凡てを解決して呉れる事と確信してゐる私なんです。(一九三一、一二、九)

私と僕

日 野 華 水

私は川柳が好きである。そして作句して居る。句會へも出て行く。雑誌へも投稿をして居る。私は川柳家として言つてゐる。

僕は登山が好きだ。僕は近畿の山は大体登つた。富士山の頂上も踏んだ。日本アルプスへも行つた。四國へ渡つて飯山へも行つた。少しは岩登りもする。山の座談會へも行く。僕は登山家であると思つて居る。そして、どちら也好んでやつて居るのである。

登山家に柳樟の何篇だの、柳翁がどんな人だの、川柳の輕みだの、云つても分らない。それよりも、リツクサツクの重味の方がよく分るだらう。

又川柳家にアブザイレンだの、ビレ、トラバース、ラツセル、テレマックだの云つても何の事だか分らない。それよりも吳淩軒可の方がよく知つてゐる。

それでよいのだ。山境と[※]境は別だから。私は川柳家である。僕は登山家である。

私とハンドバック

中 野 裸 人

誠に耻かしい次第ではあるが、私が若い女の所有物であるハンドバック、や衣類を入れた包物に對して、一種の深い興味を覺へる様になつたのは、親友のHが喫茶店を出すついで、女給入用の大きな看板を出して、私に其の應募者を一々検査して、選定する役目を押しつけられた時に始る。僅か五六人の中からA子と云ふ女と、K子と云ふ二人の女性を得たのであつた。A子は、中々の肉体系で、背が高くても顔の美人であつた。そして齒並が非常に悪くて、前齒が一本抜けてゐたけれど、それが却つて彼女を一層可愛らしく見せた。K子の方は愛嬌は充分あるのに、幾らかヒステリーじみてゐた。斯うして二人の美しい女給を得て愈々今日から花々しく開店すると云ふ日の朝、事件が起つた。それは昨夜K子と一緒に寢に就いた筈のA子の姿が見へなくなつたことだ。我々は直にK子の立會を求めて殘されたA子の包物を調査し、初めたのであつた。A子の殘して行つた物と云つても、古い衾の着換へが二三枚、と緑色の事務服とエプロンと、化粧道具を入れた金盥と、大きな椿の花の模様のある黒い革のハンドバックだけだつたのである。私等は其等の物を一枚一枚綿密に調べて行つたが、私の心は次第にこれ等のA子の所有物である、赤い布が私の指さきに觸れ、品々のもつ特有な油と白粉ぐさいにほびが、私の鼻を打つ事に依つて、異様な刺激と、最大な惱みとを感じて、夢の様な境地に到達しつゝあつたのだ。そして最後に私はA子の殘して行つたハンドバ

ツクに就いて、私は想像もしなかつた色々なA子の人生の半面をのぞく事が出来た。男から来たらしい手紙に依つて、私はA子が今姪姫三ヶ月の身重であると云ふ事を知つた。其の他には男の寫眞が三四枚と、書きかけた葉書だの、家婦會の名詞だの、某新聞記者の名刺だの、口紅、コムバクト、白粉、ゴムサック等々々があつた。斯様した總ゆる秘密を包むハンドバックを残して、何處へ行つたのか歸つて来ないA子に對して、私は残されたハンドバックを通じて、私の描いたA子の現在の境遇や心境に對して、憐憫の情に打たれると共に、A子を戀慕する片思ひ的な切なき情緒を感じて、今も尙若き女のハンドバックを見るにつけ、當時の自分が思ひ出されて人生の果敢なきを覺えるのである。

私ミ 雲

伊藤綠之助

私と雲との交渉をこゝに解剖しやうとは思はない。ふと彼方なる雲に、私と雲といふ題が出たのである。たゞ漫然と腦裡に來た題である。雲の句を舊作の中から拾ひ集めてみた。勿論課題吟ではない。私の小さな記録だ。

春の雲くづるゝ戀にかゝはらず
雨になる空を見つめて糸を卷き
雲脚の早き茄子畑暮れかゝる
流れゆく雲は柘榴は孤獨なり
白雲に忍ぶ秋風見たりけり
冬の月一直線に雲を縫ふ

よく見れば冬の雲として靜かなり

私ミ 旅

岩崎 柳路

内地を後にして丸三年、北はハルビン吉林長春、南は安泰線の本溪湖より橋頭迄、目下は炭坑地の當撫順に落付いて居る。其の間開原では中野柳陽氏と交り結び、奉天では同地川柳會の方々に多大の歓迎を受け、當地でも到着早々撫順川柳社の方々に又歓迎を受けて居る。滿洲を永く流浪の私にとりて各地で川柳家とお會ひ出来た事は無上に嬉しい、殖民地の何れへ行つても數多川柳家の居る事は何より心強く頼もしく思ひます。親しくして下さる方々に、心から感謝して居る次第であります。さて旅行中の事實漫談の二三を記しましょう。奥地への旅行は必らず支那語の必要な事其れは誰でもですが、昨秋蒙古の鄭家屯旅行の節、夜支那街にて張學良に屬する軍警に誰何された、支那語の不明より公安隊長許へ引張られかけた時の氣持の悪さ、銃の着剣閣に輝き安全弁を威嚇の意味でカチカチ音なさせて、七八名私の周囲を取り巻き連れて行く態度、私の大聲に都合よく宿の日本人駈付けて呉れ通譯の上了解放、但し其の時大洋銀五圓也を罰金に取られる、理由は夜間外出に軍警への應答の、合言葉を知らなかつた科で。金で何んでもすむのは是も支那式？昌園城内へ旅行の時支那料理店へ入り、寄せ鍋を注文した私はおぼつかない支

那語でホンホーズと注文した、ボーイ驚いて眼をパチクリ、後で判つたがホンホーズは馬賊の事、寄せ鍋はボーコブズと云ふのであつた馬賊と(火鍋子)寄せ鍋では間違ひが餘り離れて居た。他に珍談多くありますが餘白なく又後日に。

本社新春句會

日時 一月五日午後六時半
場所 大阪市南區日本橋一丁目交又點北

講演 日本橋俱樂部 樂部
兼題 「題未定」 麻生農乃女史
會費 金 參拾錢也

▽新年御芽出度う。
▽新らしき意氣と熱に燃えた初春句會です
▽関秀川柳家の第一人者たる腹乃奥様の有益なる講演があります。
▽路郎主幹、其他選者短冊を贈呈します。
▽句會プリント、新面目を以て見えます。
▽記念撮影あり。
▽初心者歓迎、是非御來會を祈ります。
(月番幹事) 丹路、紅、水車、變人、豆秋、鶴峯、山雨樓、綠雨

私ミ 本

白井 梅里

何時の頃からか、本を枕元へ置かねば夜眠れない癖になつて了つた。讀まなくとも、たゞ置きさへすればよいのだ。

好況時代には毎月の圖書費が、二十圓乃至三十圓宛は出せたので、毎夜の如く新刊書が枕元へ置けた。その新刊書の香が私には睡眠剤であつたのだ。

本の買へなくなつた現在には、古い本を出して二三冊宛は枕書とする。神經衰弱にかゝつてからは午後七時には就寝する。そして起床は午前七時頃だから、十二時間程床にある眠るは十一時頃であるが、それかと云つて十一時頃就寝したのでは、午前一時か二時でなければ眠れない。都合があつて十二時過の就寝でも依然本は枕元へ置く。

この癖は終生變らないであらう。そして藏本全部は読み盡せないであらう。

私 聲

岩 本 素 人

私は一昨年の夏ふとした事から聲が哽れて

支 部 だ よ り

藤 川 支 部

伊藤緑之助報

一九三一年は麗淑が維門に改り、幽明が傳重に、春歩が與詩緒に變つた。紫光、^{維門}量子、雷相、緑之助のキヤストに華村、與詩緒、柳光子、傳重、鴉夫、美登利草、田鶴緒といふ新進が加つたのも一九三一年だつた。そして新組織として大地吟社の生れたのもこの年である。一躍倍加した同人に大地吟社の意氣は高い。

松江支部の復活に依つて、川柳雜誌社の擴大は白熱化して來た。緑之助の今市轉任に依つて今市が開發されつゝある。

ビックバレット！ 藤川支部に榮光あれ。そして一九三二年の幕開けだ。更に前進の準備はある。支部創立滿五週年紀念大會は五月頃を期して開催される計畫が進んでゐる。

今尚ほ聲の出ないのに弱つてゐます。明くれば足掛け四年の半啞生活です。眼と手で御飯を頂いてゐる私にしても、明け暮れ不自由な不自由な日を送つてゐます。

私の近頃は人生最後の生活、大轉換を企劃中なので、やりたい事はいくつでもあるのですが、そのどれもこれも聲が出なくては駄目な事斗りなのですもの。聲の出ないと言ふ事は何だか廢人になつた、様な淋しみを感ぜさせられるのです。

あの本當の啞や盲の人達はよく氣も狂はずに生きて行けるものだと思ひます。此口さへ利けたなら、この眼さへ見へたならと願はぬ日とはありませんまい。半分でも啞になつて見て始めて世の不具者の不自由さが、本常に解る様と思ひます。全く身に体験しない事に眞の同情の出るものではありません。お金

若き新進達よ！情熱を育てよ！若き生命の情熱を育てよ！今年こそ生命ある創作陣に猛進しやう。

松 江 支 部

久 方 慕 秋 報

松江支部の師走句會は池田山紫君(同人)送別句會に併せて開催した。當夜は松江柳界の先輩多久和喋朗、津川紫物、木村三雷波、黒目大鳥諸氏の出席であり盛會であつた。終つてから席を岡田カフエに變へ、池田山紫君送別宴會を催し同君の入營を祝した。

松江柳界の重鎮にして支部のためにも種々御援助下さる多久和喋朗氏は、一月を期して柳誌「神火」を發刊される事になり、祝賀句會を併せて十二月五日松愛川柳社例會が開催され、支部より都之介、蒼二、慕秋の三人が出席した。

本社客員にして支部の顧問である米村あん馬氏は松陽新報社の庶務課長の重務を負ふて居られるが多忙の中にも松陽新報柳壇の選者として新進養成に川柳向上のため努力して居られる

持ちに贅乏の味の分らない様に……

啼いてゐるこころぎの身の脚一つ

不具の身にとつて宗教や政治は全く無力です。只泣きに泣く事丈けがなつた一つの最大の慰藉です。(昭和六、十二、十五)

私 川 柳 雜 誌

橋 本 綠 雨

川柳雜誌の仕事は、本職で月給貰つてゐる方よりもすつと仕事は多い。私に不向な通信は日に十數本書かれねばならぬし、訥辯と外交のヘタな私が交渉に行かねばならぬ、編輯、校正、會計等との仕事はどれもみな不向な事ばかりを黙つて引受けてゐるが、これは路郎先生と本誌を思ふからです。尚物質援助や編輯校正その他の雜務を、喜んでやつて頂く同人、社友諸君の努力を思ふと、奮起せずには居られませぬ。

光耀抄

葭乃選

大阪 房 子

ふろふきを悦ぶ父の暖たかさ
 竹馬が乗れる嬉しさ母に見せ
 順禮に報謝せせばや母の日ぞ
 優等へ父もにんまり笑ひたり
 椽へ来てチャールストンの足拍子
 レコードの童話へ母も手をたゝき
 うすばたの中へころりこ落ち椿
 人は飛ぶものぞこ天主網を張り

大阪 スエノ

差し向ひ寒さをしのぐ御飯蒸
 姉妹が一つで足りるぬか袋
 あれもみな嫁がこさへてくれました
 刷毛使ふ頃を御目覺め遊ばされ
 舉手の禮我が子ながらも成人し
 匂ひだけ隣りへ分ける味淋干し

強ひて笑へぎ心は曇る秋の虫
 北風へ女の顔の念のいる

大阪 壽 枝 女

散髪に暖い日を連れて出る
 留守にするセキセイに餌をやつて出る
 冬晴の雀あち向きこつち向き
 もてなしの湯氣あがつてるかやく飯
 正月にかけるつもりの鹿の子買ひ
 葉牡丹に寒い夜の灯がゆれる
 へら臺を屏風に立てゝ兒の遊び

魚崎町 吟 女

家計薄へ興味がもてゝちこ淋し
 忠告すればほがらかに女の笑ふ
 一人食べる飯の白さの目立つ晝
 紺紵の堅さも知らずせきたてゝ

大阪 機 見 女

磨粉の客によろゝ下駄を履き
 豆炭になさいこマダム世帯じみ

螢ヶ池 紅 薦

着物よ下駄よ病院に居て何になる
 唄ひつゝ又一段を編み過し
 落葉はらゝ空想の晝

螢ヶ池 伊 勢 子

喧嘩した事も日記に書いてあり
 言譯を聞いてもらへぬ施療院
 母のある人は徳です温い物

撫順 松 代

年玉へ末つ子少し不平顔
 晝の風呂女給赤ン坊なごを連れ

守口 武 子

北満のたよりバットのなつかしさ

◇ 麻生 霞 乃

袖はねて札が出さうもないマント
 鶏も猫も来よ来よ子等の膳の下
 うぎん屋の酒は足からぬめさうな
 夜ふかしも朝寝も父にまけじす
 晦日から鳴く初鶏の革郎氏



「寶の帳」漫興

蛙 子 省 二

「寶の帖」は綿谷兄の珍藏にかゝるもの乙半なる人の稿本であるが、虫喰の箇所もあり、且つ誤字もまゝある。京阪に關係する句が多いようで、その京阪の地理に疎い私には難解である丈け、ほかつては置けぬ氣にもなり、炬燵裡で味誦して居る。若干を記して同志の垂示を仰ぐ事にしよう。

(一) 釜山海夢かと斗不二を見て

いかになんでも朝鮮の釜山から富士山はみえない。そこに時師柄なる滿蒙事變に關聯して、此句の内容に發奮させられるサムシングがある。繪本太閤記（六篇卷之五）、加藤清正討万良哈の一節に

此時万良哈（地名）の軍民清正の勇に恐れ、敢て頭をさし出す者なし。清正も今は無用の邊地に、軍兵とごむべき謂なしとて、朝鮮の安邊府をさして引取りける、遂に濟州

と云ふ所の海邊に到りけるが、漁夫の家居と見えて、昆布荒布など屋上に布ならべ、雨露を防ぐの設けと成し、いとも荒すさびたる住居數十軒あり。清正其所の漁人を招き安邊府（地名）迄の近道有るやと、後藤治郎を以て尋けるに、彼漁人恐るゝ這出て道の案内細かに物語り、扱申けるに此御勢は朝鮮國に渡海し給ひし日本人にもやと推し奉る。此土地は朝鮮の都を去る事凡三千里（六丁一里）廻りて日本の地へは近く候由、あれ／＼御覽候へ、あの沖中遙かに見え候小さき山は、日本第一の高山芙蓉峰と申す山のよし、いにしへより申傳へて候と、申す。清正を始め諸軍勢、こはなつかしさ山の名を聞侍るものかな、と磯邊に立ちより能々見れば、雲か波かをわき難き、いと遠き沖中に、八葉の峰と思しき一點の山遙かに見えたり。清正磁石を取に方角をみれば、彼富士山坤に當れり、清正手を拍て、よにも遠く來しものかな、西の方

朝鮮（渡海せしに、却て我國を坤に見る事よ）、と諸軍と共に驚きけり。
清正が小手をかざして居る繪が添えてある。

茲でオランカイに關する古人の説明を附して置くが、大明一統志云、万良哈東海西、連開半界（北京北也）、北抵北海也春秋時山戎地秦爲遼西、其風俗與韃靼同（當朝鮮之西北）（和漢三才圖會）で、清正は今日我が國が守備の手をゆるめ得ない間島から豆滿江に沿つて、北青府に迄入つたものであらう。實に此當時からの事情を憶ふと、ごく滿蒙は日本の支配下になくてはならぬので、此度の滿洲事變の如きは、清正の眼には何んぞ映するであらう。

無論不二山が見える筈はないが、夫れに就て今村翁の御意見は、李朝の初めに

咸北の海岸から三峰島といふ、島が見え(常には見えず)たこの事から、廟堂の問題となつて、探險隊が派せられた。(風のため難船して果さず)。これは隠岐の島(三ツの山あり)が蜃氣樓にて映りたるものではなからうか。清正の時も多分三峰島であつたであらうこの事正しいと思ふ。

私は滿洲の野の酷寒に一層の勇氣を鼓舞して居る我が忠勇なる軍隊が、ほんこの富士山を眺めて呉れる目出度い日の來らむ事を祈つて居る。

(2)朝鮮役の留守の陰膳

「陰膳を人さへくればはなすなり」尙ほ繪本太閤記末尾の「洛東耳塚由來」に

此後朝鮮人來朝の時、かの耳塚をみて涙を流し、此塚に耳鼻を葬りし者は、みな我國の忠臣死を以て國恩を報ぜし人なりといふて、塚の下にて香を燒き、祭文を讀上て懇に弔ひけるぞ、

こ。馬琴の露旅漫錄にも「耳塚をみては昔をおさろき、太閤の廟を見ては昔をしのばれ侍る」とある。

耳のない幽霊の出る釜山海 (古句)
耳俵清正よりの送り狀 (武十一)

處が抑も耳取りは朝鮮が本家本元だといふから皮肉にも感ぜられる。

「宣祖王の九年に、日本の海賊が慶南の南岸に寇し、邊將が之と戦ひ勝つて殺した時に、首の代りに京城へ耳を送つて居る。又文祿の役のときに黃海道邊で日本に勝つた時に、矢張耳を切て送つて居る」朝鮮漫談

天保代の狂句に

あつちらの耳をこちで鼻にかけ
多分耳塚を詠むだものであらうと解するが、實は大に鼻をもそいで來たのであつた。耳鼻塚といふが正しいわけになる因に陰膳の句二三を擧げるこ

陰膳へ早うみせたいにぎり箸
は夫婦の情が充分出て居る、が

陰膳を飼犬のくふふとごきさ

は、ゆるす事が出来ない。

陰膳を壺まで置くと格氣なり
格氣なりと説明してしまつたのは嫌味だ

一人家來の陰膳に飽く

陰膳に匂ふ計りの青山椒

乙句は武玉川十一べんにある。面白い作である。

(3)酒まで強くなつて凱陣

零下三十度四十度の風雪を凌ぐには酒だ。團体からは滿州への慰問品としては清酒樽を贈られるを望みたい。朝鮮役でも多分に燒酎や濁酒が味はれた事であらう。

熊本産出の赤酒(あかさけ)と稱するは清正が朝鮮より傳へたものと云はれて居るあの種の製法が朝鮮に残らぬところから察すれば、英雄崇拜傳説であらうけれ共島根産の地傳酒も殆んど同一のものである點から、熊本島根等朝鮮交通の頻繁なりし地丈けに、言ひ傳へであつても残して置きたい。赤酒は主として婦人用で味淋式である。キュラソーであらう。一種の香氣を有し、淡黃色から赤褐色になる蒸米麴米により水の割合は比較的少ないそして搾取前に俗にいふ白玉灰(柳だま)か梅だまかの木灰を混和するのでアルカリ性をもつて居るのは、世界的に珍にするに足らぬ事だ。酒精分は多くない。惜しい事には發展をみず、近時五六千石高であらうか。

(4)元日に口へ出されぬ二日酔
(5)こわくなる神酒の生酔

二句を併べて酒後の妙がある。「寶の帖」の酒では

- (6) 酒酔かいやきに朝のさくら狩
- (7) 取持顔に先に酔ふ醫師
- (8) 火炭で習ふ婚禮の酌
- (9) つい醒る新酒に醒ぬ友呼て
- (10) 酒強ひてひらさら望む夷唄
- (11) 清盛も鱸を興に酒過て

(9) 新酒と古酒とにより醒める程度に相異なるものは成分上思へず、私の体験からも判断し得るが、専門學者に尋ねてもみよう。不知不識、量を過す程に古酒の味は美熟しては居る。新酒は一度に多くは呑めない。古人は「酒は味のうすきを上とし、苦くはけしきを中とし、甘きを下す」と(五色絲)と言つた。今は無色にして、うすい甘口酒、喜ばるゝ傾向となつたのは、色々原因はあらうけれ共日本酒に難儀な燗がメチャクになつて眞趣味を發揮し得ない處から、冷酒黨の殖えた事情もある。新酒は冷やの方が口に爽かだ。私は冷酒をあふる。貝原益軒先生は、冷飲は痰をあつめ、胃をそこなふ。丹溪は酒は冷飲に宜しといへり、然れ共、多く飲む人冷飲すれば脾胃を損ず少し飲む人も冷飲すれば食氣を滯らしむ

を戒めて居らるゝ。故に私は敢て冷を進める者ではない。欲するに任せむのみ(11)平家物語鱸の事に因る。安藝守たりし時、安濃の津から船で熊野權現に參詣の途、大なる鱸が船に躍り入つたのを、武王の故事に比し、自ら調尾して家の子郎黨にも食はせ、吉事を祝したとある。

(12) 春も漸立甫か庵に錦屠

野々口立圃は丹波保津の人貞徳門、重頼と論難し、遂に烏丸亞相に走り別に俳式を立てた。花月千句、袖中記外三十有餘の著述あり、有力な門弟輩出した。書畫を好くし、艾艸紙の挿畫なごかく。京に出て攤人形をひさぎ、雛屋立圃といふ。寛文九年七十一歿(十二月一日稿)

月刊 柳 誌 た ま む し

發行所

大阪市東淀川區
中津濱通一丁目

川柳たまむし吟社

大谷五花村主宰

東北 川 柳

發行所

福島縣白河町番土小路

東北 川 柳 會

本社基金 御芳名

(受 付 順)

醴金を拜受しました方々の御芳名を録し御厚志の程を深謝致します

- 金壹圓也 吉田 水車殿
- 金壹圓也 小原 一正殿
- 金壹圓也 一柳 憲坊殿
- 金貳圓也 今村 吉明殿
- 金參圓也 清水 盧白殿
- 金壹圓也 横山 勝二殿
- 金參圓也 長崎 シメ殿
- 金壹圓也 北出 義郎殿
- 金參圓也 福田 鶴峰殿

小計 拾四圓也

累計金三百八拾七圓十錢也



柳

(九)

山の如くに積重ねた書籍を、でんぐり覆した其の中に雨軒居士が埋つてゐる。文史狼籍といふやつで、斯うなる人間ではなくて蠹魚だ。定めし鑽研でも費してゐるのだらうと思ふ。さうでもない。原稿紙に描いた繪を見ながら頻りに欠伸してゐる。妙な繪だ。長い柄の先に椿の葉形をしたものがくつつき、其の中央に圓い穴が開いて、葉形の根元の所に獅子の首のやうなものが左右兩側にある。さうやら十六世紀頃のドイツの繪に見える。雨軒居士何んぞ思つてか突然それをビリ、シミ破つて、丸めてボンミ投げすてる。一つ欠伸をして又ペンを取上る。今度は左はねに三本先開きな線ミ、其の右側に圓を拵く、圓の上に耳のやうなものをくつつけて、右に又線を三つはね、胴、眼、口をつけ鼻先のあたりに團子のやうなものを描く。暫く其れを見てゐたか一寸首を捻つて「猫かき見てあれば髭に威あり虎かきすれば餅を喰ふ猫か虎か分くべからぬ怪物」ミ書きつける。なるほど、描いた本人にも不

の 絮

長 野 吉 高

可解な怪物が、餅を狙つてゐるミころらしい。「一顧すれば醜、二顧すればこゝ迄書いた時、後の戸を開けて妻君が這入つて來た。畫家の着るやうなセル地のブルースの短い變なものを着物の上から引かけてゐる。

「あの——。」

雨軒居士は黙つたまゝ次の文句を考へる。

「少しご相談がございます。」

妻君はテーブルの側に椅子を運んで來る。

「え——ミ、二顧、二顧すれば古女房——かな。」

「何んでございます？」

「いや、なに、こつちの事だよ。」

雨軒居士、やつミペンを擱く。妻君は口をまんがらせながら「本屋から請求書が參つて居ります。餘り多額なので私、吃驚いたしました。豫算がすっかり狂つてしまつたのでございしますもの、怎うなさるお心算でございます？」

「何んミかなるだらう。」

「駄目でございます。本ばかりをドン／＼お買込になつて、他の事はちつともお考へにならないからいけませんのよ。」

「うん。」

「さういたしまでう。」

「何んをかするよ。」

「支拂のあてがございまして？」

「うん。」

「大丈夫でございます？」

「うん。」

「駄目でございますう。」

「うん。」

雨軒居士の瓢箪鯨には妻君も聊か色をなして

「まア！少しは眞面目に聞いて頂けませんか」

「聞いてる。本屋のは當分ほつたらかしきなさい。」

「だつて——。」

「今、書いてゐるのが完成すれば、さうにかなるよ。」

妻君はテーブルの上を覗き込んで

「其れ、何んでございますの？妙な繪ではございせんか」

雨軒居士は慌てゝ怪物の繪を破つて捨てる。

「完成さ仰言つて、其れ怎うなるのでございます。」

「一冊の定價五圓として一萬部出す。さつと五萬圓だらう。」

「割の印税として五千圓ころがりこむ。」

「何時頃完成いたします？」

「さて、さ、今のところ期日未定だよ。何しろ大部のものなんだね。」

「飴で鳥を拵へるやうな事を仰言つて、——一萬部も賣れませうか？」

「何んさ言へないがね。さにかく完成してみないさ解らん當るも八卦、當らぬも八卦首尾よくゆけばお手拍子喝采いふやつさ。」

「ま、呑氣な事ばかり——。」

「二萬部賣れるさ一萬圓の印税だ。都合で鎌倉あたりへ西洋掘立小屋でも建てるかナ。」

雨軒居士は、取らぬ狸の皮算用ばかりする。妻君、馬鹿／＼しいと言つた顔付で

「雲をつかむやうな事ばかり仰言つて——小説ならさうか存じませんが、ドイッの其れも文學史なご限られた人しか讀みさうもないものが賣れますか知ら？」

「そこが算盤通りにはゆかないさ。相撲でも時に番狂はせがあるだらう。兎に角完成して見ないさ解らん。」

雨軒居士は荐りに完成を振廻す。妻君、其れでも多少は氣になるさ見えて

「近々完成出来ませんか。」

「無理な事を言ふもんではない。總べて事を爲すには一定の時期さいふものがある。お前だつて十日や二十日では子供は産めないだらう。」

雨軒居士、これで妻君に一撃を喰はした心算だ。妻君は負け

てゐない。

「二年もかゝれば私、子供の二人は産んで見せます。變な繪だけは描けませんけ——」

「今の著述に二年位の歳月を費すのは當前だよ。ルウゴン・マツカル叢書は二十五年かゝつてやつて完成されたものだ。ボオル・アレキシスが言ふの一日に約四頁づゝしか書かなかつたさうだがね。わしも其の位の意氣である。」

妻君は到々匙を投げて

「随分呑氣でいらつしやますのね。貞子のあのギリシヤの何んか講義もやつぱり其の手でございませう。昨日、小石川へ参りましたら貞子がこぼしてゐました。あの調子では向ふ五十年もかゝりさうな、ですつて——」

「今日はやつて來ないかね。」

「少し風邪氣味だと言つてゐましたからさうでございませう。知ら——」

「テイ君はものになるよ。なか／＼熱心だ。今は一幕物の戯曲を書いてゐるが、書いたら何處かの雑誌へ、わしが推薦して發表してもいゝと思つてゐる。お母さん正夫君が吃驚するだらう。」

「本屋の支拂ひの方はさうなるのでございませう。」

「テイ君は矢張りわしと思つた通り小説より戯曲方面に進めた方がいゝよ。で——」

「其んな事さうでもないでございせんか。あてにならない印税なんか、のん／＼待つてゐる譯にもゆきません。日頃から家計の事には無頓着でいらつしやいますけれど少しは私の立場もお考へになつて頂きたうございませう。本な

きでもドン／＼お買込みになりますけど、其の事を一言仰つて頂かないと、私の方の豫算を折角立てゝゐるまでも突然それが狂ひ／＼いたしまして——」

「よろしい。」

「何時でも、其の場限りですぐにお忘れになるのでございませうもの。」

「わしだつて濫費はしない。節約はしてゐる去年の夏は、一夏中裸で暮したらう。お前なんか野暮だなんて小言をいふが、あれはわしに考へあつての事だ。つまり着物の節約になるからね。」

「其れは節約ではございせん。」

「節約だよ。立派な節約だ。着物を着ないんだからね。」

「一日中書齋に引籠つていらつしやれば其れでいゝかも知れませんが、私はさうはゆきません。贅障で申上るのではございせんが、女には女の身だしなみさういふものがございませう。此の二、三年來、私古い物ばかり仕立直して着て居ります。新しい物なんか一枚だつて買ひはいたしません。ドン／＼お買込みになる高價な本が二、三冊あれば一枚位の着物はさうにでもなります。」

雨軒居士は苦笑して

「これは數蛇だつた。」

「私共の今の家庭には、定収入がございせん。僅かばかりの印税で、其れ／＼の切り盛をしてゆかねばなりませんから逆も苦しうございませう。貴郎は理財方面の事は何んにもお解りにならないし、よしやお解りになつてゐるにしても無頓着でいらつしやるし——」

「散々だね。いや、参つたよ。」

「私、何も他の有閑階級の奥様達のやうに贅を盡したいとは露程も思つてはるません、ですけれど、生活に必要なだけの収入支出に絶えず脅かされてゐなければならぬのは可成の苦痛でございます。」

形勢非なりと見てこつた、雨軒居士、腰を浮かしながら

「され、茶の間へでも退却するかナ。」

「お考へをうかつひたうございます。」

妻君、其の手は喰はない。何處までも追求する心算である。

「至方がない——印税が待てないとするこ、急場凌ぎにまた小説でも書くんだね。」

妻君、警戒して

「これもあてにはなりませんわね。」

「いや、書くよ、三日でつち上げる。都合でお前をモデルにしてもいい。」

「いけません。碌な事はお書きにならないんですから——」

「では茂里榮にしやうか。」

「いけません。」

「然し、面白いのが書けると思ふがね。お前はモリエールの書いた *Le Jeu des Femmes* といふのは知つてるか。これは

妻君學校でも言はふか、兎に角皮肉なやつだがね。」

妻君は突慥食に

「存じませんよ。」

「これはね。或男が一少女の未來の良人を以て自ら任じ、この

少女を監督して厳しく世間から引離して無智文盲ならしめる

爲め無味乾燥な教育をする。然るに、この少女は何時しかこの

監督者の警戒注意を巧みに避けて、彼の眼前で着々他の男と戀を進めて遂に成功するといふのだ。さうだ面白いだらう」

妻君は鼻の先でフンミこすつてそつぽ向く

「わしはね、これを逆にしてプロットを立てる——つまり、

一少女が其の監督者の峻厳無比な教育に、却つて陥つて了つて、監督者の戀人を斥けて遂に目出度結婚する、こやるのだ

よ。さうだね、この少女のモデルを茂里榮にする。」

「馬鹿な事を仰有ものではございません。」

「モリエールと茂里榮とは淺からざる因縁がある。モリエールの書いたものを焼直して茂里榮をモデルにするに何の不思議がある。峻厳な監督者にはわしがなつてもいい。」

誠意が無くて、ものゝ相談も出来ない雨軒居士の不眞面目さ

には、妻君も餘程腹が立つた見え、ギョツミ下唇を噛みし

めて凄愴な形相をする。流雲暮りに雨か風かといふ所だ。

雨軒居士は、背を丸めてゴリ／＼頭を掻き始める。櫛を

入れない髪がはたきのやうに揺れて、糠のやうな雲脂がポロ

／＼落ちる。其れを指で撫で集めてはブツミ吹飛ばす。

「見なさい、この雲脂を——」

妻君は、痛激な一語を放たうとするところへ雲脂が飛んで來

たので思はず

「あら、汚ない！」

調子に乗つた雨軒居士は、やたらにブウ／＼吹きつける。

「さうだい、素晴らしい雲脂だよ。」

妻君は到々愛想をつかした見え、憤然として立上るこ、

椅子をガタビシャンミはね除けて足音荒々しく部屋を出て行

つて了ふ。(つゞく)

詠古史狂句半打

岡田三面子

一 眞根子^{まねこ}の忠死○眞根子は壹岐^{いさぎ}直^{ちか}の祖なり、應神帝^{おうじんてい}の九^こ(西二七八)年武内宿禰^{たけしち}勅^{しき}を奉^{たてまつ}して筑紫^{つくし}を監祭^{かんさい}す、弟甘美内宿禰^{あまみ}其威勢^{そのいせい}を嫉^{にく}み、帝に讒^{かん}して曰^いく「武内三韓^{たけうちさんかん}を招き不軌^{ふき}を圖^{はか}るゝ」帝之^{その}信^{しん}じ、人を派^はし誅^{しつ}を加^くへん^す、武内歎^{なげ}して曰^いく「吾忠^{わしたう}を以て君に事^{こと}ふること茲^{いま}に年あり、今寃^{いひ}に死せん^すは何ぞや」^と、眞根子武内に説^ときて曰^いく「大臣^{だいじん}の二心無^なき、天下共^{てんか}に知る所^{ところ}、乞^こふ潜行^{ひそか}して闕^{けつ}に在^あり、自ら其無辜^{むこ}を辨^わぜよ、僕^{わが}の貌^{よう}大臣^{だいじん}に似^にたり、身を以て君に代^からん」^と、劍^{けん}に伏^ふして死^しす。

墨子^{すみ}まで違^{ちが}ふ後^{のち}なし好^{この}いマネ子身代^{みしろ}りの眞根子^{まねこ}餘人^{あま}に出来^{でき}ぬ忠湯^{たう}の前に眞根子^{まねこ}が忠も水^{みづ}ならず

嘉三・小樽八ノ五表

新三・ハ七表

二 武内^{たけうち}の探湯^{たんたう}○武内大に眞根子の死^しを悲^{かな}しみ、其言^{そのことば}に従^{したが}ひ筑紫^{つくし}を脱^{だつ}して南海^{なんかい}に出^でで、闕^{けつ}に至^{いた}りて自^{みづか}ら明^{あきら}にす、應神帝^{おうじんてい}武内及甘美内^{あまみ}を鞠^{まり}訊^{しん}し、磯城川^{いそぎがは}の濱^{はま}に二人^{ふたり}をして湯^ゆを探^{たづ}り、眞僞^{まゐ}を神^{かみ}に質^{しつ}さしむ、甘美内^{あまみ}罪^{つみ}に服^{ふく}す、探湯^{たんたう}は後の所謂^{そのう}湯起^{たうき}請^{しん}なり。

天明五己・禰四裏

九一・二六表

一〇二・二一表

一四八・二六裏

一六〇・一一裏

三 巴提使^{はてし}の虎殺^{こころ}○欽明帝^{きんめいてい}の六^む(西五四五)年三月^{しがつ}膳臣^{しんしん}巴提^{はてし}使高麗^{こうらい}に使^{つか}し、雪夜^{せつや}幼兒^{こうじ}を虎^こに喰^くはる、巴提使^{はてし}大に怒^{いか}り、逕^{ただ}に追^お蹕^しして虎穴^{こけつ}に入り、左手^{しやうしやう}虎^この舌^{した}を把^とり、右手^{みぎて}刀^{やいば}を抜^ひいて之^{その}を殺^{ころ}す。

千里越^{せんり}す仇東^{きゅうとう}の間に巴提使^{はてし}討^うち

九七・九裏

四 調伊企儼^{てういけん}の尻喰^{しりく}らへ○伊企儼^{いけん}は難波^{なんば}の人^{ひと}なり、欽明帝^{きんめいてい}の二十三^{じふさん}(西五六二)年紀男^{きなん}磨^まの副使^{ふくし}として新羅^{しんら}を攻^せめ、敗^まれて

敵^{てき}に捕^とはる、敵伊企儼^{てきいけん}に向^{むか}ひ「日本^{にっぽん}に尻^{しり}を向^{むか}け、日本^{にっぽん}の將我尻^{しやうがしり}を喰^くへ」^と云^いへ^と、命^{いのち}す、伊企儼^{いけん}即ち尻^{しり}を新羅^{しんら}の方^{ほう}に向^{むか}け「新羅王我尻^{しんらわうがしり}を喰^くらへ」^と叫^{こゑ}び、殺^{ころ}さる。

尻^{しり}を出^だす伊企儼^{いけん}新羅^{しんら}を捉^とめし、イキナ尻^{しり}野暮^{のぼ}高麗^{こうらい}人^{ひと}とて餘^{あま}よし、二千年^{ふたせんねん}このかた句^くふ伊企儼^{いけん}の尻^{しり}

新三八・一〇裏
安政元・リ四裏
靈・立机一八頁

五 烏羽^{くわう}の表^へ○敏達帝^{みんたいてい}の元^{げん}(西五七二)年五月^{ごがつ}(續日本紀^{しよくにっぽんぎ}及昆陽曼錄^{こんやうまんろく}乙^{おつ}を延曆^{えんりき}九^く・西七九〇)年の事^{こと}す、高麗^{こうらい}より調物^{てうぶつ}共^{とも}に烏羽^{くわう}に墨^{すみ}を以て書^かしたる表^へを獻^{けん}す、讀^よむこと能^{あた}はず、船史^{せんし}の祖^そ王辰爾^{わうしんに}之^{その}を飯^{いひ}の上に置^おきて蒸^むし、帛^{ひく}を以て羽^うの上^{うへ}を押^おしたれば文字^{もじ}寫^かりて讀^よむことを得^えたり帝^{てい}之^{その}を嘉^{よろこ}す。

腹黒^{はらくろ}き業烏羽^{くわう}へ文字^{もじ}を書^かき口よりも憎^{にく}し烏^{くわう}の羽根^{うね}へ文字

嘉三・日一〇表
安政三・海七裏
新三八・稻九裏

湯氣^{たうき}にするは烏羽^{くわう}に染^ぞめたる文字

一二三・甲・四〇表

たきつた智惠^{ちゑ}は燕羽^{えん}根^{こん}の左文字

安政?・入一〇裏

烏羽^{くわう}は朝露^{あさつゆ}ほごの湯氣^{たうき}で讀^よみ

久二・高一三裏

烏羽^{くわう}の文字^{もじ}飛切^とつた智惠^{ちゑ}で讀^よみ

九九・八一裏

鶴^{つる}の眞似^{まね}をせぬ智烏^{ちくわ}羽^う湯氣^{たうき}で讀^よみ

嘉三・日一七裏

鳥羽^{とりう}の書^{かき}を讀^よみ天^{てん}に名^なを飛^とばし

梅柳九・一〇裏

湯^ゆのたぎるまでは辰爾^{しんに}が智^ちも讀^よめず

新三一・湯一〇裏

餘^{あま}は押^おして知^しると辰爾^{しんに}が智^ちをた^たへ

萬四・フクラー三表

烏羽^{くわう}に文字^{もじ}が鳴田^{なりだ}に黒^{くろ}文^{ぶん}結^{むす}

梅柳一九・一三裏

六 夏井^{なつゐ}の智^ち○姓^{せい}は紀^き、文德帝^{ぶんたいてい}の殊寵^{しよくちゆう}を得^え、帝崩御^{ていほうご}の後^{のち}、書

岐^き及び肥後^{へいご}の守^{まも}りなり、良治善政^{りやうぢぜんせい}、民其德^{たみそのとく}を仰^{あが}め、性多能^{せいたのう}、書

は其師^{そのし}小野篁^{おののえ}に書聖^{しよせい}と稱^{なづ}せられ、園基^{そのもと}、箒^{はら}を工^{たく}にし、藥物^{やくぶつ}の事^{こと}に明^{あきら}、一七能^{いちぢ}く狂者^{きやうしや}を治^しせられ、貞觀^{ていがん}の末^{のち}(西八七五)に死^しす

諸卿^{しよけい}皆^{みな}肝^{かん}を冷^{ひや}した夏井^{なつゐ}の智^ち淺^{あさ}からぬ惠^{めぐみ}み夏井^{なつゐ}を墓^{はか}ふ民

新二四・七フク五裏
嘉四・入一裏



日本柳壇百人撰

1931年の收穫、自選三句集 (ABC順)

大阪麻生路耶

戀の窓あの眼だらうか眼だらうか
なあちりりこれから秋に親しまう
酒とるりとりり大空のこころかも

大阪麻生葭乃

糸瓜もう水をとられる風と知り
飛行機は流れるせなの子は達者
赤いポスト君のハートに似て立てる

大阪浅井五葉

いゝ嫁を持つて仰山繼ぎをあて
偏屈が三人寄つた薬風呂
年の暮八百屋算盤おいて賣り

守口朝田新水

表情を薄らぐ妻の添乳を見
内職の見本を見せた一ト苦勞
博士とて世間は見えぬ顯微鏡

大阪阿部閑生

外出へまだつかく^くと往診し
死魚の眼よ氷のなかに安らけし
我出てすぐしまる門淋しいぞ

松江青砥可明

出る船は出て船宿の安來拳
大掃除暫し汚れた晝の月
惡筆がいつそ若うに見えて戀

大阪安西杏三

棺側に友達一人居ればよし
纏りのない風景に子を連れて
賣る本を抱へて踏切を越えぬ

朝鮮蛭子省二

母がお酌をして呉れる我儘な年だ
七十二歳になり玉ふ
愛犬と暮す
喧嘩好きの犬に屈辱のない暮

舊正月にあんま^{老害生の閑居}とる瘦せよう

京都藤本福造

あまんじて叱られる氣の金を出し
檢札のお手やはらかに起こしかけ
玄關に位置けせぬやうに立ち

東京藤島茶六

部屋の灯が擴がつて来る祝い事
杜を離て、學校のばんざい
傷口へ槍惶としてこの日逝く



大 阪 福 田 山 雨 樓
 いかなごがうまい子の箸親の箸
 廊下を折れた姿が支那に似る
 日輪草倒けた姿が支那に似る
 青 森 後 藤 蝶 五 郎
 寝てよし起きてよし春に包まれる
 詐欺をするのかと貧乏おどかされ
 いきまいて見て淋しさへ突當り
 大 阪 本 田 溪 花 坊
 雪たれ朽ちて結核菌おどる
 落飾の日がらに春の彼岸来る
 ひとときの瞑想さくら咲く散る日
 大 阪 橋 本 緑 雨
 禍はひを恐れ女は黙つて居
 壓迫もあらうが親も妻も子も
 秋風にすすきも我もさからはす
 大 阪 堀 口 塊 人
 いさゝかの金で嬉しくなる世帯
 さいなみは夜の長屋の水たまり
 進歩する時代の底に三世相
 福 島 久 田 狂 水
 暮に出て東京驛の春に着き
 民事部に慾をはなれた顔もなし
 見習はメスに流れる血に慌て
 神 戸 日 野 華 水
 断言へ念をおしてゐる眞の友
 啞の子へ旗を渡したちんごんや

子を貰うてお寺参りの日が暮れる
 東 京 井 上 劍 花 坊
 二人寝に飽き一人寝のそれも飽き(祈禱)
 三井でもちやりんくとはした錢(同)
 日は西に月はまだ出ぬ世紀末(同)
 東 京 井 上 信 子
 圓光のほの白き貧血の空(註選)
 空ろ心へ血は澄んでさかのぼり(同)
 逞しさばかりを男武器にする(同)
 大 連 井 上 麟 二
 逞しきアシアとなつて吹雪く夜
 一つ消え二つ消え三つ消へる泡
 細胞となつて地中に潜ぐる影
 大 阪 岩 本 素 人
 伸び上つてもお正月は見へず
 聖書には雀でさへと書いてある
 感激の女は乳へ息を溜め
 撫 順 岩 崎 柳 路
 れむり草の様な女に墓はれて
 すこやかに寂しい秋の旅で寝る
 ロボットの様な男で蓄めて居る
 大 阪 伊 藤 愚 陀
 空と地とつなぐ都會の輕氣球
 情痴の風景にリツプステイクが折れてゐた
 まるれえね・ていざりつひに帰ぐ
 秋の女灰となりゆく煙草すふ
 島 根 伊 藤 緑 之 助
 酔ひがさめたら嵐をききなさい



お寺の屋根が昔の月を慕つてゐる
木の葉の青き團結せよといふ

大阪 岸本 水府

大阪は號外配る旅戻り
妓一せいに鮎の骨をぬき
いさかひのまだひと言は午前二時

東京 川上 三太郎

友だちのうしろ姿の有難味
嬉しやな子供を抱いて陽を探りし
赤ん坊の正月は只陽が當り

東京 近藤 鈴ン坊

世渡りさ。疊鰯の焼加減
山の湯の静けさ己が臍に會ひ
自分だけ笑ひマイクロホンへ洒落

大阪 食満 南北

泣いてゐてふつと手摺の面白さ
何といふ虫かとの仲がなほりかけ
ふと歩行くもとの我家のかしや札

函館 龜井 花童子

腹のいゝ男で嘘を云へず寝る
苦しみの底に笑つてくれる妻
てつか巻三つ目鼻へ強く來る

大阪 木村 牛文 錢

これこれ雑魚ども月がかけたのだ(神選)
かぞへみて道に重き指と知る(同)
秋は去る湯殿の梁を傳ひつゝ(同)

青森 小林 不浪 人

頗杖のたゞ一心に思ふこと

早速に思ひ出せない父の年
此頃はぼけたと云つてぼけてゐる

京都 桑原 京郎

こゝろの鎧着るは淋し(き駄選)
バツト級レイヨン級はまだ娛(し同)
嫂の涙が走りもとで落(ち同)

岡山 龜山 寶年坊

昔々蚯蚓は土に寝すごして
喃臍ふ汝の世より食ふ掟
寝にかへる鳥へ高い山低い山

愛知 加藤 文醉

弟子の眼に師匠の水解けかゝり
瘦せ腕をしみつと思ふコツブ酒
薄情な前へ財布がごさり落ち

信州 金子 吞風

教師フト笑ひを窓の外へ捨て
文化村三越製の嫁が來る
女房の寝顔にすまぬ世帯瘦

函館 神尾 三休

三軒の中が空いてるまゝで冬
妻の蒔いた波菰草の喜び
見つめある菊の心になりかゝり

東京 河柳 雨吉

臺所更けて柄杓の沈む音
籐椅子に露けき夜空覺えつゝ
しらゝと雪の障子の夕づくり

別府 木村 晃卓

僕とこが困る丈けさと貸してやり



肺だからよるなと言へば涙ぐみ
秋風の吹くにまかせて柳散る
函館北村白眼子
静うかな心小鳥と話せさう
かきと母の掌冬が来る
風へ夫の影の贅し過ぎ
神戸喜多春秋
おとなしい客はマツチを擦らすだけ
賣れぬ妓と賣れぬ妓夢の話する
縫ひながら聞けば糸屑なご拾ひ
東京前田雀郎
轉寢の夜^{嬰中迎春}あむかき松の内
熱の子にみんな居るよと云ひきかせ
手の筋も淋しい時の足しになり
大阪松盛琴人
鍵すてる心になつて合掌し
労働を賣らぬ日といふメーデーの埃り
死線を越えてカンテキを煽いでる
東京村田周魚
家に居て飲んでばいゝ星まわり
叱れても雪やこん／＼子の素足
硝子戸のくもりピアノ冬の音^(社選)
松山前田五健
落ちついて嗅けば矢つ張り金の呼吸
闇ひの美へ水を打つ武徳殿
好色にされて笑つた顔の艶

京城正木柳建寺
眼薬にしやれ繪日傘先を行く
近所では産後の無理を知つて居る
叱つては見たが添はせる伯父の腹
大阪松丘町二
噓して妻の笑の處女に似る
漬物の音ばかりなる夜の膳
夕べ疲れた屋根がごちやとある
東京三浦太郎丸
春曉をばつちり眼覺む縹緞よし
子の下駄の無事に脱がれて夜が深い
大晦日馬のまごるむ日向あり
備前三村叱咤郎
焼け跡の燻ぶるゝまゝに星黒し
諦めに似しかなしみを引つ被しり
小春日の墓地の暖かきがうれし
大阪森雞牛子
地の上の五尺高さにある世間
おだやかな波に日本洗はれる
木枯に俱樂部あか／＼灯るなり
大阪水谷鮎美
善人にすぐれてあをき松の風
おちついて居れば鼠に人の呼吸
幸福の傘さしてゆく人の呼吸
大阪森東魚
眉唾だぞと漫談へ槍が出る^(社選)
いつそもうシャンで女流のダイビン^(同)
夫婦仲鐵と鐵ではあるまい^(同)



横濱 村上餘念坊
 死なせともなき母へ又冬迫る
 意志が通じた啞朗らかに笑ひ
 ハイヒール同士水虫をかこち
 大阪 増位 汀 柳
 黙しゐるその情熱をさそう唇
 鳴る音のさびしい瘦せた人の骨
 青い空にさわつてみた手のひら
 宮津 宮城 啞 亭
 鼈甲の質へ盛装出来上り
 賣れただけ鳴らして包む陶磁器部
 軍艦ももう寝たらしい灯に替り
 松山 三好 計 加
 鶴嘴の並んでおちるのを見とり
 煙突の煙りこちらへ許り來て
 ステツキで蛙つゝいてみたりする
 兵庫 長崎 柳 秀
 別人のやうに迷信金を出し
 初雪の庭父を呼び母を呼び
 からこつた後の涙を拭いてやり
 東京 西島 〇 丸
 ごうしたら敵が愛せる佛の灯
 ひつそりと二階に病で雨をきき
 初日の出心に恥る事ばかり
 鳥取 中島 鐵 洲
 二十年妻の素顔も尊く(秘選)
 盆磨く前に居眠る母おはす(同)
 彼不惑自制もなくて灯をく(り何)

京都 布部 幸男
 うちで呑む夜がついて二月来る(秘選)
 スタートに似て交又點青を待ち(同)
 バスを待つ雪のなかの兒の玩具(同)
 東京 中村 山門
 擦れ違ふ心豊かな春の人
 天才兒自殺をするとなつたつきり
 親し氣に郵便が来る夕時雨
 高知 中澤 濁 水
 淨玻璃に映らむ姿おもふ齡
 眠られぬ闇の深さを庭に見る
 可笑しさをたえぬに告げ泣いてゐる
 朝鮮 中内 如 空
 けなされて豚と住まうかとも感じ
 筆もつて今更うそのむづかゆき
 めつきりと肥つて一つ苦が嵩み
 神戸 西村 明 珠
 實印を一つおしたる年の暮
 みにくさに女子大學を出てしまひ
 障子張りゝ轉宅がしたし
 大阪 中見 光 路
 繋がれた菜箸に似し夫婦とも
 脊の壁よせて疲れを知つてくれ
 居蘇微醺國旗にくるゝ家を辭し
 大連 大島 濤 明
 我が愛の盆に溢れる子の笑顔
 何時の世に野山へ歸へる牛や馬
 文字のない世界で唄ふほんとの詩



福島 大谷 五花村

とりいれが濟んだ圍爐裏の暖かさ
徳利が重たく見えて胃が悪ろし
五分割に禿の隠せぬ初年兵

大阪 大石 文久

糸車から風景は稻げかり
宵の色小唄の宵の流し元
麗人の愚痴白粉の事を聴く

名古屋 岡本 映絲

じつと見て居ると女に髻があり
近頃の自分映る茶碗酒
手馴づけるまでの女將の親切味

大阪 小田 夢路

正月へ怪しき生花の久し振り
灯がつけば朝の眠さを忘れたり
繪にされる土筆の姿ながみじか

東京 落合 六文 銭

はかなくも思ひ出せない瞳を墓(お墓)に
満ちて来る潮うれ陽を乗せて(ひまわり)
何か待たるゝ菊の装(ひまわり)

千葉 阪井 久良岐

關犬と競馬の中で句を作り
山林に久しく餓えた目を見張り

甲府 府 堀

一日で甲府葡萄に飽きるところ

神戸 梶元 紋太

神様へ親子五人と申し上げ
借金を思ひ出した忘れたり
ストツプに出過ぎた線へ立すくみ

大阪 庄 萬よし

特高に戦旗改造資本論(論)
警察の立場でつべんからの(警)
戦術の一つ検束されて行き(同)

甲府 篠原 春雨

桃割に結はせる母で切り廻し
賣薬の袋うごんの露に濡れ
社會課の指揮で涙の餅を搗き

京都 齋藤 松窓

着るものゝ持つものゝ數春の娘に
足袋を履く時にみだらな廿四五
長男の紺緋から秋が立ち

大阪 住田 亂耽

油繪に塗りこめられた巡邏兵
ガラ幹をのせた夜汽車の赤い煙
鼠の端もつ獸人の鼻の尖

大連 佐々木 三福

北風にむんずと組んで出る稼ぎ
彈道のさきに轉んで出る稼ぎ
恙く今日も軌道へ戻りつき

横濱 柴田 五萬石

童心になれば明るい事は白かり
諦めて暮らす浮世は面白く
支那は又戦争だけな櫻咲く



大阪 關本 雅幽

鐘紡の煙の下で咲くバラよ
二三萬持つてラサオで體操しよ
秋晴れの車輪も稼ぐものに見え

神戸 三條 東洋 鬼

雨は黒しルンヘンの唄ふ聲
秋の空借金ぐらい恐れまい
父のない子が靴音へ眼を覺しい

大阪 鹽路 吉丁

あちこちで聴いた話で笑はせる
二階から子供の連れの母を見る
考へてゐると木蔭の面白さ

大阪 櫻井 圓角

お前居す錦帶橋を寒うふみ
ダイヤのみ光らせてゐて子を抱かす
たんぼを吹けば心配飛んでゆき

東京 高木 角戀坊

竹の子を見上げて笑ふ藪の風
足音に眼高の列は向ふ岸
雨漏りは釋迦も佛も知らぬ貌

大阪 高橋 かほる

元日の足袋は着物の上に乗り
石鹼の泡から男顔を出し
美粧院 好い奥様にして返し

東京 塚越 迷亭

慰める友達先へ酔が出る
金の他にも轉職を阻むもの

或る時は涙もろさへつけこまれ
大阪 竹内 多聞

ギラ／＼の顔で儲けた話なり
親切の揉み掌にこぼれるばかりなり
満足は兎のやうに飛んて去りに

東京 寺井 紅太郎

寄せ鍋のいろざりに似た差向ひ
友達の顔を浮べて旅の酒
火が水に負けた音なり水こん

東京 高島 玉兎朗

急かされてる紺屋皐月が眞盛
大晦日一の得意は遂に留守
あゝ言へば斯う言ふ鬚の根が痒い

長野 高峰 柳兒

境遇の話ごつちも國訛り
慰さめてやれば失戀ちと惚けり
貰がれば續かぬ戀を惚氣たり

東京 海野 夢一 佛

他人の子を親に返した手が寒い
あけすけに笑へる心豊に
髪洗ふ妻に久しい肩のこり

石川 上野 錦水

水音に心忙しい日暮かた
頼られる男にいつかなつてゐた
ごつかりと椅子へ身を投げ金が要る

天津 和田 默然人

切れ風の糸淋しくも巻かれたる



ひやかして買ふ阿彌陀様五十仙
赤化していゝか茶碗にきいてみる

金澤 安川 久流 美

質しきの中へ玩具の獅子頭
梅干に凹んだめしの有難さ
とりいれの中に不平の兒が泣くよ

大阪 安井 ひろし

昭和六年五月廿三日妻の寫眞と共に筆端に移り住みて

妻待つ如く夕には歸り
家内中兒をまん中に笑ひ聲乾運
アナクロのシンボルよコンクリートの城(四)

東京 八十島 杜若

三毛に膝食して果敢なき酔心地
物みな呪はしく春の宵迫り
三座今ハープメントへ吐き出され

大阪 山本 雨迷

梅咲けば桃よ移氣捨てに出る
砂を掘つて埋れてみたり侑つてもみたり
ぬぐひえず涙落ち落ち去ぬる選手ら

京都 山川 紫明

春の陽へ田螺も向きを替えて晝
淋しさは子の命日へ燐する
振向いた錦魚が金に光るなり

京城 横山 巷頭子

金魚鉢 金魚 驕りの色を見せ
母よりも伸びて高等女學生

ドライヴの機嫌は西條八十の唄

大阪 楊井 二南

半數はさくらの様な味方も居
こほろぎへ膝が淋しくなる女
責任は重く袴の皺が出來

大阪 山上 月下

希望あり戀あり父の氣と合はず
金がほしいと思ふ日は雨が降り
雑巾の匂ひ編上まだ穿けず

○

我が柳壇の戦跡を一目瞭然たらしめるため一九三一年の作家一百人を選んで三句集を編んだ。その人選については編輯局でも議論に花が咲いたが、一ト先づ以上の人々が選ばれた人となつたわけである。かなり有名で人選に漏れた人もあるが、それ等の人々は一九三一年度に於て休火山状態にあつたものと思はれた。尤も大して活躍してゐなくてもその名を逸するにしのびない人もあつたので、その少數は拾つて置いた。來るべき一九三二年度の活躍を期待する。この事業の完成を期すべく早速玉句を寄せられた諸氏に對し感謝の意を捧げる。

猶、玉句の不着に對しては社選としたことを諒とされた。住所不明のため人選されなくなつた人に對しては次期に於て完璧を期することとし御寛恕を乞ふ次第である。



川柳塔

素・琴・山・緑・合議選

朝田新水

女房の買ひ度いものに亭主る
貧乏に馴れた餘裕は寢轉べり
落葉のかほり戀人や病む
巡禮の顔にも朝は輝きぬ
野良猫の聲も冬なる水仕事
頑丈な扉の前のコンバクト

松盛琴人

萬よし氏無産新聞を發行す

汚れてる服へ萬よし光つて

眼を病ふ

眼病の手を引く妻の手のぬくみ
刺繍フト山茶花の陽へ下駄をはき
半分もつけぬ日記へ十二月

灰色の水平線へつゞく旅路

○

岩崎柳路

日の丸がハッキリ目立つ萬國旗
燒栗の甘き匂も暮の街
處女作へ未だ寢もやらず原稿紙
冬籠り今日もきてらの儘過ごし
湯治場で鶯も聞くホネムーン

○

山本丹路

割切れぬ剩餘は夢に預けそこ
十二月愚痴をこほしに逢ひにゆく
赤きくちびるの震ふなる十二月
溜息をすれば散りゆくものゝあり
人みんな後姿さなるもよし

○

住田亂耽

犬の子の感傷足にすがりつく
猿よお前も器用貧乏
デカタンの中から凍夜の酒の色
麻雀を覺えて久し松の内

○

關本雅幽

十二月糸巻かされる男の手
夕飯の湯氣にも見ゆる苦勞性
此の暮れも我は心の手形書く

○

橋本綾雨

北風に雀二三羽向つて來
清淨な氣で歩いてる神詣
新婚の喜びの靴の紐を解く

◇ 中野裸人

紙の旗ふる子の末をふみ案じ
かけごりが來たミ女房這入つて來
天理さんへ大酒呑みを連れてゆき
風呂を出てまるこい月を子が見つけ
座ぶさんを枕にせよミ子が教へ
姉さんの重味に下駄のへる事よ

◇ 水谷鮎美

勅題 曉雞聲

雞に餌はやつてあり初日の出
申歳に因みて

猿廻し日向くを追ふてゆき

長男光男生る

すゝろくの上りのごこく兒が産れ

妻へ

鯉汁の味をたづねて尻からけ

その後のち

父笑ひながらに孫を抱きかへる

◇ 茨木奈緒美

淋しさにたへられず湯槽のけむり

十二月かさねふさんの白さかな
冬の街影はちいさくなつてゆく
眼をさぞて風を聞きさるる寒さなり
十二月ダブルベッドの十二月

◇ 熊谷紅

親は親子は子でやれミ父は呑む
二坪の庭で儲けた地玉子
淺ましき限りお金にヒョコつきぬ
シグナルの青さへ走る燕號
金だらゐ妻の氣嫌へ磨かれる

◇ 西村明珠

ポーナスを社長只やる様に云ひ
こんな酔ふた父を知るまい
座蒲團を押しあてられてよい話
吐りさばして笑ひたくなる
あの口の底を叩けば寒いんだ

◇ 平井蒼太

芋かぢる泥にまみれた手はふさい
女角力見てるて何にか涙しぬ
太股に女角力の佗しさが
眠れない夜を繰返し錢勘定

◇ 岡崎桂枝

舉丸の様な氣樂な御病氣よ

さればきて訛も今更ら間に合はす
初東風に遠音神樂の笛もよし
失業の俺へも月のまん丸く

◇

中澤 濁水

物思ひ御飯ですのへ眼をおくり
結局は歩み合つての酒になり
バスガール苦勞の切れを腰に當て
案内だけ蹴躓いてく暗い途

◇

上野 錦水

痛いものに觸れまいとして高笑ひ
ふご口を衡いて子供の唄になり
あめつちを貫ぬく努力三十四

妹 逝く

一人減れば斯くも淋しい吾が家なる

◇

三好 計加

谷間から耕す音が響くなり
煙草すうて小春を土手に座つてゐ
硝子戸へいびつな顔にうつるこ
日向ほつこして吞氣そうな車夫

◇

西田 艸樂

白粉の厚さ亭主は婚養子
枯薄兎の糞もあつてよし
環垣も華表も朱し葉も紅し

密柑の赤さよ俺も正月だ

◇

妹尾 變人

火鉢にもたれて女大膽な
十二月大きな嘘を書いてゐる
齒の抜けた母の笑ひのフト淋し
母が來るこ云ふ正月を待つてゐる

◇

久方 慕秋

實直な重役さんで死にはつた
叱られて叱られてまだ暮れ残り
指先きへ俺の力があつけなし
小春日の晝を波止場へぶうらぶら

◇

吉田 水車

千秋樂さてぎれだけの土つかず
ひたむきに走る車輪も冬の音
誓文の飾持ち越す歳の市
ひたひたこ寄せる波紋へ乗つて冬

◇

西村 山月

慰問金千人針で通られず
早起へ山茶花寒う咲いてゐる
立賣りに聞けば小盛飯哀れ

◇

喜多 春秋

忠實な瓦が忘れられてゐる
入墨をしてゐる叔父の子煩惱

素人の聞くがうるさい植木職

◇ 姫田 夕 鐘

暮し向き知らず遊びにかへれなき
夜逃げその菊の盛りを置いて行き
うすべらな俺に責任つきまこひ

◇ 池田 雪 峰

初日の出今年は運が向きそうだ
心迄冷へ切つて君金をため
初日の出白紙の如き心にて

◇ 岩垣 奇 可 愛

金を借る勇氣が出るも十二月
皆寄つて結局景氣悪いなア
落ちついた家は子供が未だ寝てず

◇ 川村 觀 月

父母の祈る姿のさうさけれ
達觀をして踏切の旗を振り
たのもしき姿に惱まされてゐる

◇ 永川 秋 月

鮮人が荷物のように子を脊負ひ
まだ死んじやならぬ病氣追拂ひ
呑み乍ら子の算術をほめてやり

◇ 日野 華 水

ブラシ今ポケットに何かあるのなり
へら臺へ遊び疲れた子かもぎり

タイピスト暇に唱歌を打つて置き

◇ 中 見 光 路

あれ丈けを言ふに二合の酔を籍り
酒の害いけぬ口から聞き飽きる

◇ 福田 鶴 蜂

肩揚げを申し譯けほご残してゐる

粒々集

御影 長 崎 柳 秀

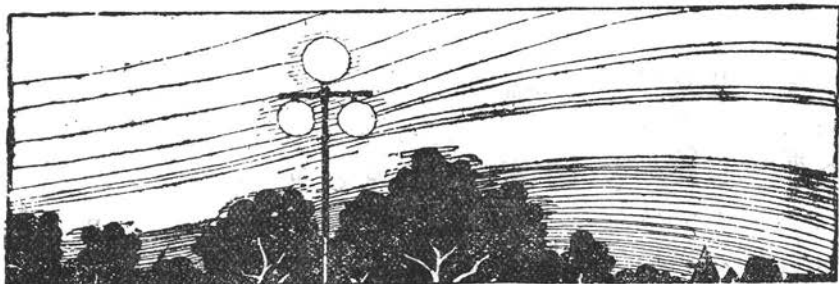
濕布するあばらの骨に目をそむけ
棒ねじに負けた脂手派手に見せ
保険金先きに呉れたらなと思ひ
すぐ戻る席は帽子を置いて立ち
唯主しのための盤を疑ぐられ

松山 前田 五 健

弾き初めの酔つた聞き手をやさ睨み
初鶏の遠さ近さへ明けて行き
春の街日本風俗繪卷なり

大阪 長谷川 一 徹

大將さ呼ぶ圓タクの手は長し
足音が高し押賣來しと見ゆ
愛の巢の西も東も資本主義
嫁けばひかぬ琴のピアノの
金持たば別な殊勝さ浮ぶらし



川 柳 幽 明 無 線 電 話

秋 農 屋

【其 七】

△無線電話交換手

●深翠亭十一世川柳

○秋 農 屋

○もしく冥土の十萬億番に繋いで、十一世川柳を呼び出して下さい。△承知いたしました……ハイ通じました。(君は十一世川柳さんだね。●何かまだ話があるのですか。○まだお話中だのに、君が退却したから、又呼び出したのだよ。九世川柳の選挙競争の時、最初に君は、太派であつたのに、後に義母子派へ寝返りを打つたのは、當時の社中の間に於ても、兎角の批評が有つたが、あれには何か理由があつたのかえ。●理由さういふ程でもないが、元來、僕は義母子黨であつて、太には心服してゐなかつた。然るにあの選挙に、青陽舎柳君の、熱心の勧誘に動かれて、厭々ながら太派になつた次第だ。選挙の結果、多數の投票を獲得した義母子君を、正統の九世川柳に見認めて、僕は太に尻を向けて、義母子君の方へ走つたのだよ。○さういふ理由で寝返りを打つたのは、先づ免すにしても、あの選挙の直後に、太が正風亭九世川柳に就いて、立机披露の句會を開いた時、君は此方にも参加し、祝評者になつたのは、所謂内股營業で、彼方へべつたり、此方へべつたり、實に見苦しい舉動だつた。●あれも僕の最初に師事した、松樂堂壽鶴君の懇請に依つて、祝評者になつたのです。○あの壽鶴さういふ男は、全く無節操で、八世が在世中には、それに阿諛して胡麻を搗り、八世が病死をするに、直に太の九世川柳の腰巾着になつて、髭の塵を拂ひ、その九世の死後には、義母子の九世川柳に附隨し、みづから二世柳袋に就し

た行爲は、昔の武士であつたならば、風上にも置かれぬ奴である。イヤ死屍に頼うつのは、詮無い事だから罷めやう。●僕も壽綱君には食ひつかれた。○綠亭九世川柳は、選舉の競争に苦楚を嘗めたので、將來の十世川柳は投票の選舉に由らず、豫め推定して置くのを得策となし、それには自分の姻戚の閑亭キマリといふ人を、候補者で定めた。此人は餘り學問は無かつたやうだが、神田の書肆であつて、温厚の性質であり、父を南錦舎樂雁といひ、伯父を三波夏沖魚といひ、俱に古い狂句作家で斯界の習慣にもよく通曉してゐた故、十世の候補者には、適當であつたらう。九世が自身に編輯發行した「柳風機關狂句の葉」といふ雜誌に、少しも筆を把らぬキマリを、編輯者の如く看せ掛けたが、あれも頗る十世に推薦すべき基礎を作つたものである。然るに不幸にもキマリは、九世より先に病死したので、切角の九世の畫策は畫餅に歸したのだ。君は九世に對して、物質的援助をしたやうであるが、その厚意に報ふ爲に、キマリの代りとして、君を十世の候補者としたのだね。●その説は事實に近いやうだ。○それならば九世が病死の直後、君は何故に十世を繼承しなかつたのだ。●實をいふとあの時に、僕が十世を繼承するのは、何だか嬉しいやうな、恥かしいやうな、又恐しいやうな氣がしたのだ。○處々が嫁に入つた晩のやうだね。●それはあの當時、僕よりも先輩の人が多く居たし、社中にも僕に心服しない人が居たからだ。其處で熟考の上、就任を辭退して、川柳の椅子は一時他の人に譲り事としたのである。○雪雁が十世を繼承した後幾年かを經て面白からぬ問題を惹起したね。●元來、十世は淺草區役所の吏員で、學事課に勤務してゐたが、明治四十二年の春、淺草區内の小學校の建築工事に就いて、收賄事件が勃發した。十世はその當事者であるから、其筋

の檢舉を受けて、身邊が頗る危くなり、安閑してゐる事が出來ず社中にも異議が生じた故、遂に隱退することとなり、頗て僕が十一世を繼承した次第だよ。其後、收賄事件は證據不十分の故を以て有耶無耶に葬り去られ、十世は僥倖にも汚名を蒙らずに濟んだ。○大正六年五月、君が病死したので、再び十世が出て主判者で成つた譯だね。併し十世の晩年には、社中の評判が甚惡く、後には厄介者扱いにされたやうだ。●あれはあの人之餘りに小刀細工をした故で、遂に人望を失ふやうに成つたのだよ。○先年、淺草廣小路に大火の有つた時、十世の宅が類焼の災に遭ひ、初代の眞蹟の、錦木塚回文の色紙と、川柳代々の印章を烏有に歸した爲に、宗家傳來の什物が皆無になつたのは、實に惜む可き事だと思ふ。●近頃、僕の聽く所に由れば、昔、九世川柳が水谷家より譲與された、歌川國貞筆の五世の畫像が、羽前の某氏の有さなつてゐる云ふが、それは事實かね。○其事は僕も聽いてゐるが、如何して某氏の手へ渡つたか、その徑路が少しも判らない。まさか十世が賣却したのではあるまい。●イヤそれが事實かも知れないね。○十二世川柳の號を賣物に出した程の十世だから、それも遣りかねないよ。何にしても十世は、評判が甚善くなかつた。火災に遭つて焼失したといふ錦木塚の色紙や、代々の印章なども、何處へかコカしてゐて、後日意外な所より出るかも知れない。●これで話を打切らう、左様なら。○イヤまだ話が残つてゐる。君に對して斯く云ふのは、少し失敬であるが、十世の時代より柳風狂句云ふものは、漸く下り坂になつて、次第に衰頹するやうだね。●昔の大句會には、三十六時間、一睡もせずに開卷披讀した事もあつたに聞けり、近世は朝より始めて夜の十二時前後までに披讀を終了するのだ。此一事を看ても、斯界の衰頹したのが判る。○もう此邊で罷めやう。●デハ左様なら。○左様なら。(完)



一路集

(募集句)

家庭

前田雀郎選

時々は脱線もしていゝ家庭
 失業へ亦た遺足の金が要り
 孫も来ず子も来ず二人庭いぢり
 零落れて話す 昔の家の事
 子が五人夜店へ息をつきに出る
 金談へ家庭の事情打開けて
 つめたき家庭にひそそ夜を抱く
 ステツキも靴も並べた新家庭
 鍵の要る所が多い新家庭
 零落はしても家庭がさうのこの
 お目見得へカーテン越し陽が入り
 子福者を羨んで子を借うてくる
 義兄さんになる氣の家庭教師で
 新家庭釘を打つ日の續くなり
 いゝ家庭ですなご妻を褒められ

没食子 桂枝 鯉友 勝二 山月 羅門 幸村 白柳子 世都象 佐保蘭 鳳石 靜太 奈緒美 新水

月給のたびに道具が殖えてゆく
 新家庭話が雑誌を見
 家庭てふ柱の艶に縛られて
 下駄箱に紅緒ミこけ茶新家庭
 妻逝きて冷たき家に錠をかけ
 こみ入つた家庭に若護婦にも
 母一人残して家中秋へ出る
 兒が出来るまでを大飼ふに決め
 出世していつそ家庭に親しめず
 麻雀を妻に教えて犬を飼ひ
 當分は赤字がつゞく新家庭
 歸へくライスカレーが待つ居る
 秀逸
 家持つて見らる漬物石もいり
 ラゲットを未だ持つて居る新家庭
 桂枝 いわを 愛緒 むら子 青兒 萬樂 練屋丁 蘭山 水車 慈雨來 憲坊 鐘生 明珠 薰



町之西 MEMO 雨 緑

▼創刊以來九十六號而も一回の延刊休刊も
 なく九年の春を迎へました事は、柳界に於ける
 記録破りであります。振り返つて見ますと
 悪戦苦闘もありましたが、愛讀者並びに寄稿
 家諸彦の多大なる聲援と同人社友の不斷の
 努力に他ならぬのであります。今後共一層の
 奮闘を期して皆様の御後援を祈ります。
 ▼長谷川一徹君が家庭の都合上同人を辭さ
 れることになりましたので、新に賛助員に推
 薦し今後とも本社を支持していただくこと
 になりました。
 ▼同人藤里好古君は客員に推薦いたしまし
 ました。
 ▼從來編輯事務を携つてゐた伊藤惠陀君が
 いよいよ編輯局同人に推薦されることにな
 りました。
 ▼社友山本丹路君は編輯局同人に推薦され
 今後この方面に大いに活躍されることにな
 りました。
 ▼南滿出兵者へ慰問品として「川柳雜誌」新
 刊號を五十冊帝國圖書館内日本圖書協會へ
 恤兵圖書として託送しました。
 ▼永田里十九君は社友から同人に推薦され
 ました今後の活躍を祈ります。
 ▼朝田新水君十一月廿一日多賀神社、御上神
 社、永源寺産根城へ廻遊されて當夜社友平井
 蒼太君を訪れ地酒に酔ひながら親しく語り

いゝ家庭世間話も知つてゐる 今雨
新家庭季節々々を面白い 銀雪
時々 は 話聲する新家庭 西英子
人
家庭持たして両親の熟睡 奇可愛
地

微笑

亂 耽 選

微笑して自分の心置き換へる 岩石
たしなめる口ほゝえみにも 變り 沒食子
微笑さ微笑 朝のあいさつ 柳仙
微笑して彼女は電車道を越え 裸人
微笑しただけがせめても收穫さ 湧三
微笑みに技巧を見せて逢ふてゐる 木偶人
微笑んで眠つてます 未亡人 むら子
口止を微笑はしかさ心得る 紅
微笑を一人知つてゐる 櫻炭 英賀夫
微笑を二つ 併べた姉妹 奇可愛
微笑みが中途で消えた冷たい眼 星光
ぬすまれたキスに疲れてゐる 微笑 民郎
大官の夫人微笑をうつされる とも坊
電柱の影に微笑の顔さ 顔 變人
微笑を悟られまいと口を拭き 素月

云ひ負けて家庭の疲れ考へる 民郎
天
險惡の家庭ラヂオを止めて居る 青兒
佳 作
妻より子より兎も角俺はくつろがん 耕民

住 田 亂 耽 共 選
伊 藤 緑 之 助

微笑をまごもに受て腫をつむり 沐天
上首尾へ不良微笑を交し 合ひ 深太樓
妙な誤植にほゝ笑む婦人 記者 柳路
微笑する後へ誰か来る 氣配 鳳石
微笑の手で書留の封を切り 菊路
その微笑この上金を出さず氣か 一久
御見舞へ微笑を返す 水枕 奈緒美
微笑んで小包中は何かしら 幸村
佳 句
角帽の對角線にある微笑 白柳子
ほゝえみを忘れし男夢も見ず 民郎
不可能な微笑の影の消え去らず 鴉夫
心配を腹に固めてゐる微笑 山月
蒼白く微笑を見せてゐる弱さ 白扇
安っぽい微笑に心もぎこちられ 白花子

一泊、翌廿二日若太君と京都すまゝと川柳會へ出席されました。

▼水谷結美君の令閨十一月廿一日午前零時十分目出席長男を 出産光男と命名されました。

▼松盛琴人君は十一月廿三日から四五日眼病でなやまされたようですが十二月二日夜の編輯會議には元氣よく出席されました。
「眼病は按摩のことを考へる」の句をよせられる。

▼松江支部の幹事久方墓秋君は家事の都合上田中部之介君と交替されることになりましたが從來通り巷二、墓秋、雪丸、天痴人、山紫、みさな、芥人、鐵扇、硯滴、玲人、蘭蝶、柳人の諸君と顧問あん馬、後援者喋朗紫吻華雪の諸氏と協力されて支部のため 御盡力下されることになりました。

▼西田紳樂君は十一月十四日日本ラインから大山へ清遊されました。

▼熊谷紅君は十一月十九日 塗料青年團と共に伊勢参宮をされて左の句を寄せられました。「脱帽の聲に團服固くなり」

▼伊藤緑之助君が幹事の 鋸川支部は本年が五周年に相當するので 紀念句會を催されたとのことです。

▼福田鶴峰君は十一月廿五日朝伯父の病氣で郷里へ歸へられましたが 小康で廿九日歸阪されました。

▼客員前田雀郎君の令閨令息が 病氣されてゐられますさうです一日も早く全快される様に祈ります。

▼柳川洲馬君は 山口縣の山口支部幹事とし

微笑んだ顔に秋の日柔かし 青 兒

微笑めばみな美はしき人の子よ 機見女

微笑よ僕を迷はせないでくれ おさむ

微笑める女を深く疑はず 洋々

微笑んだのが白狀をしてしまひ 明珠

微笑する彼女ネオンの色になり 錦石

微笑みしあの子も眼をさう裁く 慕秋

五 光

微笑へ妻便箋をふせるなり 繁堂

微笑にお前の隙を見付けたぞ 水車

人間の推理へ微笑してゐる星 春秋

安 價 な微笑女奇術師 有爲郎

微笑んで別々の事思ひ合ひ 吉絃堂

◇ 緑之助 選

佳 作

微笑めき寫眞はものを言はさる 吉絃堂

微笑を見きソブラノダルモンテ いわを

口許に微笑を残し死んで行き 鴉 天

微笑の幻近寄つてくるぞ 羅 門

置炬燵何を微笑む女の子 慕 秋

微笑の一人此の場を和けて 柳光子

鏡臺へ微笑む妻の明かさ 柳路

微笑をたゝえて少女の離れ業 丁路

思ひ出を一人微笑む 秋時雨 白 扇

心配を腹に固めてゐる微笑 山 月

その當座微笑み返す戀にして 沐 天

御見舞へ微笑を返す水枕 奈緒美

微笑の餘程いゝ夢見てゐるらし 菊 路

約束がしてあるやうに微笑みぬ 青 兒

微笑める女を深く疑はず 洋々

この繪が甲上かき微笑する 柳 仙

會心の微笑こぼれて二目勝ち 蘭 山

ひき出しの中の中から微笑んで 明 珠

微笑にお前の隙を見つけたぞ 水 車

乳呑んだ夢でも見たか片えくほ 紅 次

微笑めばいつそ淋しい女にて 柳 次

亡妻の友へ

こもすれば亡き妻の微笑がえ、 かすま

迷惑な返事は微笑してゐるだけ 吐 何坊

眞剣に説けど社長は微笑のみ 普 天

齒並びが悪く微笑の癖がつき 銀 雪

ほゝえみを忘れし男夢も見ず 民 郎

愚痴詠びつ女寂しく微笑みぬ 三 碧

固くなの友の忠告微笑まれ 荷 千

微笑した本心隠す事に狎れ 同 兒

空腹を妻の微笑にふさ忘れ 軒 兒

て活躍されてゐましたが十一月廿七日永眠されました。哀悼の意を表します。

▼大西八歩君は十一月三十日屋島に遊び左の句を寄せられました。「お茶うけに見る壇の浦お茶が冷え」

▼松盛琴人君から川柳用箋數百冊寄贈されました。

▼石川双葉子君は社友として承らく御盡力されてゐましたが今回家の都合で退社されこれになりました。一日も早く復活を祈ります。

▼多久和喋朗君から新春から月刊で「神火」を發行されるさうです。菊判二十頁内外で一部拾銭申込は松江市西茶町七〇ノ一島根川柳社へ

▼左の方から寄せ書が届きました。國館から花童子三休、鳶の家、紅露、三歩、多一郎の諸君。松江支部から喋朗、都之介、硯滴玲人、砂詩朗、天痴人、柳人、光朗、つる、その他の諸君。蛸壺川柳觀菊會から紋太、睡花、啞聲、洋村、清公子、了念、嶺月、鶴太郎、その他の諸君。川柳みなの吟社から瀧の人、懷窓、去風子、風然その他の諸君

▼本誌の編輯は路郎先生、琴人、山雨樓、町二亂耽、愚陀、丹路の諸君と私とで編輯致しました。尙當日河盛純子、竹内機見女の兩嬢が手傳つて下さいました。

新 誌 友

(六年十二月十四日まで)

「川柳雜誌」半年分壹圓八十錢以上拂込の讀者を誌友として、こゝに芳名を掲載します。何卒此際新讀者を御勧誘下さる様御願ひ申します。御紹介下さる方には「川柳雜誌」の近刊を見本として差上げますからお申込み

戀人のきこか淋しい微笑なり
去り際に無恥な微笑がこびり
微笑に技巧を見せて逢ふてゐる
同 木偶人

○

微笑する彼女ネオンの色になり
多く語らず冷たい微笑なり
微笑んで謙の豫感を受け
微笑したその唇の赤いこ
若き日の誇彼女は微笑する
雄々しきかなエプロンの微笑
辻褄の台ふ出鱈目に微笑まれ
ランペンよ何の微笑であつた
突然のキッス困惑した微笑
ソウダ水微笑み合つてそれで
一人ほゝえむ女の姿態
微笑めば顔くばかり他を恐れ
嘲笑に似たる微笑を買ひにけり
不可解な微笑の影の消え去らず
戀人の冷たい微笑ふこ見つけ
左から見ても微笑むプロマイド
紫山

人

微笑して彼女は電車道を越え
裸人
(評) 淫ら、近代性

人

あの時の微笑み既に虚偽なりし
(評) 腦裡をかけるものは何か？
鴉 天

地

微笑みの眉根に見せた戀ごころ
(評) 緻密な描寫
天 おさむ

天

盗まれたキスに疲れてゐる微笑
民 郎

ルービヒザア

清涼飲料

シンボル

大日本酒造株式會社



(評) 盗む者、盗まれる者、世はさまぐ
だ。里見岸雄にあらずといへど日本興廢
の前夜の一姿態である。

下さい(綠雨)

居附清一、乾楠保、八木均(末永貞雄) 岩橋
岩石、角田のぶを、宮岡義秋(關本雅幽) 岩
崎松代(岩崎柳路) 丸矢正一(福田山雨樓) 西
山幸子(麻生路路) 平野文太郎(小西無鬼) 古
谷金喜(西村山月) 三宅瀨二(橋本綠雨) 山田
羊司、田山美耶、山田鬼石、阿部佐保蘭、岩
崎辰之助、小原一正、長崎義照、播八郎。木
山さだな、小川柳馬、石崎千俣、酒井啞聲)
本社事務所(括弧内は紹介者)

前 號 正 誤

近作柳樹

血痰が無智を啜るてる如く出る
のびなして欠伸の底の愚をぞ知る
誰とでもうまの合ふ眼に隙がなく
下山した巷の秋は死んでゐた
齒車の軋むが如く十二月
蠅と雀と雑魚はレンペン
死を身を一氣に墊して打たれたれ
四頁、金屏風後ろに暗い陰を持ち
三頁、妻として見たい女と夜を居
八頁、腹の兒に逢ふ丈の夜を通ひ
沙 門
ト 居
沐 天
歎 乃
慈 雨 來
し と し
今 雨
鐵 洲

轉 居

岸本水府君は(大阪市天王寺郵便局前)
廣瀬三碧君は(大連市若狹町二四)

各地柳壇

＝れ創を句るあちのい＝



川柳雜誌社聯合忘年句會
京阪神支部

於 日本橋俱樂部

十二月六日

吉例となつてゐる 本社各支部聯合忘年句會は流石に廣き日本橋俱樂部も 鮮詰めとふ大盛會となり作句の大殿堂と化した、朝田新水氏は各支部を代表して 開會の挨拶をなし、萬よし氏は不得止支障の爲め不參に付山雨樓氏が之を代選される事になりて、いよ兼頭席題の披露となるや急霰の如き拍手を以て迎へられ會場、爲めに白熱化する柳人ないやが上にも熱狂せしめ 昭和柳壇の歳末を飾る柳界未層有は立ちて 兼て豫告せる「川柳詩人の夢」と題する講演に移る。先生一度口を開けば言々句々詩であり、川柳詩であり、川柳であり、代表的漫談となると折紙を付けられしだけ、當夜の講演は參會者一同に其絶妙なる話術に酔はしめられた。

其内容の一端を示せば「川柳は生活川柳となり川柳が藝術畫の如く賣れる時代が来る事を待つものだと假裝的一流の諧謔を交へて話されよりよき藝術的川柳を創れと熱辯を振はれ爲めに多數の參會者は興味溢る、一夜を楽しく過して十一時五分散會した。

尙當夜は寄贈賞品多數にて五客以上に呈賞し、且つ參會者一同へは 本社及支部より特別の寄贈品を分ち、入賞者は新進作家の多かりし事は最も喜ばしきもの、一つであつた。

終りに賞品の寄贈を賜はりし 各支部其他の諸賢へは厚く感謝の意を表すると共に 御芳名を列記し御禮申します。(鮎美記)

(賞品寄贈芳名) 机(壹) 梅田支部、桐箱入コ

ーヒ 茶胸半打入(壹) 守口支部、小形石鹼(百

齒揚子(四十) 御旅支部、ハモニカ(一打)

御池橋支部、石鹼(五) 神戸支部、丸額(貳) 天

王寺支部、額縁 一短冊ハサミ一卷戸、硯箱

(壹) 天満支部、上等巻煙草入一菓子器一盆
(壹) 塗青支部、置時計(壹) 堺支部、桐箱入
コーヒ茶胸半打入(壹) 京都支部、天龍仙(參)
紳樂氏、壽仙紙(百五十包) 里十九氏、おも
ちや(參組) 朝陽氏、駒下駄(參) 素人氏、川
柳手帳(六) 夢人氏、短冊(百五十) 綠雨氏「京
」雜誌讀券(參包) 紫明氏ハンカチーフ(一
打) かほる氏當用日記(貳) 二南氏
出席者

路郎、綠雨、水車、朝陽、里十九、鮎美、
公二、一杉、貴山、司郎、明三、柳笑、葉
平、柳甫、機見女、小柳子、岩石、喜由、
洋々、奇可愛、海石、鶴郎、紅、一坊、春
汀、愚陀、裸人、九葉、君夫、かほる、梨
花、明暗子、芋風、千春、瓢水、明珠、繁
堂、鬼笑太、華水、夜王、柳馬、德次郎、
春齋、白峯、戀人、一笑、二南、夢魚、み
つる、あや美、柳仙、秀樹、紫風、とも坊
おさむ、三笑、美津坊、卯三、觀月、坊茄
子、卜居、えいた、紋太、素生、睡花、旅
雨、睦乃、没食子、夕鐘、優五郎、苦茶坊
沐天、四五郎、倭之助、白柳子、柳次、雅
幽、晴山、曲豆、紳樂、山雨樓、默平、の
ぶな、弘、白石、夢裡、壤次、さだな、琴
人、町二、明、京郎、新水、鶴峯、よし
す、いわな、山茶花、雞牛子、清魚、小宰
相、久郎、黑天子、小松園、思案坊、亂耽
翠峯、壽仙、素人、笑子、翠夢、(出席題)
兼題 元 日 路 郎 選
飲んで出て飲んで戻つたお 元日 寄可愛
お元日此間に一寸飯にしやう

スエノ 翠草 同 柳 海 柳 秀 卯 山 茶 千 機 翠 同 柳 とも 方 曲 新 朝 夕 四 旅 た 毒 鬼 睡 蚊 紋 二
ノ 峯 風 甫 石 仙 樹 三 花 だ を 春 女 夢 次 坊 眠 豆 水 陽 鐘 磨 雨 つ 仙 太 花 十 太 南

掌をみてるばかりのお元日
 元日ももう留守番の女房なり
 お元日子供の影がまゐるし
 元日は反對黨の顔をせす
 元日を誘ひにゆけばもう居らず
 晝の炬燵へ元日夫婦きりになり
 願紐をかけて巡査のお元日
 元日になつて金庫をしめて寝る
 元日の吊革一つ宛譲り
 合越の中に元日日が宛譲り
 (五客) ハンドルは晦日の握り
 (同) 元日は蕪方を向いて押されて居
 (同) 透明な姿に還る お元日
 (同) 元日に放つ矢も暮れてゐる
 (同) 元日に行くよと二十九日なり
 人元日の足袋は着物の上に乗
 (地) 元日の玉子の殻の影うれし
 (天) 元日を表札見とく世話になり
 (軸) 元日の準備散髪したつけり
 兼題 奮 山雨
 十二月一つふやした夜業の灯
 奮闘の心に船は動き出し
 奮闘へ十六燭の下の妻
 奮闘のかひなしに戀も出来て
 夜の壁をつんざく音の原始力
 只一人残る選手をみな見す
 一年のあせとあぶらを餅に詰
 鉄ちびでちびて模範村の秋
 奮闘の汗メリヤスに吸はれた
 奮闘を祈る便りへ他人めき
 奮闘に盃を干す君と僕

緑腫のト葉紋鮎變黑鷄山櫻
 雨花ふ居平太美人天子子茶花選
 路紅トか素鮎奇雅司同明同豆同裸同山貴鮎
 郎居る生美愛幽郎暗子秋人樓山美

奮闘が斯ふでなかつた出前持
たる苦き過去奮闘の胸にすむ
ほろろ福神漬けで奮闘に
某がゆるいまゝに奮闘飯を食ひ
奮闘の氣分になつて家を借る
奮闘の歴史の中に死んで行き
決勝の最後の二人立ち上りた
奮闘は玄關番へ少し馴れた
奮闘は外套のえりを立てて居
奮闘の今日を嬉しく疲れてる
奮闘で築いた家へただの嫁
奮闘を故國のラジオうたがわす
滿洲の冬が大きい日章旗
形式的な奮闘にサイレンが鳴り
奮闘の俺を迷さざるものなし
もう一度奮闘する氣厚司を着
維音に生き奮闘をしてるなり
煙草の火かりて奮闘の手を見
奮闘すれど淋しき十二月
奮闘の院外團の顔の筋
奮闘の氣力も失せて丸う生
奮闘の電話しきりに鳴つて
奮闘のチツト叛いた處罰令
奮闘の甲斐棚揚げをされて
奮闘のメカネハ太陽照りつ
奮闘の過去あり土に生きて
奮闘へ方眼が違ふ廻り椅子
滿蒙の曠野に日本人の血ふ
奮闘を期し階段を馳け下り
奮闘の靴巾着のやうになり
奮闘も正月といふ髭を剃り
奮闘に同じところほころばせ

水車 草風 白柳子 久松園 紅峯春 千笑 柳杉 一睡花 九可繹 奇愛雨 旅王 夜甫 柳甫 鬼笑太 みつる 清魚 おも美 喜由坊 麥魚 小柳子 明暗子 亂耽 琴人 同 かほる

子の話親は自慢と思はざり
自慢することのないのが隅にある
そないふと自慢になるときなる
弱いのも自慢にしてる課長の子
轉び方もうまくなつたとスキー場
自慢の子父を酔はして寒くなり
自慢と自慢真面目くさつて
ごまかした事を自慢に畫の風呂
合縫に困る自慢を聞かされる
宅の事自慢も出来ていゝマダム
自慢してゐると御飯がこげてゐる
御自慢へ嫁の手柄の赤うゐる
酔へばする父の自慢へ淋しうゐ
厚司がけて訪ふても菊を見れる
叔父さんの自慢は白い壁を塗り
奥さんの自慢へ八百屋おいて去に
愚かさを知つた自慢の唇を拭き
自慢してボチが多くさん要るの也
トネルの間自慢話も絶えてゐる
ひつぱりあげてきかす自慢の金儲
自慢に取らねはつたら髭が云ふ
弱身の自慢を淋して聞いてゐる
自慢して歸つた後へ忘れてゐる
お自慢の髭に白髪の一二本
自慢の顔へ夕陽がうつる
齒車のまわりを知らぬ自慢なり
鏡だけみとめて呉れた自慢顔
出来榮へ伯母の家まで持つて来る
自慢話相手の膝を崩させる
得の行く自慢に逆らはす
自慢まだ續けて課長よいきげん

いわな 讓次 葉平 水車 保南 秀樹 鶴峯 白柳子 あや美 翠峯 黒天子 九葉 紳樂 觀月 琴人 旅雨 沐天 里十九 紋郎 柳太 柳馬 洋々 紅々 小柳子 變人 清魚 素生 海石

兄弟で自慢話の面白し
子の自慢話になつて腰が浮き
来る人が皆見せられる庭のこけ
一言も言わせず自慢聞かされる
(五客)公平な瞳で見えて欲し掩の腕
(同)孫の自慢日向のやがざりする
(同)つきぬる自慢の鼻もまたうれし
(同)自慢する弟子にたまつた飽屑
(人)見込まれて自慢法をかきめる
(地)風邪ひてからは自慢がこはなり
(天)子の自慢眼鏡がぐづつてくる
(軸)子を育てて自慢が一つあり
席題 蝦 朝

山茶花 四五磨 同 白峯 清魚 路郎 春汀 梨花 鮎美 九葉 二南 雅幽 雅選 陽 変人 鶴峯 夕鐘 雞牛 裸人 四磨 柳笑 新水 雅幽 旅雨 公二 白柳子 卯三 居

流行病蝦に警察目をつける
井の蓋から蝦の尾がのぞき
(五客)蝦一つはて魚も活きてくる
(同)おめでた膳蝦があり鯛があり
(画)伊勢蝦へキヤリの聲の勇ま
(同)寒空に蝦音もなく居坐れり
(同)初賓は蝦の姿を先づ撒げり
(人)ごん底の生活伊勢蝦皮肉すぎ
(地)折箱の蝦がはみ出たい機嫌
(天)正月の蝦を後に父は酔ひ
席題 握 手 貴

一 柳仙 清魚 明郎 司郎 明郎 乱耽 夢魚 睡花 朝陽 一杉 旅雨 秀樹 水陽 南陽 翠峯 新水 山雨樓 久幸相 明暗子 夕鐘

(人)何年も生きてる様な邪険なり
(地)一錢で無常の鐘をついて行き
(天)四十で死ぬとは知らず金も野
(輔)あくせくとして阿呆らしき人なされ
(同)とりまき淋しいものに見る
同路生彦

川柳雜誌社松江支部

みづく會師走句會

十二月一日夜 於龍昌寺、久方暮秋報
野に山にはた人生に限りない印象と来るべ
き年への飛躍をその師走の一日に育まれ
た人の世の運命に自らを生くべく民衆藝術
の殿堂に不斷の精進をつける屈指の柳士
喋朗、紫吻、三雷波、大鳥、都之介、柳人、
天痴人、雪丸、山紫、芥人、九紫、馬
耳朗、光朗、巷二、翠朗、硯滴、つる、蘭
蝶、暮秋の二十有餘名、此の夜同人池田山
紫氏入營送別句會を併せて早速句筵を敷く
推敵に發表に不安な胸をおのつかせつゝ終
りて席を岡田カフエーに移し有志者からな
る送別宴に夜更くるも知らず散會したは午
前二時前であつた、尙此夜市内砂詩朗、無鐵
砲、すみ子、及び遠く縣下木次町、岩洞山人
諸氏から兼題投句もあつた。

兼題バスコントロール 紫吻選

看護婦へ産兒制限笑はせる 柳人
里方は産兒制限嫌ひなり 巷二
又産んで産兒制限ごうなつた 山紫
動亂へ産兒制限忘れられ 砂詩朗
斷髪の子兒制限する氣なり 馬耳朗
調節を嘆ひ長屋で又産れ 喋朗

産兒制限祖父は危険なものにする
バスコントロールマダムお理給
産制を又狂はして一人出来
(客)産制に策を見つけた共榮さ
(客)胎動が愚案を笑ふかの如く
(客)産兒制限が羨しい淋しさ
(客)座談會産制につき露骨すぎ
(客)産兒制限それも蘭士の妻とし
(人)バスコントロール職業婦人異状なし
(地)サンガーへ面當てに似ては孕
(天)無踏服サンガーイザムを唱へつ
兼題 クリスチヤン 喋

天痴人
同
芥人
同
都之介
砂詩朗
喋朗
天痴人
同
硯滴
翠朗
九紫
無鐵砲
砂詩朗
芥人
光朗
玲人
都之介
雪丸
蘭蝶
同
馬耳朗
暮秋
同
紫吻
天痴人
九紫
光朗
吻

(客)再會に彼も眞面目に神を説き
(客)クリスチヤン悔を人に話し
(客)クリスチヤン神の試練に託託
(客)救世軍今日はあの角この場末
(客)グイアルにすがつた事が益
(客)讚美歌の娘の頭に灯がこぼれ
(人)黎明へエス感謝のある小窓
(人)も那兵も殺し給クリスチヤン
(地)クリスチヤン生誕身に無駄
(天)十字架へ身の潔白を誓ふ妻
席題 暴君 大

砂詩朗
大鳥
三雷波
硯滴
暮秋
同
天痴人
同
柳人
鳥選
柳人
都之介
蘭蝶
山紫
雪丸
芥人
同
喋朗
同
慕秋
玲人
同
三雷波
紫吻
同
蘭蝶
芥人
三雷波
喋朗

(地)悲しさを偲ぶ築港それでよし
(天)築港の廣さ(降りた寶もた娘
都之介 選

米若のフアン本當の顔知らず
都之介 選

米若が挨拶に來る 騒ぎなり
都之介 選

(人)米若を又聞かされる雨の夜
都之介 選

(地)米若を三問先きで云ひ當てる
都之介 選

(天)米若が好意がもてゝ未亡人
都之介 選

席題 あんげん屋 天痴人 選

あんげん屋愛想で包む女客
都之介 選

あんげん屋賣れ錢を不味く食ひ
都之介 選

あんげん屋孫の約束思ひ出し
都之介 選

一摘み家の子を取るあんげん屋
都之介 選

(人)まだ湯氣のぬる出すあんげん屋
都之介 選

(地)茶口にもぬるを出すあんげん屋
都之介 選

(天)食堂と別な天幕のあんげん屋
都之介 選

席題 虫にあらざる虫 幕 選

かんしやくの虫を殺して笑つて
都之介 選

虫の真すぎる事に非難は集まつて
都之介 選

からかはれ虫の好かない人にする
都之介 選

(人)言譯けは虫の好かないに
都之介 選

(地)年頃の娘についてたきざな虫
都之介 選

(天)泣虫へ密柑の数が不足する
都之介 選

川柳 梅田支部觀劇句會(大阪)
都之介 選

維誌社 十一月十六日 於中座 水谷鮎美報
都之介 選

光秀 切り髪を箱をたいて腹を決め
都之介 選

光秀も人の子なるが母の呼吸
都之介 選

馬盤の酒に魂ゆれてゐる
都之介 選

花道の光秀引つゝみかれてゐる
都之介 選

春永の短氣光秀嗤つてゐる
都之介 選

光秀が大きく光秀愛宕山
都之介 選

死なひるがへす光秀の反逆兒
都之介 選

所作事 所 作 事
都之介 選

白藏主たぐみに踊り消へ
都之介 選

所作事へ大きな欠伸してしまひ
都之介 選

二人狂々酔ふてお足がよくそるひ
都之介 選

所作事のお伽噺にまでも似たり
都之介 選

所作事の幕になるまで踊りぬき
都之介 選

所作事へ旦那は眞すひつけれ
都之介 選

銀の雨美聲は杵屋六左衛門
都之介 選

太郎冠者よ御舞ひ候らへ
都之介 選

七三で踊り手拭投げてゐる
都之介 選

河内山山海珍味退りぞけて
都之介 選

松江候無念の顔をしめて
都之介 選

緋の衣舌三寸の惡坊主
都之介 選

河内山山欠伸をつかみころし
都之介 選

河内山山しびれがきれてきたらしい
都之介 選

宗俊の眼にぜいたくな生活なり
都之介 選

大膳のすべし高類のほくらなり
都之介 選

宗俊の笑ひが凄くなつてゆき
都之介 選

緋の衣着て宗俊のおちつけり
都之介 選

雅幽居偶會
都之介 選

妻揚子ボロ／＼にして下戸はゐる
都之介 選

席題 妻揚子 妹尾燐人 報
都之介 選

妻揚子ボロ／＼にして下戸はゐる
都之介 選

妻揚子捨てゝ思案もついたらし
都之介 選

妻揚子からバレてきた嘘なりき
都之介 選

妻揚子かんで話しはまともならぬ
都之介 選

妻揚子嚙んで惡戯させてゐる
都之介 選

妻揚子チツプの事も考へる
都之介 選

妻揚子の父はなんでも聞いてくれ
都之介 選

妻揚子また來るらしい顔で出る
都之介 選

夕御飯子もまれてゐる妻揚子
都之介 選

冬ノピールの泡
都之介 選

十一月廿二日夜 水谷鮎美報
都之介 選

眞心
都之介 選

その眞心へ我が魂のとけゆきし
都之介 選

老ひし母のまごころを抱へ出る
都之介 選

まごころへ心で泣いてゐるばかり
都之介 選

夜をこめて縫ひし羽織のしつけ糸
都之介 選

まごころの眉濃き人の克つならむ
都之介 選

兄弟の心そるひし雪の道
都之介 選

弟のこころがうれし欲ひかる
都之介 選

まごころの涙がにじむ陽のひかり
都之介 選

ひかり集—その五—(大阪)
都之介 選

人生
都之介 選

生きてゆく途をお金にあやつられ
都之介 選

大臣のさて人生をなんとせむ
都之介 選

たばこ火か義て人生羨し
都之介 選

太陽の直射義足の牛生よ
都之介 選

煙突の一本立ちとにんげん
都之介 選

人生のシゲナル不意に赤となり
都之介 選

人生へ宵の銀杏の葉の香ふ
都之介 選

人生のまるみがほしいものばかり
都之介 選

(秀)零度以下歩哨足から冷て来る

柳路

(秀)交代の歩哨取敢ず巻藁

同

(人)静けさの底に歩哨の目が冴り

醉羊

(地)夜の歩哨犬の影にも氣を配り

阿喜良

(天)虫の音ハツカリ歩哨の身忘る

醉羊

(軸)歩哨線近く斥候の殺す息

深太樓

三味線の今日張り替へた猫の乳

柳路

親猫の箱に猫々々動き

同

猫丈けが店番をする晝下り

醉羊

鏡臺へ招き猫なご姐藝者

松代

物音へ猫本能の耳を立て

阿喜良

(秀)一正の猫でもめて暮し向

柳路

(秀)猫の戀獨身の身を考へる

醉羊

(人)茶屋の晝子猫を抱き舞妓来る

松代

(地)日曜猫を貰ひに夫婦連れ

深太樓

(天)猫の子の目に描ける電氣カバ

阿喜良

(軸)叱られた丁稚は猫の脚を踏み

同

(同)不治の身は今日母屋へ猫を抱き

同

憂うつな煤煙一つと見付け

日高阿喜良選

煤煙の中で朝顔咲くは咲き

仙淚

(秀)煤煙に寝るべし其人叱られる

松代

(同)白足袋の客に濟まい煤を掃き

同

(同)煤煙の大阪汽車で通り過ぎ

同

(人)煤煙の此處は撫順も零度以下

同

(地)煤煙も一緒に溜る慈善鍋

同

(軸)煤煙が辻へ溜つた旋風

同

(同)礦山の煤に雀の眞黒け

同

暗闇に一人なきたい戀を知り

仙淚

跨ぐもの跨いでスキツチ歸つて來

同

暗闇で探すマツチの置き所

柳路

暗闇へローソクの灯が除々に來る

同

信じてる女暗闇怖がらず

阿喜良

背の高い男に出合ふた闇の路地

同

公園の暗闇だれかまつて居る

松太樓

(五客)又も暗闇にして自動車過ぎ

同

(同)暗闇を夜警の若さわざと抜け

仙淚

(同)暗闇の空はつれんと星一つ

松代

(同)暗闇へ心覺えの手は探り

阿喜良

(同)どこからとも暗闇へさす明り

同

(人)暗闇でそこにヒューズがさす

柳路

(地)暗闇のマツチ顔だけ見えて消え

仙淚

(天)提灯が通つた後の深い暗

阿喜良

(軸)暗闇となつて眞面目が物足らず

同

題明治節

岩崎柳路選

六百里はなれて明治節の旗

仙氣

日章旗高く明治節の空が澄み

同

滿洲に住む身へ今日の明治節

醉羊

戸外テ一暖かつた明治節

阿喜良

明治節と云ふ市場の賑かさ

深太樓

丹精の菊を並べて明治節

同

(佳)四十五年の御治蹟忍ぶ明治節

深太樓

(同)祝杯にいさか酔ふて明治節

阿喜良

(同)病床に祖父衣を替へて明治節

仙淚

(人)明治節これから寒い

同

(地)式場へ菊一鉢の明治節

醉羊

(天)明治節丹精の菊眞盛り

仙淚

(軸)お邸へ菊賞めに行く明治節

阿喜良

晴山鶴峰對座吟 (大阪)

十二月九日

藤原晴山報

ホーナス

晴山

ホーナスに妻の希望も一つ入れ

同

ホーナスを前に夫婦は語り合ひ

同

ホーナスに妻は去年の額を云ひ

同

ホーナスは三越へ來ても足らず

同

綠雨居偶會

十二月八日夜

橋本綠雨報

熱心が近親になつて卒業し

雪降もいとす夜學に通つてゐ

熱心な編物へマダム肩が凝り

熱心解いて聞かせる交番所

熱心な心配してゐる親心

川柳雜誌社

十二月六日

兼題光

明るみへ光る涙のはづかしさ

さみしき虚榮に光るルビィ

思ひ出の波が光つてゐる渚

踊り子がふとグロテスクなライ

空つ腹西陽に光るガラス窓

春の棚香水瓶が光つて居

兄弟へ光つた靴が揃へられ

(軸)降りそつた空に星の閃めく

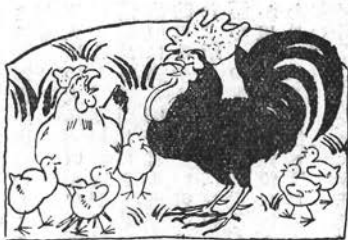
兼題文學

文學のことゝ女給とうまが合ひ

桃色のレター淋しいことばかり

文學の話へ知つた女給來る

奈緒美



編輯の窓

不朽洞 路 郎 生

▼一九三二年の春を迎えた。柳壇は柳壇としての飛躍がある筈だ。

▼本號には梅本秋農屋、長野吉高、蛭子省二、川村花菱、川上三太郎の諸氏の玉稿並に同人町二の「郷土作家かほる」等好讀物の鈴生りである。

▼本號は豫想以上に、原稿が輻輳したので經濟を超越して増頁したが尙充分に盛りきれなかつた。勢ひ、近藤鈴生坊氏、蛭子生氏等の原稿が次號へ送れた。筆者並に讀者、御寛恕を願ひたい。▼新春號二大讀物の一つは全國

計りでないことが知れる。まあ誰が人選したところで少々狂ひのあるのがホントかも知れぬ。

殊に短時日の間に計劃されたので、遠隔の地にある柳友は句を寄せられるのに時日がなく、大連の大島濤明氏、佐々木三福氏、井上麟二氏の如きは何れも飛行便によつてその責を果された。私達は、この舉が、斯くして完成したことに對して非常なよひこびを感じてゐる。その二は同人社友から募つた短文であるが、「私と〇」といふ自由な題を課したので、なか／＼面白いものがあつた。ソレ／＼その人のカラーがよく出てゐる。讀んで行くにつれて、吹き出さずにはゐられぬのもあれば、その人の生真面目がハツキリとうかがはれるのもあつて興味を盡さない。短文募集では尤も成功したものととしてよろこんでゐる次第である。

▼極月は本社の例會を廢し、京阪神各支部聯合會の後援をするこゝにした。聯合會は六日の

夜、日本橋俱樂部で開かれたが全く忘年氣分で非常に愉快な集りであつた。

私は席上「川柳詩人の夢」を語つた。本社の新春會では蔑乃が何か話すそう。蔑乃が川柳のために演壇に立つたことは未だ曾てないことである。果して何を話さんとするのであらうか。▼九日の夕、堺市役所樓上で開催された白鳳川柳會に出席した。この日から河盛市會議長も出席され、市立公民病院の人々もこの會に出席することとなつた。

▼十二日の夜、阪大川柳會の忘年會が、堂島の本みやけで開かれた。この夜、幹事役の丸島利生氏が東上不在、長崎柳秀博士が病臥欠席されたので、笠原路生博士が代つて幹事役をされた。句の批評後談に酒盃を傾け、十時過散會。散會後安斗仙氏と道頓堀で五分間寫真に興をやり、更に一盞を催して酒とろりの一夜をすごした。

十三日、日曜の午後から南地石堂で、御旅支部の忘年會。選

句披露後、小宴短冊の揮毫を終へて夕刻散會、それより本誌の編輯に赴く。

▼編輯室では例によつて、和やかな空氣によつて、ゲン／＼仕事が進んでゆく、時々洒落を飛ばしたり、重役（大して仕事をしないで大きな顔をしてゐるとすぐこの稱がたまつた）のやうに本社で重役と云へば亂駭、愚陀兩君の云ひであるが、その重役も近來はなか／＼よく働く／＼をからかつたりして時間の経つことなどは全く頭でない。世の中の人達が斯うした調子で働いたら首の心配などは少しも要らないのである。さういかぬところが浮世の面白いところなんだらう。

▼大連の大島瀧明氏からの通信によると、當地の廣瀨三碧君が瀧明氏を訪問したさうである。撫順にある柳路君も近く大連を訪れるやうなことが書いてあつた。斯うした交じはりの中に脈をうつものゝ川柳であることを思ふと川柳の法悦に浸る者のありがたさを感ぜずにはあられない。

▼萬よし君の「大阪無産新聞」

が出た。其社から同紙に對する希望を求められたので私は「如何に生くべきか、如何にすれば人間を幸福に導く事が出来るか」といふ方面に力をつくされんことを切望する」旨を答へて置いた。本社の賛助員嘉納純氏は「資本主義經濟の反面のみを見た僻見（ヒガミ）をなさざる様正しき筆を執られんことを切望す」であつた。私は「箇の人間として答へた。嘉納氏は資本家として答へた。萬よし君の主義が何處まで伸びるか大いに期待してゐる。

▼十二月の或る晩のこと、私は仕事に疲れたからだを夜の一時過ぎに家に運んだ。ところが机上に小包が届いてゐる。包を解くと北米セントラル大學文學博士哲學士秋田義明氏の「人とは何ぞや」の一巻が出て來た。交じはりを絶つてから既に十七八年になると思ふ、秋田氏が突然、著書を送られた私は、如何に疲れてゐてもそれに眼を通さずに眠むれない程の情熱が燃えた。私達夫婦の若かりし日を思ひ、思想上肝膽相照らして居た君を思ひ、ペットにもぐつて拾

ひ讀みをはじめた。人類史はじまつて以來のあらゆる思想を紹介し、且つ一々これに秋田氏の批判が加へられてゐる。私が讀む、妻が聞いてゐる。無政府思想のバクレーニンの頃で私と蔑乃とが、はしなくも議論をはじめた。蔑乃は義明氏の批判に賛した。私は社會組織を論じて、義明氏の説を駁した。バクレーニンの説によつて出る所以を蔑乃に諒解せしめ得たのが正に午前四

謹賀新春

昭和七年元旦

麻生路郎
麻生蔑乃

時であつた。常に黙々として私の説に聞いてゐる蔑乃がこの夜ばかりは仲々動する色を見せなかつた。私の「害」時代の句に仲々動じなかつた頃のことを思つて私は微笑を禁じ得なかつた。

川柳界で異端視された「雪」時代の句が今日無條件で川柳としてみとめられてゐることを思ふと、今日も尙、亞流の作家が蠢動しつゝあるを憫殺したくなる

のである。

▼金澤の久流美君が十二月下旬に年賀狀のトップを切つた。幾ら新聞人でもスピード化するにしてもこの年賀狀たるや四月に開催される金澤市主催の産業と觀光の大博覽會の宣傳ハガキである。蔑乃が横から口を出して「まるでおちいやん（故庵村）の年賀狀みたいや」と。「ソヤ／＼」と僕が應じる。（蘆村翁の年賀狀とは何故何錢の極彩色仕入繪葉書のこと）久流美君がこんなハガキを寄せるのも忙しい詩人の悲哀とでも言ふのか。

▼年末狀のトップを切られたのが東京の高島米峰先生であつた先生は郵便局の事務の多忙さを多少でも緩和させてやらうといふ意志から終始一貫年末狀を出してゐられる。

▼川村花菱氏の令弟川村治夫氏の作品「樹間の流れ」が帝展に入選した。社會的に踏み出したこの若い藝術家を後援する目的で畫會が開催された。會費は一口廿五圓、入會と同時に金五圓納入、殘額は作品と引換、但し尺五絹本、申込所東京四谷區鹽町三ノ四二、原豊成氏宛のこと。

投稿規定

▼投稿は、同様の原稿を、種々各題に別紙に各々認めて、住所氏名紙に雅な第一稿へて、投稿は、社友、同人、及推薦作家、近作、柳、春、秋、點、に、近、作、柳、及、光、耀、抄、の、作、家、中、より、優、秀、な、作、家、を、第、一、線、欄、へ、推、薦、す、る、もの、と、す、

▼各地の原稿は、半紙判の文章は、二十字詰半紙判の原稿紙に認める書體は、なるべく楷書、川柳、雜詩、原稿、と、封、筒、に、未、記、する、事、

▼締切は、嚴守された、

▼投稿其他につき、御問合は、すべて、返信、封入の、事、

募集

第九卷第三號課題

一月五日締切

(各題十句以内)

近作柳樽

安井ひろし選

表情

川村花菱選

洋室

岩崎柳路共選

第九卷第四號課題

二月五日締切

(各題十句以内)

近作柳樽

松丘町二選

妻

橋本綠雨選

空想

岩本素人選

每號募集

春秋點

麻生路郎選 (五句以内)

光耀抄

麻生茂乃選 (無制限)

各地柳壇(會報)

文章(評論研究感想吟行漫文)

社告

社務一切編輯に關する件、投句、應讀廣告の用件は、下記川柳雜誌社事務所に願ひます。

定價

一 部 金 參 拾 錢
 半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
 壹箇年前金(特輯號共)參圓六拾錢
 (半ヶ年前分以上御送金の方に、は投句用箋を贈呈致します)

料告廣

本誌への廣告に就きましては、本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます

▼御送金は、郵便口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であり、また、諸代受領は送金によつて御承知願ひます。送本封紙に前金切の印ある時は、直に御送金を願ひます。▼御希望により、集金郵便を差立てますが、御不在中、でも、頂ける様に願ひます。但、集金郵便(一年分)には、定價の外に手数料十錢を申し受けます。▼御注文には、何月號よりと御指示願ひます。▼轉居又は改名等の節は、舊新併記して御通知願ひます。▼川柳雜誌に關する御用件は、個人宛にしない事

昭和六年十二月廿五日印刷

昭和七年一月一日發行

第九卷第一號 (毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 大阪市西成區千本通五丁目七番地 麻生 幸二 郎

發行所 大阪市西成區千本通五丁目七番地 柳 幸二 郎

事務所 大阪市住吉區平野西之町八三番地 電話 天下茶屋二五七九番 電話 三番地

振替大阪七五〇五〇番 電話 天王寺一六七番

柳 幸二 郎

振替大阪七五〇五〇番 電話 天王寺一六七番

店書捌賣

(大阪) 大賣捌 二盛社書店。(明文堂 其他 市内 各書店)
 (東京) 仲見世 玉森堂(神戶) 米田、後藤、實文館(函館)
 石塚(京都) 三宅(松山) 弘文舎(石川縣) マコトヤ

道ブラから公立社の棚へ

圓本の洪水から、本が非常に安くなつた。本は寶石なごのやうに高價なるが故に尊いのではない。寶石よりも尊い本がこんな安く買へる時代が來たことは我々讀書子にまつては有難いことだ。安い本をもつて安く讀む方法はない。本を買へばいい。古本云つても虫食本のことはない。古本が非衛生的に考へられてゐる時代は遠くの昔に過ぎてしまつた。道ブラの次で公立社の棚をのぞくことを一つの趣味としておすゝめしたい。(路郎生)

古

本

は

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました。從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

賀正 公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入
電話 南 五 六 二 番

短冊頒布

筆者 麻生路郎先生

上 短冊一葉金參圓送費不要
作品は入金順に發送、振替
は大阪七五〇五〇〇を利用
されたし(句の希望の方は
お知らせ下さい)
大阪市住吉區平野西之町
八三番地
川柳雜誌社事務所内、
短冊頒布係

新春川柳會

昭和七年初頭の句會を華々し
く開きます主幹ノ講演と共に
有意義な一夜を過す事が出來
るに存じます。川柳家はもこ
より川柳を始め作つてみよ
うといふ方々も振て其越し下
るやうお待ちします。

日時 一月五日午後六時半

會場 大阪市南區日本橋一丁目

交又點北辻東入日本橋俱樂部

電話 南三四二四番

兼題「力」三句 路郎選

會費 金參拾錢 麻生霞乃

記念撮影。出席者には肉筆の短

冊一葉並に兼題三光に呈賞

天王寺文部會

日時 一月十一日午後六時 大阪

天王寺區大道三於内藤製作所内

兼題 獅子舞 五句 水車

(幹事) 豆秋、鶴峯、水車

綠雨居畫の會

一月七日午後一時より

兼題「餅」
會費 不要
本社事務所にある他の柳誌を
見ながら語りませう。
別に案内狀は出しませぬから
御遠慮なくお越し下さい。(綠雨)
場所 住吉區平野西之町八三
番地 下野線 市設住宅
(下車東南約四丁) 市設住宅

懸賞川柳募集

題「化粧」
一月十日締切
その他雜吟
▼用紙 官製ハガキ(化粧柳
壇と明記の事)
▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す
大阪市内西成區千本通五丁目七
▼投稿 麻生路郎氏宛

化粧新聞社

大和國石上神宮

常夜燈獻納 念獻句を募る

石上神宮は小宅代々の産土神の

關係上亡父遺言により今回常夜

燈を獻納することになり願致し

ます 柳友諸兄の献句を御願致し

課題「先祖」五句 麻生路郎選

締切 昭和七年一月末日限

發表「川柳雜誌」小冊子 投稿

者には小冊子贈呈 一六

投稿所 大阪東區粉川町一六

生田翠夢宛

謹
賀
新
年

大
島
濤
明

大連市西公園町
川柳居平洞

正 賀

川柳維誌神社戸支部
西豊小夏喜首日
村田原川多藤野
明繁鬼笑笹春竹華
珠堂太舟秋風水

正 賀

川柳維誌
御旅支部

(二一三五東電) 方井櫻二橋人農區東市阪大

生 田 翠 夢

東區粉川町一六

梅 村 路 烏

東區淡路町三丁目

松 田 多 郎

東區和泉町二丁目

福 田 香 雨

東區島町二丁目

江 戸 み っ る

東區粉川町生田方

櫻 井 圓 角

東區農人橋二丁目

北 川 あ や 美

東區内久寶寺町三平次特許方

謹 賀 新 年

川柳雜誌社塗青支部

今 小 中 上 上 熊 山 松 江 淺 岸 肱 樋 元
 川 川 見 岡 下 本 村 上 井 口 吉
 波 雅 光 笑 櫻 淡 繁 謙 錦 悅 天 木
 計 紹 路 光 四 紅 崖 海 坊 公 石 洋 柳 馬

事務所
 大阪西區北堀江二番町
 塗料青年團事務所

賀 正

川柳雜誌社鶴町支部

大阪市

井 上 稔 枝
 岩 橋 岩 稔
 石 村 正 路
 西 村 山 月
 古 谷 愚 圖 坊
 林 藤 し げ 笑
 加 藤 一 子
 松 下 小 柳 明
 吉 崎 の ぶ 明
 角 田 白 峯
 宮 岡 寬 柳
 照 屋 寬 柳
 永 川 秋 月
 妹 尾 變 人
 關 本 雅 幽

港區鶴町三ノ一二六
 同 鶴町三ノ一一〇
 同 鶴町一ノ一七
 同 鶴町三ノ一一二
 同 鶴町三ノ一一二
 港區三軒家市場通り二ノ四六
 同 泉尾中通リ一ノ六五
 港區三軒家西二ノ六
 同 泉尾中通リ一ノ一〇
 同 鶴町一ノ二四
 同 鶴町二ノ七四
 同 鶴町一丁目市電寄宿舍
 同 鶴 市電公舎
 同 鶴町四ノ一六四
 同 鶴町三ノ一一〇

謹賀新年

川柳雜誌社梅田支部

水谷鮎美

大阪市此花區龜甲町二丁目七九

小寺鳴玉

兵庫縣武庫郡大庄村字西榮地四九五

本橋坊茄子

大阪市北區金屋町二丁目一七
電話堀川五一番

天野ト居

大阪市住吉區喜連町二一九六

川村觀月

大阪市西淀川區姫島町一七二四

姫田夕鐘

大阪市港區東田中町八丁目四四

上久保まさる

大阪市西淀川區浦江町上二丁目五八

都藤古木

大阪市此花區上福島北三丁目十二

永田里十九

大阪市南區疊屋町六

横田方眠

大阪市西淀川區姫島町五二一

謹賀新年

川柳雜誌社天王寺支部

尾崎海洋人

西區南堀江下通二丁目

釜本柳村

天王寺區大道四丁目一八

吉田水車

東成區片江町四五三

高木敏坊

泉南郡春木町二五〇

中野裸人

浪速區惠美須町二ノ三二

久保田柳民

天王寺區大道四丁目三七

福田鶴峯

天王寺區北河堀町六二

須崎豆秋

住吉區旭町三丁目一四

賀

正

螢ケ池支部

茨本奈緒美

石森靜太

碓中一流

畑中康夫

龜井愚寵

梅田吞吸

丸橋松雨

松井十夫

赤城晴夫

佐藤青鬼

三谷梨風

都鬼子

濱渦

鳥谷伊勢子

(女子部)
(イロハ順)

賀正 池澤 樂居 南海電車 大阪府下高師ノ濱	賀正 長崎仙太郎 大阪帝國大學醫學部 柳 秀	賀正 阿部 閑生 大阪市外豊中 千歳通二丁目
賀正 中澤 濁水 高知市本奥力町	賀正 富士野 鞍馬 東京王子堀ノ内一三四	賀正 朝田 新水 川柳雜誌社守口支部 大阪市外 守口町車庫裏
賀正 岡田 陽喜亭 大阪東區鎗屋町二ノ二六 電話 三二二二番 山中に付き年末年始の 御挨拶缺禮仕候 山 本 丹 路 大阪市住吉區 住吉町九五一ノ一 電話 我三九二	岩垣 奇可愛 ご存じの聲で新年お目で度う 初日の光波鷄の音波も嬉しそ 東淀川區天神橋筋七ノ一三 日 本 號 藥 局	

謹賀戰勝新年

中野柳陽

滿洲開原

大阪市東區今橋二丁目
關西土地株式會社

賀正
八田鐘生
大橋素月
竹原久
小西無鬼

賀正
上野錦水

石川縣小松町本折町
電話五十八番

賀正
岩本素人
岩本武子

大阪市外守口町大枝二〇二

賀正
阿形一杉
三輪夏曉

南海鐵道難波案内所

南海電車

賀正
竹內多聞

大阪市住吉區住の江

賀正
川柳雜誌社
田邊支部

辻左馬
和歌山縣田邊町中屋敷町

賀正
水田光穗

兵庫縣加古川町大川町

賀正
川柳雜誌社松江支部幹事
田中都之介

松江市榮町

賀正
橋本綠雨

大阪市住吉區平野西之町八三
電話天王寺一一六七番

謹 賀 新 年

各位ノ御健闘ヲ祈ル

川柳雜誌社

御池橋支部一同

西區四ッ橋南
日本樂器會社大阪支店內

賀 正

増田耕民

鳥取市川端町一丁目

杉谷湖山

鳥取市職人町

東大阪の一角から新人の
手によつて生れた蠅蠅に
御指導下さい

蠅蠅川柳社

大阪市東成區鳴野町
三〇〇ノ五〇三

河野夜王方

賀 正

滿洲撫順東二條通五八

同人 岩崎柳路

誌友 堀深太郎

誌友 岩崎松代

滿洲撫順北臺町五丁目三ノ二〇

賀 正 撫順川柳社

日 高 阿 吉 貢

賀 正 撫順川柳社同人
松田醉羊

賀 正 撫順川柳社同人
安武仙淚

賀 正 撫順川柳社同人
高橋俵堂

賀 正
今村吉朗
尼崎市中大物町六〇

賀 正
阪崎串二
尼崎市中大物町五一

賀 正
清水虛白
尼崎市西大物町五一

賀正 松盛琴人 大阪市此花區上福島南三丁目六六	賀正 西田艸樂 大阪市東區岡山町三七四 電話東二二八二番	賀正 金泉萬樂 尼崎市西本町北通 二丁目五八	賀正 高田茶撫朗 石川縣大聖寺町魚町	賀正 前田五健 松山市真砂町二二	賀正 久田狂水 月刊誌「あけぼの」金十錢 福島縣石城郡磐崎村
賀正 山本靜香 大阪市南區上本町二丁目一六	賀正 福田山雨樓 大阪市浪速區湊町保線事務所 電話戎一〇〇三	賀正 木村晃卓 川柳雜誌社別府支部 別府市下野口	賀正 名越不然 神戸市灘區大石一五ノ九	賀正 岡崎桂枝 大阪市北區澤上江町 二丁目十五番地	賀正 岡崎房子 大阪市北區澤上江町 二丁目十五番地
賀正 高橋かほる 大阪市南區北炭屋町二〇一 電話南五九六番	賀正 一柳憲坊 大阪市東區下味原町交叉點	賀正 伊藤綠之助 川柳雜誌社釧路支部 島根縣今市町塚根尾方	賀正 横山勝二 奈良縣吉野郡下北山村池原	賀正 三好計加 愛媛縣道後湯之町	賀正 池田雪峰 三重縣飯南郡柳田村豊原 電話四番

賀正 小原 一正 京都市東山區富永町繩手通東 小原 定藏 内	賀正 吉川 啞人 山口縣久賀町 電話 十四番	賀正 大久保 大夢子 大阪市住吉區阿部野筋 二丁目三五	賀正 竹内 雀子 郎 備中笠岡 殿川	賀正 安井 ひろし 忌中につき年賀缺禮致します 大阪市港區四條通三丁目卅一	賀正 窪田 銀波 樓 金澤市裏古寺町一八ノ二 電話 二七九〇番
賀正 中見 光路 大阪市西成區粉濱西之町 三丁目三番地	賀正 中西 久郎 大阪市北區天神橋筋三ノ二五 電話 堀川七五番	賀正 小河 柳馬 大阪市東成區鳴野町 三〇〇番地	賀正 大西 八步 大阪市東區博勢町一ノ一八 竹中方 平和亭	賀正 高峰 柳兒 「絲の街」一ヶ年六拾錢 長野縣須坂町絲の街川柳會	賀正 清水 白柳子 清水 三坊 大阪市東區空堀通一ノ七六
賀正 中島 鐵洲 川柳雜誌社鳥取支部 鳥取市川端町	賀正 竹内 機見 女 大阪市天王寺區上本町六丁目 千秋園	賀正 松丘 町二 大阪市東成區別所町五〇二	賀正 住田 亂 耽 兵庫縣武庫郡魚崎町 五九二八ノ二	賀正 伊藤 愚陀 大阪市東區仁右衛門町 五〇八ノ上	賀正 竹田 芦 穂 大阪市港區八條通二丁目

筆墨文房具卸

おきふ筆本舗

多田 幸太郎

大阪市南區順慶町一丁目
電話船場 四三七七番

謹賀新年

和漢洋醫院

大阪市南區長堀橋一丁目
電話南四一八八番
醫學博士 長谷川成一
私宅 大阪市東區大手通一丁目

賀正

色紙、短冊の御用は

大阪市東區安土町堺筋西

川柳雜誌社指定

書畫用品 商 和正堂

電話 本町二一六番
振替大阪九一七五番

探偵部

相談部

結婚調査、家出人捜査、素行動靜調査、資産信用
特許侵害偽造探査等探偵調査ノ依頼ニ應ズ
家出人ノ捜査、子女ノ教護等ニ關シ無料相談ニ應
ズ

赤埴探偵社

本社 大阪市東區北濱一（電長本局二三七一）
連絡社 東京、廣島、徳島、京城、上海、大連
（營業年中無休・秘密嚴守）

優 質 廉 價
ト ラ 印
靴 ク リ ム ム

需要益々

激增す

トラ印靴クリームのもつ
ト―たる優質廉價は愈々
不斷の研究で大量生産に
より遺憾なく發揮し急速
の需要は時々刻々本品に
集注す今や白熱的需要の
激增を見る本品に依りて
靴の美を甦し給はらん事
を御奨め申します

ボックス、カーフ製革靴ニハ瓶入ヲ御使
用アレ

キッド、カンガル製革靴ニハ罐入ヲ御使
用アレ

賀 正

力 ナ メ 喫 茶 店

朗らかな心ミ愉快な顔は

一九三三年の

カナメ喫茶店より

柳人は特に歓迎いたします

大阪市南區麩屋町周防町

東入南側

カナメ喫茶店

柳 人

永田里十九經營

の特讀のみ

東北饑饉の慘狀

大阪市豫算の解放

貨幣安全か人間安定か

全農本部 大大阪 S S 生

主幹 庄 健 一

大阪無産新聞

新年號

毎月二回 五日・二十日發行

購讀料 一部五錢 半年六十錢 一ヶ年一圓

發行所

大阪市南區日本橋筋四丁目

大阪無産新聞社

電話 戒三八七三番

故辰巳利夫(籬楓)遺著

歌籬楓集

嚴 楓 叢 書 第 一 篇
四六版約二五〇頁、歌數約六五〇首
他俳句、川柳數拾首、口繪四葉
裝 幀 安 江 不 空 氏
一部印刷實費 金壹圓五拾錢

籬楓集がやつゝ出來あがりました。はじめのよていでは、約一五〇頁位におさまるものゝ考へてゐましたが、出來あがつたものを見るに二五〇頁の大冊になつてゐます。用紙も最上級のものを用ひ出來るだけ立派にしたつもりです。部數も三〇〇を限りました。賣るためにつくつたものではありませぬが、特に求めてよわでいたゞける方々へ實費で御ミゞけ致したいと存じます。直接御申込下さつた方々へは本の扉に小生自ら亡弟追憶の歌一首を記すことにしてをります。その詠風については今あらためて申すことをやめませう。川柳はすべて本誌上に發表したもので充分な惟察ねがへるだらうと思ひます。別に、佐々木信綱、安江不空、相馬御風、岡野直七郎、麻生路郎諸氏がそれぐの立場から序文をよせられ、小生は卷末に追憶文をしゝめました。こんなわけで彼に對する同情者が一人でもよけいにあつてほしいことをのぞむでます。なほ、この歌集は「嚴楓叢書第一篇」とし、以下舍中のものをつぎつぎに公刊するつもりであることをつけくはへて記しておきます。

(兄利文記)

嚴楓社發行

申込所

竹柏會大和支部

奈良縣高市郡畝傍町
振替大阪七六二八八番

弊社の工場

謹賀新年

設備

輪轉機と數臺の印刷機械、活字鑄造場あり、就業人員七十餘名、活字豊富にして新聞雜誌等の印刷は弊社の最も得意とするところなり。

營業種目

新聞雜誌印刷、圖書出版引受、紙型鉛版活字製造販賣各種製版印刷、其他附隨事業一切

藤本兄弟社印刷所

大阪市東區農人橋二丁目

電話東一七〇番七七〇番
振替大阪八二八四番

清 酒

白 鶴 禮 讚

白鶴をチントンシャンミ提けて来る
午後六時白鶴が待ち妻が待ち
百事意の如く白鶴呑んでゐる
白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
腰掛へ白鶴狭う飲むうまさ
來意も聞かず白鶴の猪口を強ひ
白鶴が縁こはなりぬ君こ僕
白鶴に素直な父こなつて寝る

攝津灘

嘉納合名會社釀



にきびとり

美顔水

心ある家庭には是非常備せられたき皮膚衛生藥

(一) ニキビ、吹出物

婦人は固より男子方でも、ニキビや吹出物の多いのは見よいもので御座いませんが、この藥は頑固なニキビや吹出物にも確かな効能がありますので、信用を博して居ります。

(二) 蚤、蚊、南京虫

その他毒のある虫にさされた時、この藥を附けますと、不愉快な痛さや痒さが止まり、さされた跡が

(三) 皮膚を美しくす

腫物などになる事が御座いません。蚤や蚊で夜おき方のムツかる時など、この上ない重寶な事がわかりになります。斯ういふ藥ですから、常用すればニキビ吹出物を防ぐは勿論、皮膚は次第に磨きこんだ様に綺麗になり、顔の美しさを増しますので、心ある御家庭に常備せられて居ります。



元賣發

販大・京東

館天順谷桃